
The legend of Mermaid

蒼嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Legend of Mermaid

【Nコード】

N4313A

【作者名】

蒼 嵐

【あらすじ】

とある街を流れる川。その川に纏わる大昔の悲恋の人魚伝説。そんな伝説を信じていなかったこの街に住む高瀬明日菜。ある日、明日菜を探していたという不思議な少年・天原渚が転校してくる。渚は、明日菜は伝説の人魚の生まれ変わりで、渚はその相手の生まれ変わりだと言う。彼に出会ったことで、明日菜は伝説に巻き込まれて行く…。

プロローグ（前書き）

お手にとって頂き（？）ありがとうございます

恋愛ファンタジー

ファンタジー色は軽めの 一人称小説です

現在 手直し中

長々と放置ですいません

第1話 大幅に手直ししました（つもり） ストーリーに変化はありませんが 情景描写等 今現在の私の技術で出来る限り増やしました（つもり）

よければご覧下さい

プロローグ

《プロローグ》

『人間と人魚の運命の果て 禁じられた恋破れて
サレスと ライティス

1689年12月18日 ここに眠る…』

街の真ん中を流れる、大きく水の綺麗な川、『御人魚川』^{みとな}。
『御人魚川』にまつわる、大昔の人間と人魚の悲しい恋物語。
そして、その二人のお墓だという、御人魚川の川原にたつ古い石
碑。

全て、作り話だと思ってた。全て、自分には関わりのないこと…、
他人事だと思ってた。

彼に、出会うまでは…。

今再び、伝説が始まるうとして…。

キーンコーンカーンコーン……。

「……ふあゝ……っ」

6月の終わり。もうじき夏本番を迎える太陽は、朝だというのに
ギラギラと暑い。そんな太陽に照らされて、私は教室の窓側一番後
ろの席で大きなあくびをした。

教室の中は前期中間試験も終わり、近づく学祭と夏休みに向け少
し浮足立っている。私はそんな級友達に混じろうともせず、ボーッ
と座っている。

私の名前は、高瀬明日菜。

県立河守高等学校1年6組。成績上の中、運動神経中の上、ルツ
クス平凡、肩に付くか付かないかのストレートの髪はまとめるでも
ピンでとめるでもない。

愛想は悪く一匹狼。友だちは少なくクラスでも浮いた存在。

特徴、『青みがかった髪と極端に色素の薄い瞳』。

「転入生を紹介する」

いつの間にか始まっていた朝のショートホームルーム。いつの間
にか来ていた担任の風見先生が言う。

転入生……？ なんか季節外れ。夏休み直前なんて。夏休み後じ
やダメだったのかな。

「入っただい」
「ハイッ」

先生の言葉に、ドアの向こうから元気な男の子の音が聞こえた。なんかちよつと子どもっぽい感じの声。『男』と解つてのことだろう。クラスの女子からザワメキが起き、皆の視線がドアへ集中。私も一応ドアの方へ目を向けた。

ガラツ、と、勢い良く戸を開けて一人の背の高い男の子が入ってきた。と同時に、女子から黄色い歓声が起こる。

「天原渚君だ」

先生は黒板に彼の名前を書きながら言った。

『渚』？　なんか変わつてる。女の人みたいな名前。

その転入生こと天原渚君は、少し童顔で女顔、こういう顔を美形つて言うのかな。背はすらつと高く、180cm近い様に見える。

そして何より、髪の毛が日本人とは思えない位茶色、というか栗色。『男』、というものに興味のない私にも分かる。いわゆる、『モテる』タイプの男の子だった。

「天原渚です。どうぞヨロシクお願いしますっ」

天原君は、先生の隣でペコツと頭を下げ、元気良くそう言った。

なんか、良く言えば『元気良く』かもしれないけど、悪く言えば精神年齢低そうな感じ。

と、私にとつての彼の第一印象はこうだった。興味のない男の中でも更に、苦手なタイプだなあ、と感じていた。

その時、キョロキョロと教室を見回していた天原君と目が合った。

トクン、と、小さく心臓が跳ね上がった。

私はそんな自分に驚き、思わずさっと彼から目を反らした。

「先生」

すると天原君は、一呼吸置いて口を開いた。そして突然私のいる方を指差した。

「先生っ。僕っ、彼女の隣に座りたいですっ!!」

は？

突然の天原君の言葉を理解するのに、私は少し時間がかかった。私だけではなく、クラスの皆が、先生までもが口をポカンと開けて目を丸くしてる。天原君だけが、凄く嬉しそうに私のいる方を見ている。

か、彼女って、私のコト？ いやでも……、私の前の席にも女子はいる訳だし。まさかよりもよって私をなんて……。

「か、彼女って……？」

先生がボソツと言った。正に私の気持ちを代弁するかの様な言葉だ。

「え？ だから、窓側一番後ろのあの娘ですっ!!」

教室の中が一気に騒がしくなる。

な、なんで？ やっぱり私なの？

さっきまで天原君にキヤーキヤー言ってたミーハーな娘達が怪訝な顔を私に向ける。

「ねえ、先生！ いいですよ？ 彼女の隣、都合良く空いてるしっ」

天原君は、ニコニコ顔で先生を説得する。

まあ、偶然私の隣が空いてるのは確で、ここしか空いてないのも事実。だから彼がここに座るのは必然……。ではあるけど……。なんだってわざわざご指名で？

「先生っ」

啞然としている先生を急かす様に天原君は言う。先生はまだ呆然としている。

「あ、ああ。あそこしか空いてないしな……」

「やったっ！！」

呆気に取られたままの先生の言葉に、天原君は目を輝かせて喜ぶ。そして、スキップする様な軽い足取りで歩いて来て、私の隣の席にストンと座った。私はまだ呆然と、そして何と無く天原君を目で追う。というか追わさってしまう。

それから天原君は私の方を向き、ニコーツと少し子どもっぽい笑顔を浮かべた。

「初めましてっ、天原渚ですっ。ヨロシクッ」

「ヨ、ヨロシク……」

私は何か度肝を抜かれた感じで、流れに流され答えた。終始ニコニコ顔の天原君は更に続ける。

「君の名前は？」

「た、高瀬……、明日菜……」

「明日菜ちゃんか。ヨロシクねっ」

なんなのこの男は……。

教室はガヤガヤ騒がしいまま。天原君にキヤーカー言ってた娘達が、あからさまに悪意の目で私を見る。先生は気を取り直してショートホームルームを進めてる。天原君は、相変わらずのニコニコ顔で私を見る。

一体なんなの？

私の隣が都合良く空いていて、転入生が座るのは当たり前前だけど……。なんだって、なんだってわざわざ私を……指名で？

訳がわからないよ。

「高瀬さんっ」

気が付くと朝のショートホームルームは終わり、私の机の周りに数人の女子が立っていた。天原君に対し、黄色い声をあげていたミィハーな娘達だ。

なんだか皆、怖い顔をしている。私は顔を引きつらせて口を開く。

「な、何……？」

「天原君とはどういう関係!？」

彼女達は口を揃えて言った。私は、目が点になる。

私、からするととても唐突な言葉だ。でも、彼女達の目は真剣。本気で言っただけだ。

でも、どーゆー関係も何も……。

「いや、初対面……」

「そんな訳ないじゃないっ」

私の言葉を遮り、彼女達はヒステリック気味に叫んだ。声が耳にキンキン響く。

そんなこと言っただけで、私の方にこそこの天原君に聞きたいこと大量にあるんだから。

「いやいや、確かに僕と明日菜ちゃんは初対面だよ」

とその時、私の隣から何やら呑気な声が聞こえてきた。声の主はもちろん天原君。ふと見ると、ニツと笑ってこちらを見ている。

なんか、『明日菜ちゃん』って、馴れ馴れしい……。今日初めて会ったのに。

「じゃあ、どう……」

「どうしてわざわざ指名でここに座ってきたの!？」

今度は私が思わず口を開いた。彼女達の言葉を遮り、強い口調で天原君はそんな私に一瞬驚いたかの様に見開いた。が、すぐにあの子どもっぽい笑顔に戻り、何だかとても意味深なことを言い放った。

「僕ね、君を……、

明日菜ちゃんをさがしてたんだっ」

「……え？」

「何それっ、どーゆーことお！？」

やっと反応出来た私に対し、彼女達は私の言葉を書き消すかの様に口々に言った。

「ナイシヨ」

「えっ」

しつこい彼女達に天原君はニコツと笑って返す。そして、抗議する彼女達を尻目に私に視線を向けた。

「明日菜ちゃん。君にはそのうち教えてあげるね」

ずっと神妙な顔して彼女達と天原君のやりとりを眺めていた私に、天原君はなんだか優しい笑顔を浮かべた。

一体なんなの？ この男^{ひと}。本当に訳がわからない。

私を探してた？ なんで？ どうして？ 一体何の為に？

変なの。

変な人。

「おっはようっつ。明日菜ちゃんっ」

天原君の転入2日目。朝、教室のドアを開けてからの彼の開口一番の台詞はそれだった。

「お、おはよ……」

私は『引き』ながら答える。彼の朝っぱらからの元気さと、私への呼び方にちゃんづけが定着してしまったことへ。更に今の挨拶が、クラスにはなく私個人に……、であるという点に。顔が引き釣る。クラスのミーハーな娘達がこっちをみて睨んでる。天原君は私の苦労も知らずに、ニコニコ顔で席についた。

なんで私がこの天原君のせいでクラスの女子達から睨まれたりして、こんないらぬ苦労をしなくちゃならないの？

「あ、天原君？」

「『渚』でいいよ。明日菜ちゃん」

事の真実を問い正そうと、私が思い切って話しかけると、天原君はニコニコ言った。

下の名前で呼べっていうの？　なんだかなあ。

「渚君？」

「何？　明日菜ちゃんっ」

私は改めて仕方なく呼び直す。渚君は飛びきり嬉しそうな笑みを返してきた。

……なんだろう。なんかこの人と話していると調子が狂う……。な

んて言うか、渚君のペースに引きずりこまれる。そんな感じ。

「君、一体なんなの？」

私の思ってることをそのまま口に出した。そう、不思議な変なことばかり言う渚君。一体何なの？ この言葉が一番しつくり来る。

私の言葉に渚君の顔から笑顔が消えた。なんだか初めて見る顔。と言ってもまだ会って2日だけ。静かな瞳で私を見てる。その瞳に、私はなんだか動揺してしまった。なんだか、動悸が早くなつたから……。

「わ、私を探してたって、どういうこと……っ？」

私はなんとか動揺を隠して口を開く。

渚君は昨日、私を探してた、と言った。でも私には渚君の顔に見覚えもないし、全く意味が分かんない。

「知りたい？」

と言った渚君には、あの笑顔が戻っていた。このコロコロ変わる態度は何？

「あ、当たり前でしょ！？」

「フフーン。どおしよっかな？」

渚君は、ニヤ〜ツツ勝ち誇った様な面白がってる様な顔で言う。なんだかその態度、ちよつとカチンと来る。

「何それっ、はっきりしてよっ」

思わず声を荒げた。なんだか面白がつてる風の渚君にちよつと腹が立ち、更にはつきりしないのが嫌、な白黒はつきりさせたい性格の私。すると渚君は苦笑いをした。

「アハハッ。ごめんごめん。そんな怒らないですよ」

なんか、やだ……。

はつきりしないのが嫌な前に、渚君のペースがなんか嫌。私のペースが保てない、ペースが……、乱される。

従来一匹狼の私が、教室でこんな人と話してること事態希だ。そんな私を見て、クラスの人も怪訝な顔で私を見てる。一部の女子からは、明らかに悪意の視線だ。渚君とだけは、ペラペラ話してる様に見えるんだろっけど……。

「分かった」

一人で考えを巡らしていると渚君が突然言った。なんだか意外に思えて、更には意外にあつさり出た言葉にキョトンとしてっていると、渚君はいつものニコニコ顔で続けた。

「いつかは明日菜ちゃんも絶対知ることだしね。そこまで言うならうん。教えてあげるよ」

「ほ、本当……?」

「うん」

なんだかポカンとして呆気に取られてる私に対し、渚君は常にニコニコしてる。

そして、売って変わってこの態度。やっぱりなんか調子が狂わされる。でも、まあ、いっか。教えてくれるって言うんだし。

「その変わり、放課後、付き合っただけだ〜」

不意に響いた渚君の声、何か企んだ含み笑いをしてる。私が調子狂わさつとも少し安堵していたのに、その渚君は含み笑いがその安堵感を見事にぶち壊した。

「は？ な、なんであんなかと……っ」

「ここじゃ、ちよーつと話せないんだよねえ」

思わず声を荒げた私の言葉を遮り、渚君は含み笑いのまま言う。

「だから、放課後付き合っただけならそこで教えてあげる」

な、何それ……。

キーンコーンカーンコーン……。

「さ、渚君。放課後になっただけ？ 何処へ行くつての？」

放課後。帰りのショートホームルームが終わった直後、私はこう渚君に切り出した。なんだか強引に決められて少しムカつくのも本音だけど、まあ、教えてくれるって言っただけから仕方ない。

嫌々ながらの私の言葉に渚君は、何やら困った様子で私の顔を見た。

「うっ……。やっぱり言わなきゃダメ？」

何それ。

はつきりしないのが嫌な私は、この渚君の煮えきらない態度に…
…、軽くキレた。

「渚君。あんたさつき教えるつたしよ……？ 私、そーゆーはつきりしないの、凄い腹立つんだけど」

私の自分でも驚く位の低い声に、渚君は青い顔して半歩引いた。苦笑いの表情を浮かべる。

「いや、その、ちょっとね……。もう少しじらしたいかなあ……。なんて」

渚君はボソボソと言いつ。

しかもその内容が『じらしたい』？ 本気で腹が立つんだけど。

「渚君……？」

「あーっ！ ごめんなさいっごめんなさいっ。ちゃんと教えるからっ、そんなに怒らないでよっ、明日菜ちゃんっ！！」

また私が低い声で言うと、渚君は猫撫で声で慌てて弁解した。

……ほんとにこの男は。言葉使いが子どもっぽいと言うか、ナヨツとしてると言うか……。気持ち悪くもあるみたい。もっと普通に話せないの？ どう聞いても今時の高校生の言葉使いじゃない。

その時、不意に誰かが私の手を握った。

「じゃ、明日菜ちゃん。行こっか」

そこには私の手を握り、ニコやかに言う渚君がいた。握った手を
目線の高さまで持ち上げ、わざと強調して。

「!？」

と、私は声にならない声をあげる。と同時に、顔が真っ赤に染め
上がった。

いやだ。私、何赤くなってんの？

「ちよ、渚く……。放して……」

「早く、明日菜ちゃん」

私の言い分などおかまいなしに、渚君は私の手を握ったまま、ズ
ンズン歩いて行く。クラスの皆がポカンとして見てる。ミーハーな
女の子達だけは私を睨んでる。

なんか、凄い恥ずかしい。

私の顔は真っ赤だし、心臓は、凄い早さでドキドキ言ってる。

だって、男子に手を握られたのなんて初めてで、何が起きてるの
か良くわからない。

どうしたらいいのか、良くわからない。

「図書館……？」

動悸と戦いながら、渚君にムリヤリ連れられて歩くこと、約15
分。着いた所はそこだった。

「なんだってこんなとこ……」
「いいからいいからっ」

ボソツと言った私に対し、渚君はゴキゲンな顔して私を強引に引っ張ってく。

なんか……、疲れる。渚君のこのハイテンションはどこから来るんだろう？ なんかいろいろと吸い取られてそうだ……。

「JJJ、JJJ」

と言う渚君に連れて来られた場所は、図書館の奥の奥。回りを背の高い本棚に囲まれた、他から遮断された様な空間。本棚には、古い言い伝えや伝説の本なんか納められている。あまり、人の来なさそうなスペースだな。

「ねえ、明日菜ちゃん。この街の川原に建ってるお墓……、知ってるよね？」

「え？ お墓って、アレ？ 人魚がどーのこーのって……」
「そう」

この街には、真ん中に大きな川：御人魚川みとなが流れている。その川は私の通う高校：河守高校かわかみの近くも通っていて、そのうちの学校の近くの川原に、古いお墓、の様なものが建っている。そのお墓にはこう書かれている。

「人間と人魚の運命の果て
禁じられた恋破れて

サレス と ライティス

1689年12月18日 ここに眠る……」

なんでも、その人魚の『サレス』と人間の『ライティス』つてのが、300年も前に恋に落ちて、けど人魚と人間なもんだからいろいろあつて、結局心中してあそこに埋葬されたとかなんとか……。そんな胡散臭い『伝説』と共に、そのお墓はこの街では有名だ。

「あのお墓にまつわる伝説ね、実話なんだよ」

ハイ？

渚君がさらりと言つてのける。この年になって、有り得ない話を。

「な、何言つてんの……っ」

「そう言つと思つてここに連れて来たんだ」

渚君はニコツと笑う。そしておもむろに本棚から1冊の本を取り出し、ポカンとしている私の前に差し出した。とても古そうなポロポロの洋書だった。小豆色の表紙で紐でしばつてある本だ。一体いつの時代の？

表紙には、かすれてるけど英語で何か書いてある。

『Mermaid』？

「明日菜ちゃん。この本見える？」

また何を言い出すの？ この男は。

「はあ？ 当たり前じゃん」

「やっぱり君がそうだった！！」

私の言葉を聞くや否や、渚君は図書館なのに喜々として叫んだ。そして他の人々の注目をあびる。私は小声で怒鳴りつける。

「叫ぶなっ！ ここ図書館！」

「アハハ。ごめん。嬉しくてついね」

呑気に笑う渚君。

嬉しくて？ 一体なんのこと？ ホントにこの男ひと、訳わかんない。

「この本、ある人達にしか見えないんだ」

「……はあ！？」

またおかしいことをさらりと言う渚君に、私は思わず思いつきり怪訝な声を上げた。

あのー……、この人頭の中大丈夫？ なんて、失礼な考えが浮かんでしまう。だってそうでしょう？ 何なの、この非現実的な話は

「でね。この本、あの川の伝説の本なんだ」

私の怪訝な声などおかまいなしに、渚君はどんどん話を進める。それにしても、あの伝説の本なんて聞いたことない。

「あの伝説の本なんてあつたんだ……」

「うん。あのね、伝説の中の『ライティス』がイギリス人で、これもイギリス英語で書かれてるんだ」

イマイチ話についていけない私に対し、渚君は終始浮かれ気味。ライティスって人はイギリス人、だったっけ？ アメリカじゃないのか。

「そしてね、この本、その伝説に関わりのある人にしか見えないんだっ」

「……はあ、！？」

渚君は得意気に語る。のに対し、私は力いっぱい怪訝な声を上げた。眉間に思いつきりしわを寄せて。

「でね、明日菜ちゃんはこの本が見える……ってことだから、あの伝説に関わりあるんだよっ」

「！？」

私の力いっぱい怪訝な声など、渚君は気にも止めてない。

この男は何を平然とこんな空想話を……？しかも得意気に。ホントにこの人大丈夫？

「その目は疑ってるね。明日菜ちゃん……」

私の疑惑の目、というよりももはや珍獣を見るかのような視線にようやく気付いた渚君は不服そうに言う。

「あ、当たり前じゃん……」

なんだかため息が出た。こんな幼稚な空想話がどうやら本気らしい渚君に。誰か冗談だと言ってよ。どうやったたら信じれるの？こんな話。

そして渚君は、再び誇らしげな笑みを浮かべ口を開いた。

「まあまあ、明日菜ちゃん。これを見たら疑えなくなるよっ」

と渚君はその伝説の本をペラペラとめくる。そして、あるページに辿りつくと、私には見えない様に本を伏せて言った。

「ねえ。あの伝説の二人の顔、見たことある？」

「え、ない……けど……」

私の言葉に渚君は更に得意気にニイッと笑う。そして、『ジャジャーン』などと言う効果音をつけつつ隠していたページを私に目の前に差し出した。

「これはあの伝説の二人の肖像画だよ」

え……？

その絵を見て私は固まった。息を飲んだ。氷ついた。

その絵には、あの伝説の二人らしい外国人男性と人魚が、腰から下が魚の女性が寄り添っていた。でも、私が驚いた原因はそこではなく、二人の……、顔。

「そっくりでしょ。僕と明日菜ちゃんに」

渚君はニコニコして言う。

そう。

そこに描かれていた二人は、渚君の言う通り私と渚君の顔をして
いた。

二人とも、今の私達よりはちょっと年上な気がするけど、髪の色や長さ、目の色だって違うけど。紛れもなく、私と渚君の顔だ。

何これ……。そう言おうとして、私は声にならなかった。

「びつくりした？」

渚君の嬉しそうな言葉に私は無言のまま素直にうなづいた。

その絵には、寄り添った二人の男女。と言っても女性の方はいわゆる『人魚』。

女の方は、顔は私。髪は綺麗な青で腰の辺りまで伸ばして一つにまとめる。目は金色。腰から下は……。魚。

男の方は、顔は渚君。髪は金髪で、肩を越すほど伸ばしていて、こちらも同様一つにまとめる。そして目は青。

伝説の悲劇さとは裏腹に、絵の中の二人は幸せそうに微笑んでいる。

「僕らはこの二人の生まれ変わりだよ」

「はい……。!?」

言葉もなくその絵を眺めている私に、渚君はまたおかしなことを言い出した。

はつきりしないのが嫌、な性格上、私はそういう非現実的な話も嫌いだった、っていうか受け付けない感じ。だから、思わず思いきり怪訝な顔をした。

「何より、この顔が証拠だと思うんだよね」

渚君はあの絵を指差す。

証拠……。確かにそっくりだけど。だからって……。とは思って
どイマイチ反論の言葉が浮かばず黙り込んだ。

「それに色々名残りもあるしね」

「名残り……？」

私がボソッと聞き返すと、渚君は優しく笑って私の髪に手を伸ばした。

「そ。例えばこの髪。この不思議な人間らしからぬ青さは生まれつきだったんじゃない？ サレスは青い髪だからね。その名残りだと思つよ。目も淒く色素薄いけどこれはサレスが金色だから。」

僕の日本人らしからぬ茶色な髪も金髪だったライティスの名残りだろうし、目だってよく見ると青がかってんだよ」

私は言われるまま渚君の瞳を覗きこんだ。

……。確かに。純な日本人にしては青っぽい色してる。私にしても、確かにこの青っぽい髪は生まれつきで、中学や高校入学の時にちょっと苦労した。染めてるんじゃないかって疑われて。

お母さんが言ってたけど、産まれた時にいろいろ病院行ったりしたんだって。でも、全くもって異常なし。

「ねえ、明日菜ちゃん。泳ぎ、上手かったりしない？」

渚君が唐突に話題を変えた。

「あ、うん……。習ったこともないのに、泳げる……。けど？」

「やっぱりね」

あまりの唐突さに目が点になりながら答える。確かに私は、習ったこともないのに泳ぎだけはかなり得意だった。渚君は不適に笑う。

「それもサレスの名残。前世が人魚だったから、今でもスイスイ」
渚君は嬉しいなニコニコ顔。

ああ、そうか。
ずっと不思議だった。なんで泳げるのか。
私にとって泳ぐことは、習うことでも覚えることでもなかった。
だって、体が知っていたから。皆が皆、泳げる訳ではないことに気付いたのは、小学校の体育のプールでだった。

なんか、納得……？

「信じてくれた？」
「！！！」

と、渚君の嬉しそうな声で我に帰った。

待つて。何を納得してるの、私。
た、確かに色々つじつま合わせるとそんな気もするけど、みんな偶然の産物。たかがちよつと偶然が重なっただけで、こんな非現実的な話を現実にされてたらたまらない。

危ない。危うく流されるとこだった。

「んな訳ないじゃんっ」

「え〜……。明日菜ちゃん、夢な〜い」
「うるさいっ、なんとも言えっ」

猫なで声ですがる渚君君に私は小声で怒鳴る。

確かに私は必要以上に現実的かもしれないけど、いくらなんでもこの話は現実離れし過ぎでしょう。空想話が好きな人だって、この話じゃ現実だなんて思えないんじゃない？

「あ。因みに僕らはこの二人の子孫だよ」

さっきまですがってたくせにあっさり復活した渚君が言う。

「は!？」

「この二人ねえ、心中したっていうけど、子ども残して心中したんだ」

私の疑問の声など気にも止めず、渚君は平然と話を進める。

そして、渚君は否に真面目な表情をする。そうになると、なんだかいつものノリで否定出来ない。

渚君は静かに、あの『人魚の伝説』を詳しく語り始めた……。

あの伝説の人魚、名前はサレス。

フルネームだと、サレス「パールサイドって言うらしい。御人魚みとな川にあるっていう人魚界の姫。

サレスは、『姫』という立場のせいのはばられた生活が嫌だったんだって。姫としての仕事が嫌だった訳ではなくて、むしろとても素晴らしい姫だった。だけど、プライベートの時間にまで侍女などがいて一人になれない……、そんな生活が嫌になっていた。

そしてある日、一人になれる場所を求めて、なんとか侍女をまいて、本当は成人するまで行けない人間界へ行ってしまった。

人魚は、10年で人間でいう1歳分成長すること。人魚でいう成人は200歳。当時サレスはまだ169歳。人間界へ行くことは、未成年としては最大の罪だった。

それで、人間界で出会ったのがライティス。

フルネームだとライティス「ティド」ハリー。イングランド王国貴族：ハリー家の第二子長男で跡取り、とのこと。

ハリー家は科学者一家で、ライティス自身も科学者。日本に来たのは『人魚』の研究のため。当時人魚は世界中に点在してたらしいけど、ほとんどは海で生活してて、川に人魚界があるのは日本ぐらいだったんだって。海より川の方が探し易そうだった、だから、日本へ来た。

一家は従者等を従え全員来ており、日本の大名家：風見家の協力のもと、人魚を探しを始める。

ライティスは、『人体実験』みたいで嫌だと、人魚研究には反対していたけれど。

そしてライティスは、研究は関係なしに御人魚川みとなの川原を散歩していた時に、人魚界を抜け出して来ていたサレスと出会う。

二人は出会った瞬間に互いに惹き付け合い、恋に落ち、いつしか愛し合った。

しかし、サレスは『人魚』。

人魚は女性じゃない。地上へ行き、尾を乾かすと人間の足になるという性質もあったため、男と交わることは出来る。が、人魚は古来より人間により興味本意に捕まえられるなどされていたため……、人間は人魚にとっては良い存在ではなかった。そのため、人間と愛し合うことは人魚界最大の罪とされていた。

ライティスにしても、人魚を追っている一家の一員でありながら、人魚と愛し合う……、つまりは人魚を擁護する側にまわってしまったために、いろいろあって、二人はついに夜逃げまがいにかかけおちをした。

その後二人は、逃げつ追われつではあったがそれなりに幸せに暮らした。子どもにも恵まれた。

でも、それにも限界が来る。追ってくるのが、ハリー家に風見家、更に江戸幕府……。という大変な数だったからだ。逃げ切れる訳がない。

そして二人は、子どもを残して心中した……。

「　　っていう訳。

「　　どお？　信じてくれた？」

全てを話し終えた渚君が満足気に言った。

信じられると思ってるの？　こんな現実離れし過ぎた話。

そもそも、私が非現実的な話が嫌いとか言う前に、ここまで空想じみた話、普通誰も信じないと思うんだけど。どうして、この男はこうも平然と言い放ってるの？

「その目は信じてないね。明日菜ちゃん……」

私の疑心に満ち溢れた瞳から気持ちに気付いた渚君は不満顔。

「当然でしょ……」

渚君の言葉に、深いため息と同時にこんな言葉が漏れた。

「うーん……。まあ……。いつか」

え……。

渚君は少し困った様に頭を抱えた。が、あっさりと諦めとも取れる言葉を放つ。

「　　なんだか、意外な言葉を聞いた。もっとこう、『いいから信じなさい』とか『信じてくれなきゃ駄目』みたいな強引に押しきられるかと思っただのに。こんなあっさり諦めるなんて。なんだか調子狂う……。」

「でもっ」

私が驚いて目を丸くしていると、渚君は身を乗り出して私の視界に入りこんだ。そしてニコツと笑う。

「そのうち絶対っ、信じざるを得なくなるよ」

はい？

「うん、絶対に。だから今はいいよ。そのうちねっ」

目を丸くして、というよりむしろ怪訝な顔をしているであろう私を無視し、渚君は勝気な笑みを浮かべている。なんだが、一人でうんうんと頷き、納得している。

そのうち信じざるを得なくなる？ だから今はいいよ？

つまりは……。

諦めてなんかいないって訳なのね？

「し、『信じざるを得ない』って？」

私は顔を引きつらせながら聞いた。

こんな話が『信じざるを得なくなる』事態。つまりは、この話が現実味を帯びる事態。そんなこと、考え付かない。

「ああ、あのね。明日菜ちゃんはサレスの生まれ変わりだから、これから体に変化が現れてくると思うよ」

普通に、渚君が言う。ふざけてる風でもなく、至って普通に。

身体に変化って……。何、それ。

「……人魚に、なっていくと思うよ」

渚君は一呼吸置いてから真顔で言った。真っ直ぐ私の目を見て。私は、更にもう一呼吸置いてからやつと言葉の意味を理解したが、声にはならなかった。事態は理解できていないから。

何それ。私が、人魚に？ そんなことあり得ないでしょう。私は、人間だもの。

そもそも、人魚なんていないもの。

「あと、夢を……、サレスの夢を見るんじゃないかな。僕がライテイスの時のこと、色々詳しいのも夢で見るからなんだ。」

私の困惑した目を見つめたまま渚君は続ける。またも、現実離れた話を、相変わらず真顔で。

何それ。理解、出来ないよ……。人が混乱してるのに、一人で勝手に話進めないで。

「明日菜ちゃん。そんなガチガチに考え込まないでよ」

私の混乱に気付いた渚君は、優しく私の頭を撫でた。直後。

「あつ！ 最大のこと忘れてたっ！」

渚君が突如大声をあげる。

まだ何かあるの？ いい加減、空想話の許容範囲を超えた私は更に混乱する。渚君はそんな私の目を見てニッと笑う。いつもの子

どもっばい笑顔。そしてたっぷり間を開けて言う。

「僕を、好きになってく」

「だといいなあ。なあんてねっ。ほら、なんたって、サレスとライティスの生まれ代わりの2人だからね」

反応すらできずにいた私。に茶化す様に渚君が言う。頬を赤く染めて、嬉しそうに。

時間と共に、渚君の放ったとんでもない言葉の意味を理解して行く私。の、顔が真っ赤に染め上がった。

「何言つて……っ」

「はい。ストップストップ。ここ図書館だから叫ばないでね」

叫びかけた私の口を渚君がふさぐ。そして、持っていたあの本を本棚にもどした。

「さ、明日菜ちゃん。もう出よっか？」

疑問系で言いつつも私の答えは待たず、渚君は私の手を取り強引に図書館を出た。

な、何。この男。

馴れ馴れしい、強引、意外に頑固で、どこか女々しい。それから、ひたすらマイペース。

なんだか渚君といると自分のペースが保てなくなる。分からなく

なる。

渚君のペースに引きずり込まれる。

「ちよっ、渚君…っ。手、離してよっ」

図書館を出て数分。私の言葉などおかまいなしに、私の手を握ったままだんどん歩いて行く渚君。

もう。聞こえてない訳ないのに。

私は少し怒って、叩く様に渚君の手を振りはらった。

「離してっ！！」

軽い打撃音が響く。

渚君は立ち止まり振り返った。なんだか静かな目で私を見てる。目が合う。

と、なぜだか心臓が跳ね上がる。渚君の目がいつになく本気で。だからって、なんで私のは心臓高鳴ってるの？ 渚君から目を、反らしたい。でも、渚君の真剣な目は、目が合うとなんだか反らせない。

やだ。私、また、きつと顔赤い。

「明日菜ちゃん」

相変わらずの真剣な目で、渚君は静かに口を開いた。

「君、誕生日、12月18日だったりしない？」

……え？

何？ この話題のずれ方は……。それに、どうして。

「なんで、知ってるの……?」

そう。確かに私は12月18日生まれた。だけど、渚君に教えた記憶はない。クラスの皆にだつて言ったことないから、人づてに聞いたとも、考えられない。そもそもあの学校で、私の誕生日を知ってる人なんて聖亜ぐらいだ。

「やっぱりね。じゃないかなと思ってたんだ」

渚君は満足気に微笑む。

一体、どういうこと?

「12月18日はサレスとライティスが死んだ日なんだ。あの石碑にも書いてあるしょ?」

実は、僕も12月18日生まれなんだ。

サレスとライティスが死んだちょうど300年後に、ちょうど僕らが生まれたんだよ」

渚君は、真摯に私を見つめる。説き伏せる様に言葉を紡いでくる。

「ね? こんな偶然でもいくつか重なるとすごいでしょ? こういうのを僕は奇跡って言っくんじゃないかと思う。

顔から髪と目の色、特技から誕生日まで。

やっぱり、僕はライティスで、明日菜ちゃんはサレスなんだよ」

渚君は、飛び切り優しく笑った。

何それ。こんな変な話。行き過ぎた話。あり得ない話を、どうやって信じろって言うの? どうして渚君は平然と、当然かの様に話

すの？

私がサレスの、『人魚』の生まれ変わり……？

私は人間じゃないって言うの……！？

とは、思うんだけど……。

渚君はずっと私を優しく見つめてる。なんて言うか、この渚君の優しい顔見ると反論できない。強く否定できない。とても嘘ついでる瞳じゃないから。なんか、信じなきゃいけない様な気すらしてきてしまう。

「やっと見つけた……」

不意に渚君が口を開いた。そして、静かに手を私の頬へのばした。優しく、優しく撫でる。

「僕は、自分がライティスの生まれ変わりだって分かってから、ずっとサレスを、君を探してたんだ」

凄く穏やかな顔をしている。

「やっと、見つけた」

渚君……。

噛み締める様に渚君は呟いた。穏やかな顔、私の頬を撫でる優しい手、そして声に、私は何故か釘付けにされてしまった。

信じない。信じられない、あんな話。だけど、反論の言葉が出て来ない。何も言う言葉が見付からずに、ただ私は立ち尽くしていた。

それから数秒。渚君は突然ニコツと笑った。さっきまでの穏やかな、優しい微笑みじゃなくて、渚君らしい子どもっぽい笑顔。そして私の頬から手を離しつつ背を向け、2、3歩前へ出た。

「君と僕は運命の人だよ」

私に背を向けたまま平然と言う。とんでもないことを。何を、と思いつながらも言葉に詰まり、反応できない私。それに対し渚君は、再び私の方へ向き直り、ニツと笑う。

「僕はそう信じてる」

渚君はきつぱりと言った。

私は、目を見開いたまま動けない。身体中の血が沸き上がる様な、逆に凍り付く様な。

わからない。なんだかわからない。だってこんなこと初めてで。私なんか言い寄ってきた人なんて今までいなかった。だからどう対処していいかわかんない。

……何？ 一体何が起こったの？ 訳わからない。こんな私に、まさかそんな……。

本気なの？ 渚君。

「じゃね、明日菜ちゃん。また明日！」

固まったままの私に、渚君はニコやかに手を振る。

「え……。ちょっと、待っ……」

私はまだ納得のいかないことばかりだったから、思わず渚君を呼び止めようとした。けれど……？

「渚君……？」

ぼつりと呟いた私の言葉は受けとる相手もなく、宙に溶けた。

私が呼び止めた、思わず手を差し出し、渚君の腕を掴もうとした。その瞬間、そこにはもう渚君の姿はなかった。

いや。

消えていた。

渚君の腕を、私の手は微かに触ったのに、手は何も掴むことが出せずにパタリと落ちた。

次の日。今は学校、朝のショートホームルーム真っ只中。私の隣りには、いつもの笑顔で担任の言葉に耳を傾ける渚君がいる。

ねえ、渚君。

昨日のアレは、何？

私はこの質問をできないでいる。

昨日渚君は、気が付いたら目の前からいなかった。いや、認

めたくはないが消えていた。と思う。

そんなこと、有り得ない。人が『消える』なんてことは。それは分かってる。分かってるけど……、否定できない。

実際、目の前から突然渚君がいなくなったのは、事実だから。声をかけた瞬間に居なかった。微かに触った渚君の腕が掴めなかった。『消えた』ことを、体感してしまった。

渚君本人に確かめたい。だけど、『そのこと』を認めたくない自分がいて、なんとなく聞けない。

「ああーっ、渚ー！！ やっと見つけたー！！」

ショートホームルーム終了直後。教室のドアの方から、女の子の甘ったれた黄色い声が響き渡った。

何？ 『渚』って、渚君の知り合い？

一瞬のざわめきの直後に静まり返った教室。このクラス一同の視線は、真っ直ぐにドアへと向けられた。

そこに立っていたのは、スラツと背の高い美女。

長い手足に細い身体、だけどバランスの取れたスタイル。目鼻だちのはつきりした女の子。

そして、そんなことを凌駕する特徴が。

髪の毛が『黒っぽい青』。目の色素もかなり薄い。

私が言うのもなんだけど、何？ この人……。

その時、私の隣の渚君が、椅子や机をガタガタ言わせながら突然立ち上がった。

「リ、リアア、！？ なんでここに！」

渚君は目を丸くして叫んだ。それはもう、心底驚いた顔で。

『リア』？ やっぱり知り合い？

「だあってー、渚に会いたかったんだもん！ 聞いて！ 私、この学校に入っちゃった！」

と、この『リア』と呼ばれた娘は、女性陣に有無を言わずに嫌われそうな猫なで声で語り、渚君に抱きついた。なんて言うか、語尾にハートマークが付きそうなしゃべり方。それはもう、渚君以上に。

なんだか、今までの話し方から察するに、いわゆるぶりっ娘な上に自己中気味。

クラス中の女子がと言っても言い程、女の子達が怒りに満ちた瞳で『リア』を見てる。多分、渚君に抱き付いているから。

私からしても、渚君に抱き付いているのはどうでもいいとしても、この話方はかなり癪に触る。

「ちよっ、リア！ 離れてよ！」

「いやーん、渚ったらっ。照れなくてい・い・の・よ！」

かなり嫌そうにその娘を振り払おうとする渚君に対して、その娘はこの反応。

なんていうか……、何なのこの人。渚君の上に行くゴーイングマウエイだ。クラスの女の子達の視線がより一層厳しくなった。

ふと、私と『リア』の目が合った。その瞬間、『リア』は突如氷ついた。

明らかに私を見て、ハツとして息を飲んだ。

一体、何？

それから『リア』は猫撫で声から打って変わって、キリツとした声で言った。

「渚。この娘ね。サレス姫の生まれ変わりって」

「うん。まね」

『リア』の言葉に、今度は私が目を丸くした。渚君は平然と答える。

「本当にこの娘なの？」

「うん。明日菜ちゃん、あの本見えたし。何より、この顔だよ？」

「まあ、それもそうね」

クラスが静まり返った中、渚君と『リア』のハタから見れば意味不明な会話が続く。この2人はこの痛い程の回りの視線に気付かないのかな。

それにしても。

『サレス姫の生まれ変わり』って……。どうしてこの人も『サレス』を知ってるの？ この人もあの話の関係者なの？ また、誰かの生まれ変わり、とか？

その時、静まり返った空気を切り裂く様に1時間目始まりを知らせるチャイムが鳴り響いた。

「あんつ。もう1時間目え？ どうして渚とクラス離れちゃったのかしらっ。」

んじゃ、渚。私4組だから。また後でね〜」

と、『リア』は渚君に手を振り去って行った。
嵐が去った。正にそんな感じ。いろんな意味で凄い、あの人。怒りの視線を向けていたクラスの子達も、逆にもう啞然としていた。怒りを通り越したんだろうな。

と、それよりも……。

「渚君。あの人、何？」

あの話を知っている風の女の子。青い髪と色素の薄い瞳、変わった出で立ちの女の子。

「ああ。まあ、ね。今の話でなんとなく分かったと思うけど、こじじゃ話せないし……、後でね」

苦笑いの渚君。

やっぱり、あの話の関係者なんだ。……でも、あの伝説には『サレス』と『ライティス』しか出てこないし。他にあの話に関係するっていったら、どうやって？ あの不思議な出で立ちも関係あるのかな。私と同じ様に。

って、あれ？

私、なんであの話を信じかけてるの？

ああ。もう、冗談じゃない。あんなに変な話。現実感のない話。信じてなんかやるものか。

とは思っけど。

だめだ。だめだ、私。完全に渚君に流されてる。思いつき『渚君』という激流の中に流されてる気がする。

嫌だな……。なんかこんなの、私らしくない。らしくないよ。

「明一、日菜ちゃん」

ん……？

「どうしたの？ 黙り込んでしまって。そんなにあの話気になる？」

気付くと、目前に広がる渚君の顔。しっかりと私を抱きしめた渚君の腕。

飛び切りの笑顔が私の目に飛び込んだ。

この、男は……！

「んな訳あるかいつ！ いちいち抱きつかない！」

クラスの女の子達の痛い視線が注がれる中、私の肘が渚君のみずおちに軽く炸裂した。

全く。信じてなるものか、あんなおとぎ話。絶対、絶対信じない……。

。4時間目の終わりを告げるチャイムが響き、終了の号令がかかる。着席と同時に私は、大きな欠伸と共に伸びをした。やっと、昼休みだ。

「渚……！」

まだ4時間目が終わり、1分ま経つか経たないか。甲高い声が教室内を木霊する。また来た、この人。

声の主は言うまでもなく『リア』。この人は10分休み毎、この調子でこの教室に……。いや、正確に言うと渚君のところに見れる。1分1秒を惜しむかの様に、休み時間になる度に速攻で現れる。

渚君が好き、なんだよね？ この人。物好きだよなあ。おかげで、と言っかなんと言っか。私のクラスの渚君ファンのミーハーな娘達から目をつけられてるのは私だけじゃなくなった。

「明日菜っ」

不意に、若干遠くから張りのある声私を呼んだ。まあ、この学校で私を呼び捨てにする人も訪ねて来る人も、1人しかいない。

「聖亜？」

振り返ると、教室のドアの所に一人の男が立っていた。

標準並な背の高さ、華奢な身体。男にしては襟足の長く、金が混じるといふ日本人にしては変わった髪色をもつ。そして、女性の様に整った顔立ちでかなり女の子達にモテはやされている男。

彼の名は、立花聖亜^{たちばなせいあ}。私のはとこであり幼馴染み。因みに私の唯一に近い友だち。この河守^{かわかみ}高校1年5組。親同士が仲が良く、家が裏同士。幼稚園から中学まで同じクラスになり続けたという、見事なまでのクサレ縁。今年、初めてクラスは離れたけど、隣のクラスだし。

「何？ 聖亜」

「おう、明日菜。古典の教科書貸せ」

聖亜に駆け寄ると、聖亜はいつもの態度で私に言葉をなげかけた。かなりぶっきらぼうな、上から目線の口調。教科書借りる側の態度ではない。でもまあ、これが『聖亜』だ。

ぶっきらぼうで、偉そうで、果てしなくクールで、協調性と言う言葉は聖亜の辞書に載ってないかの様に持ち合わせていない。

にも関わらず、さっきも言った様に、聖亜は男離れした綺麗な顔で女の子達の注目を浴びている。でも、聖亜は私以上の1匹狼で、唯一親しいのが私。極度に協調性のない聖亜だから、雑談をする相手は私だけと言っても過言ではない。そんなものだから、私は聖亜ファンに目をつけられている。まあ、今の状態なら聖亜ファンに『も』って感じかな。

「はいはい。ちょっと待ってて」

と言い、私は振り返った。すると、渚君とリアがなんとも神妙な顔でこちらを見ていた。

「渚君……？ どしたの？」

「ア……」

私が声をかけると、やっと反応したかの様に渚君とリアは同時に口を開いた。

「アクア……っ!？」 突然の二人の叫び声。教室中が一世にこちらを見て、静まり返った。

何？ ア、『アクア』って……、水？

渚君とリアは目を丸くしてつつ立ってる。リアに至ってはこちらを、いや、聖亜を思いつきり指差して固まっている。

聖亜が、なにかあるの？

ふと、聖亜の方へ視線を移すと、こちらもまた驚いた様に目を見開いている。そして、聖亜はゆっくり口を開いた。

「お前、その顔……。しかも、『アクア』を知ってるつつうことは……。」

『ライティス』、か……?」

聖亜の言葉に、渚君とリア、そして私も声にならない声を上げた。

どうして、聖亜の口からまでもその名前が出て来るの……?」

幼馴染みではとこで、常に一緒にいた聖亜。だけど、そんな話聞いたことないし。

「つつーことは……。」

パニックになってる私達をよそに、聖亜は私を見据える。そして、しみじみと呟いた。

「明日菜。お前やっぱり……、『サレス』なのか?」

「な……。」

『なんで知ってるの?』

そう、言おうとして、言葉にならなかった。

「なんでんなこと知ってるのっ、君!」

と私の言葉を代弁するかの様に渚君が叫んだ。

本当に……、このリアといい、聖亜まで。なんでこんなにまであの話のこと知ってる訳? どうしてあの話を知ってる人がこんなにいるの?」

それから、聖亜の話を書くために、私、渚君、聖亜、リアは屋上に集まった。この話は、教室ではちょっと……。まあ、これだけ注目浴びてて今更、な気もするけども。

「俺、なんか知らんけど生まれつき前世の記憶みたいのがあるんだよ」

聖亜が真顔でさらりと言った。なんでもない様に、とんでもないことを。

「えっ！ そうなの！？ へえー……」

「そんなこともあるのねえ」

そして渚君とリアはあっさりを受け止め、おまけに感心までしている。

ちょっと待って。なんなの、この連中は……。なんでこんな奇怪な話をさらりと話す？ あっさり受け止めるの？ どうして誰も疑わないの？

こんなにまで現実感のない話なら、小馬鹿にしてもおかしくないのに。頼むから誰か否定して欲しい。

「で、君は、アクアの記憶を持つてる。つまりは、アクアの前世ってことか」

パニックになってる私をよそに、話は勝手にお構いなしに進む。

「ああ。俺は『アクア』、『アクア』リート『ハリー』だった」

聖亜がポツリと呟く。その表情、なんとなく固くなった様な……。
気のせい、かな？

「明日菜ちゃん、明日菜ちゃん」

不意に渚君が、聖亜を指差し、ニヤツとしながら私に話をふった。

「この『アクア』って、女の人。そいでもってサレスとライティスを心中に追い込んだ張本人」

え……。

「まあ、そうなるな」

ニコニコ顔の渚君に対し、聖亜は軽くため息、少し間をおいてから呟いた。

聖亜が、聖亜の前世がサレスとライティスを心中に追い込んだ人？ 一体、何があったの？

「で、お前らがサレスとライティスねえ……。明日菜見ててよ、日に日にサレスに似てくるからまさかとは思ってたけどなあ。

でも、明日菜は『アクア』を知らねえってことは、全部知ってる訳じゃねえんだな？」

聖亜は、私と渚君を交互にじつくりと見据え、しみじみと言う。
なんだか、いろいろなことがあり過ぎて頭の中が真っ白な私は、聖

亜の問い掛けにただ無言で頷いた。

とその時、渚君は聖亜の言葉に顔をひきつらせて、割り込んだ。

「ちよつ、君……、ええと？」

「立花聖亜」

「そう！ 立花君！」

『明日菜ちゃん見てた』って……。君、明日菜ちゃんの何……」

「はとこ」

「へ……？」

渚君が言い終わる前に聖亜が即答。素頓狂な声を上げた渚君。

「ついでに言うと、俺らの両親同士がえらい仲良くて、家も裏同士で。まあ、幼馴染みってやつでもあるな」

きよとんとしている渚君に対し、聖亜はさらりと話す。

そう。私と聖亜はここで幼馴染みで。お互いが協調性の足りない一匹狼で、それが故に今尚関わりがある。それだけ。多分、どつちかが普通に今時高校生だったら、今尚つるんではなかったんじゃないかな。

「……あ、なんだ。そういうことか……」

ちよつと間を開けて、渚君はほっとした様な顔をして呟いた。

……しかし、この男は一体何を気にしてるの？ どうして出会って間もない、しかもよりによって私なんかこんな入れ込むの？

聖亜は、そんな渚君を見て軽いため息。

「お前、またなのか……？ サレスならともかく明日菜だぞ？ なんかつう物好きな……」

「な……」
「全くさ」

聖亜の掃き捨てる様に言った失礼な発言に反論しようとした渚君。私はその言葉を遮って思わず口を開き、その失礼な発言を肯定。すぐに聖亜が突っ込む。

「明日菜、自分で言うなよ……」

そうかなあ。

「ところでコイツ誰？ 平然とここにいるけど」

不意に聖亜が指をさしたのは「リア」。…そうだ。この人もサレスとライティスを知ってた。するとリアはかしこまった風に座り直した。鮮やかに微笑んだ。

「紹介が遅れてごめんなさい。」

私、人魚のリア「カイメールです。以後お見しりおきを」

は、い……？

今、なんて言った？ なんか、あり得ないことを……。

「へえ……。まだ生き残ってたか」

リアの言葉に聖亜は感心の声を上げた。リアは腰に手を当てて、勝ち誇った様に言う。

「当たり前じゃないっ。まだ平然と繁栄してるわよ」
「だから髪が青かったんだな」

聖亜はリアの髪をマジマジと見る。

人魚って、髪青いのか……。そいやサレスも青かったっけ……。

って、そんなことより。

何を変な冗談を……。人魚なんていない。百歩譲って仮にいたとしても、リアは人間じゃない。立って歩いて、長い足を持つてる。尾びれなんかない。

どこをどう見ても、立派に人間……。

「ちよっとっ、リア！」

その時、渚君がちよっと強い口調で言った。

「そんなペラペラ喋っちゃダメだよ。立花君はあのアクアの生まれ変わ……」

「ツバーカツ」……え？

渚君の言葉を遮り、聖亜が力いっぱいそう言った。そして、軽く睨んでる聖亜に対し、渚君はきよとんとして、目を白黒させている。

「俺はアクアとは違うんだ。もう……、前みたいなのはしねえよ……」

睨みをきかせていた聖亜の目が次第に伏せられていく。声量も少しずつ落ちて行った。

なんだか、聖亜は表情を曇らせている？

「ああ、そなの？」

そんな聖亜のわずかな変化には気付かない渚君は、ほっとして胸を撫で下ろした。それから、少し間を置いてからちらっと聖亜を見た。そして、ニヤツとしながら口を開いた。

「それにしても久しぶりだねえ。姉さん」

「……だな。弟」

なんだか含み笑いの渚君に、聖亜は苦笑いで答えた。

ちよつと、待って？ なんか今、凄いこと聞いたよ？

「姉さん……！？ 弟おー！？」

「まな」

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

思わず叫んだ私に、聖亜と渚君が至って平然と返す。

「名字一緒だよ。『ライティス』『ティド』『ハリー』と『アクア』リ
ー『ハリー』で。僕ら双子だったんだ」

しかも双子。

名字、『ハリー』が一緒だ。つまりは、『アクア』は弟を追い詰めて行ったの？

しかも双子って、全然似てないよなあ。まあ、男女の双子なら二卵生だからな。似てるとはかぎらないのか。

ああ……。なんだか混乱してきた。

そして、私また流されてる？ このわけのわからない話の渦に完

全に流されてる。なんなの？ こんな話を平然としてくる、こんな連中は……。

「明日菜ちゃん、明日菜ちゃん」

一人混乱に陥ってる私に、渚君がのう天気な声で呼びかけた。

「図書館のあの本ね、実はアクアが書いたんだよ」

……はい？

そんな訳で、放課後。私は、渚君・聖亜・リアというメンバーでまたもや図書館に来ていた。なんでも、あの本には『アクア』の肖像画も載ってるとかで……。私は、半強制的に渚君に連れてこられた。これ以上この渦に巻き込まれたくないから、あんまり行きたくないかったんだけどね。

「まーだあの本がこの世にあるとはなあ……」

渚君の案内である本のある図書館の奥の本棚へ向かう途中、聖亜がしみじみとつぶやく。すると苦笑いで渚君が返す。

「本当にねえ。僕もあの本見つけた時はびっくりしたよ」

「『こんなもん書いてたのか！？』ってか？ あれ書いたのライターイスが死んでからだったし」

「アハハ。まあ、それもあるし、それより300年も前に書かれた

物だよ!? びっくりするよ」

「全くだ。しかも図書館なにかにあるとは……」

……なんだか和んで話し込んでるね、この二人は……。ちよつと違うけど、昔話に花が咲くって感じ? なんか本当に流されてるな、私。この話、というか渚君の、そして今やリアや聖亜まで加わったこの巨大な渦になんて反抗できないよ。

このままでいいの? 私。

「ハー……。なんか懐かしいな」

あの本、『Mermaid』を見ての聖亜の第一声。しみじみと言った。渚君は笑いながら相槌を打つ。そしておもむろに本を開く。

「明日菜ちゃん、これ! アクアの顔!」

渚君はあの本のラストページを開き、意気揚々と私に見せた。気の乗らない私。だけど、今更拒んでもきつと無理矢理見せられて意味ないんだろつなと悟り、そろつと目をやった。

「うわ……。聖亜だ」

そこには聖亜と同じ顔をした金髪の美女が描かれていた。なんて言うか、聖亜そのもの過ぎて、なのに綺麗過ぎて、思わず声が出ってしまった。

本当に、女の私から見ても、溜め息ものの美女だ。長い金髪の髪はウェーブがかかり、優しく輝いている。宝石の様な、翡翠の瞳には笑みが浮かんでいる。白人ならではの白い綺麗な肌。科学者が故なのであろう白衣は、頭の良さを表している感じ。

「世界的に有名な科学者だったんだよ。女性だけだ」

へえ……。この時代に女性が、って凄いんじゃないかな。男性ばかりが表立つ時代だろうし。

「ほら。立花君にもアクアの名残があるっしょ？」

と、何故か得意気な渚君。

名残……。ああ、確かに。

このアクアなる女性は金髪に緑の目。聖亜の髪には金髪の混じる本数が多い。目も、少し緑がかってる、かな。

……。ああ。また流されてる、私……。思わず盛大なため息をついた私に、聖亜も渚君も首を傾げる。

なんだか、こんなに証拠やら証人やらゴロゴロ出てくると、信じざるを得なくなる。みたいな。

渚君に言われた通りになって来ている。『そのうち認めざるを得なくなる』って。

なんで、空想上の動物が、実在できる訳……？

「そーだ。明日菜ちゃん！」

人が深刻に考えてる時に、渚君が雰囲気崩させるのう天気な声で話しかけてきた。

「夢まだ見ない？」

目を輝かせている渚君。

ああ。昨日渚君が言った前世の夢か。『まだ』……、って昨日の今日なのに。気が早過ぎるよ。

「……見ないけど。んなもん」

「ええ〜……。そんなあ」

私が呆れて冷たくあしらうと、渚君はガツカリしてその場にうなだれた。

ああ。溜め息が出る。

この渚君って人は、ナヨナヨしてるというか子どもっぽいというか……。いちいち振る舞われる大袈裟な反応。疲れる。

「夢？」

私達のやりとりに聖亜とリアが疑問の声を上げる。

「ああ。僕はね、立花君みたいに前世の記憶があるんじゃないかって夢に見るのさ。ライティスの時のこと。だからさ、明日菜ちゃんも見るんじゃないかな〜って」

渚君の言葉に聖亜とリアがそれぞれ感心した様にうなづいてる。

もう……。頼むから誰か否定して。

「明日菜ちゃん！もし見たらすぐ教えてね！！」

渚君は真剣に言う。だけど、もはや返事する気も起こらない。

「ところで立花君。なんでこんな本書いたの？」

渚君がサクツつと話題を変えた。

私にあしらわれた時はあんなにうなだれていたのに、この替わり身の早さは何？ あのうちだれは演技でもしつたのだろうか。

「はあ？ なんもん、後世の方々に『人魚』について知ってもらって、あわよくばアクアがなし得なかった人魚研究をしてもらう為に決まってるんだろ？」

渚君のあつけらかなとした顔に対し、聖亜は眉間にしわをよせ怪訝な顔で答える。聖亜に気押され気味の渚君。

「いや、でもこれ……、普通の人には見えないんでしょ？」

そういえば、昨日渚君がこの本はあの伝説に関わりのある人に見えない、とかそんなことも言ってた。これもまた、おとぎ話だけ。

「ああ、そっか。わり。ライティスが知るわきゃねえよな……」

聖亜は頭をガシガシ掻きながら言った。

なんでも、この本を書いたことが何故か人魚にもバレて呪いみたいなものをかけられたんだとか。そこでアクアが使用人とかを使って調べたところ、どうやら人魚を知らない人には見えなくなったらしい、とわかった。

そこでその本にこのことを書き足し、いつか呪いが解けるか、呪いの影響のない人が現れることを期待した。のだけでも、これもまた呪いの効力なのか。更に書き込むことが不可能になっていた。よって、敢えて手放すことで、いつしかこの本が誰か人魚を知ってい

る人に渡ることを祈ったそうなの。

そしてここからはリアの話。

本当は本自体をなくしたかったらしいのだけど。あまりにも遠くから呪いをかけたものだから効果が薄くなって。人魚に関わりのある人、既に本の存在を知ってる人には見える様になってしまった……、と言う。

……なんだか、どんどん現実から離れて行くのですが……。
聖亜とリアの言葉に、渚君はただうなづくだけ。

もう、嫌だ。

それから私達は帰路に着いた。夕方だけどまだ暑い、夏の初めの太陽が照りつける。渚君と聖亜は何やら昔の思い出話、ライティスとアクアの話で盛り上がっている。

そうだ。思い出した。

昨日渚君との図書館に来た帰り、渚君は消えた。あれは、何だったのかな。学校では、遂には聞けなかったけど、聞いてしまおうかな。

「な、渚君」

「ん？ 何？ 明日菜ちゃん！」

恐る恐る口を開いた私に、嬉しそうに渚君が答える。目を輝かせて振り向く姿は、なんとなく犬を連想させる。

「あのさ、昨日の図書館の帰り……、渚君。

消、えなかった？」

思いきって口に出した。渚君はは軽く目を見開く。聖亜は怪訝な顔をして、リアは平然と。

「消えたって、渚。あの力使ったの？」

なんとなく沈黙したところに、最初にメスを入れたのはリア。

『あの力』？ どういうこと……？

「あ、うん……。」

明日菜ちゃん、気付いてたんだ。聞いて来ないから気付かなかつたかと思ってたよ」

渚君が頭を掻きながら言う。と言うことは、やっぱりホントなんだ。

「気付いては、いた。けど、『そんな馬鹿な……』って」

「そっか。まあ、そっだよねえ」

渚君は苦笑い。

「ねえ、渚君って……、

何者？」

私はちょっと間を置いてから聞いた。『何者？』だなんて、少し聞き難いけど。でも遠回しに聞くこうにも、言葉が見つからなかった

し。

渚君は苦笑いのまま、少し目を伏せた。

「ああ。僕にもよく分かんないんだよね」

「分かんない？」

「うん……」。

この力に気付いたのは4才ぐらいだったかな。なんのためにある力なのかは分かんないけど。僕なりの解釈では」

渚君はおもむろに私の前に立った。そして、私の目線に合わせて前屈みになり、ニコツと笑う。

「君を守るため」

「はあ？」

少し間を置いてから、私は反応出来た。物凄く怪訝な反応。

また、何を言ってるの？ この人は。なんで私が、渚君に守られなくちゃいけないの？

「いや、前世ではさ、僕が無力だったばかりに科学者だの幕府だのに立ちうち出来なくなっちゃってさ。結局二人で子ども残して心中みたいになっちゃったからね。今度こそちゃんとして君を守れる様に！」

「な……っ」

「ねっ」

渚君はニコニコ顔。何故だか、逆流を始める私の血液。赤く染め上がる顔。動悸までも駆け足を始めた。

何、赤くなってるの、私。何をドキドキしてるの、私。

そして、渚君の言葉に反論するリア、呆れ返る聖曲。渚君へと言うよりも、渚君の言葉に変な反応を見せる私自信に混乱する私。というゴタゴタの中、又も渚君は消えていた……。

(な…、なんだこれ…)

朝。学校の玄関。自分の靴箱の前で私は立ち尽くした。だって…、(私の上靴がない…)。何これ…。どゆこと？

とりあえずスリッパ履いてくか。

「あれ？明日菜ちゃんどしたの？スリッパなんか履いて」
その時、後ろから渚君の声が響いた。

「ああ。私の上靴がないの」

「へ？なんで？」

「さあ」

「キヤー！！」

そしてその時更に渚君の後ろから、聞き覚えのある叫び声が出た。
「リア…」

ポカンとしながら渚君は声をかけた。リアは渚君を見るなり抱きついた。

「いやくん、渚ーっ！私の上靴がないっ」

「え？」

(コイツも上靴がない！？)

……ん？これってもしかして…、いじめってやつか？しかもターゲットが私とリアって時点で、犯人は間違いなくうちのクラスの渚君ファン！（しっかし、高校生にもなっつて子どもっぽいことするね）

「ええ？二人そろって？なんでかな」

私とリアを交互に見ながら渚君がのう天氣に言った。(もとはと
言えば…)

「あんたのせいだよ」

「え…」

思わず言った私に渚君は目を丸くした。だけどそんな渚君は放つ
として、私はスタスタと教室に向かった。

犯人はアイツかな。渚君ファンのリーダー格。美人だが性格最悪の、賀川ルイ!

ガラツ。と勢い良く教室のドアをあけた。教室を見渡すと窓辺で友だちと話す賀川ルイを見つけた。と同時に目が合う。すると賀川ルイはニヤツと勝ち誇った笑いをした。(…コイツに間違いない!!)

「ちよつと賀川ルイさん？」

「何？」

私が呼び掛けると、賀川ルイは口元に薄い笑みを浮かべた。(なんつだこの女はっ)

「私の上靴、返してくれない？」

「何のこと？」

顔をひきつらせながら聞くとコイツはニヤツと笑って答えた。

ガラツ

「明日菜ちゃん！」

その時、渚君(と、くつついて来たリア)が血相変えて、教室に飛込んできた。

「僕のせいってどうゆうこと!?!…って、どうしたの?怖い顔して」

「コイツが私の上靴隠したの。きつとリアのも」

「ええ!?!」

私は思いつきり賀川ルイを指差して言った。

「なんでそんなことするの!?!」

と渚君は賀川ルイに言う。(だからあんたが私に馴れ馴れしいから…)

「言い掛かりよ。天原君。おはよ」

めげずに賀川ルイは飛びつきりの笑顔を渚君に向ける。でもそんなのは渚君には効き目なしで、続けて口を開いた。

「だって明日菜ちゃんは君がやったって言ってるよ!」

(なんだその理由は…)

「な…、なんで天原君は高瀬さんの言うことなら直ぐ信じるの！？」

賀川ルイの笑顔が崩れた。

「だって僕、君のこと知らないしっ」

と、渚君はヒドイことをサラリと言う（仮にもクラスメートを…）。しかも賀川（呼び捨て）からすれば好きな人からの言葉。（ざまみろっ）

それから渚君は、不意に私の肩に手をかけると、そのまま私を軽く抱き寄せた。

「僕の明日菜ちゃんをいじめたら、許さないからね」

（だ…っ、抱き…っ！？）何すんだ、コイツはー！？

「このっ変態！」

ドスツ、と、思わず渚君にみずおちを食らわした。

「ちよつと渚！大丈夫！？」

「天原君！ちよつと高瀬さん！何するのよっ」

リアと賀川が我先にと渚君に駆け寄り、私を攻め立てた。（こんな時に二人で息合わせないでよ…）。私の身にもなってくれ…。

「そんなことより早く上靴返してよ」

「そんなこととは何よ！？しかも何のことだかわかんないわっ」

賀川はヒステリック気味に叫ぶ（ホントこの女やだ…）

「い…、いい加減に…」

「ちよつと君！」

その時、怒りに満ちた渚君の声が響いた。

「明日菜ちゃんいじめたら…、許さないからね」

渚君はさつきと似た様なことを言った。けど、口調はさつきよりも大分重たい…（うわ…、渚君が怒ってる…。珍し…）。って感心してる場合じゃないか。

賀川は、渚君が怒ってるのに気付いてちよつと青冷めたが、なんとか食いさがっていた。

「天原君っ、どうして！？どうして高瀬さんなんかを！？まだ会

って間もないのに…っ。」

（高瀬さん『なんか』ってどういう意味だよ…。）賀川は私に対して失礼な言葉を渚君に投げかける。

そして渚君は…、うつ向き固まった。（ん？何？どうしたの？）

「どうし…っ」

パンツ

私が渚君に話しかけた瞬間、凄い音が教室に響きわたった。突然…、教室の窓ガラスが全部割れていた。

一瞬の間…。の直後、教室中から悲鳴。軽く怪我した人もいるみたい。突然のことに、みな意味が分からずパニック状態。そんな中、渚君だけはまだうつ向いたまま固まっていた。パニックな教室にも、突然ガラスが割れると言う、怪奇現象にも動じず。そしてそのまま、静かに口を開いた。

「『高瀬さんなんか』って、どういう意味…？」

いつになく太く低い声だ。

（もしかして…、これって…）

渚君の怒った顔を見た時、私の中で何かがよぎる（そんなこと…

あるのかな…）。何が予感な様な物。（でも…、きつと…）

思っ…、いや、気付いてしまった。

ガラスを割ったのは…、

渚君、渚君の力…！？

それから、すぐ担任の風見先生が来て渚君は我に返った。とたん、その場に倒れこんだ。凄い疲れた顔して。そのまま保健室に担ぎ込まれた。

「目…覚めた？」

今は2時間目真っ只中。やっと渚君は、ゆっくり目を開けた。

「明…日菜ちゃん…?」

やっと起きた渚君は、か細い声で言った。1時間以上寝たにもか
かわらず、とても疲れた顔をしている。

「ずっと…付いててくれたの…?」

「うん…、まあ」

「授業は…?」

「ん…、さぼった」

「どーして…?」

(え…)。渚君の問いに私は言葉が詰まった。言われて見れば
確かに、どうして私はここにいるんだろう。授業をさぼってまで、
1時間以上も。

「まあ…、いいや。とにかく嬉しい。ありがとう、明日菜ちゃん」

渚君はニコツと笑う。(わ…、なんで?)なんか照れる…。

「ごめんね…、明日菜ちゃん。びつくり…したしょ…?」

渚君は手を顔にのせ、口を開いた。

「うん…、まあ…。あれも…、渚君の力なの…?」

「うん…」

やっぱり…そうなんだ。あの時、なんでか私は確信してた。あれ
は…、渚君の力だ…、つて。

「実は…ね」

渚君は手を顔にのせたまま、静かに語り始めた。

「僕、ああいう風に怒っちゃったりすると、この力のコントロー
ル…、きかないんだ…」

「コントローラが…?」

「あつ、そだ。先生…、いる…?」

渚君が心配そうに小声で聞く。(そっか…)先生に聞かれちゃヤ
バイ…よね。

「ん。大丈夫。さつき、職員室行った」

渚君がほっとした様に微笑む。(それにしても…)

「コントローラがきかないって…」

「あ…、うん…。気付いたら自分の意志と関係なく力だけが発動しちゃってる…、感じて…」

「倒れたのは…?」

「この力…、ちよつと体力使うんだよね…。我を忘れて大きな力使っちゃったから…、いわゆる…疲労だよ…」

渚君は冷めた笑いをする。手を顔にのせてるから目は見えない。

けど…、口元だけの冷めた笑いだって分かる。

なんか…、コントロールきかないとか疲労で倒れるとか、簡単に言うけど…。

「それって…、危ない…んじゃない…?」

「うん…。そうなんだよね…」

渚君は少し間をあけてから、ボソツと言った。

「今日みたいに暴走しちゃったりすると…、関係ない人に被害被っちゃったり…。僕自身も…、疲労で倒れるんだから、使い過ぎたら…どうなるか分かんないし…」

渚君は、この簡単に片付けて良くない話を、ちよつと冷めた笑顔で言った。

「ちよ…つ、渚君…っ！笑ってる場合じゃないでしょー!？」

「え…」

思わず叫んだ私を、渚君は驚いた顔で見た。

「な…、何?」

「いや…、明日菜ちゃん…。あの話…信じかけてくれたんだな…っ」

(はっ)確かに今の会話の流れだと、それっぽいな…。

「べっ、別にそおいう訳じゃ…」

と、私は慌てて否定する。

「それに…」

渚君は何かを言いかけて口をつぐむ。

「いや…、やっぱいいや」

渚君はニコツと笑って誤魔化した。(コ…、コイツ…)どうして

「こうはつきりしないの…!?!」

「渚君…っ。そこまで言ったら全部言っ!」

怒った私に渚君は苦笑いで答える。

「いや…、その…。」

「何!?!」

私が強引に聞き出すと渚君は諦めた様に口を開いた。

「なんだかんだ言っても…、明日菜ちゃん…、僕のこと心配してくれたんだな…、って…」

()

私はしばらく反応できなかった。自分の顔が赤く染まったのが分かった。渚君は『へへッ』と照れ笑い。(何が『へへッ』だ!!)
「一生寝てる!!!」

私は、渚君の顔にまで乱暴に布団を被せ、保健室を出た。

いつもと同じ時間、同じ場所。もうすぐあの人が…、来る…っ!

「サレス…?いるか?」

私の後ろから男の人の声が響く。

「ライティス…!!」

「サレスっ」

私はその人：ライティスに駆け寄り抱きついた。ライティスも私を強く、優しく抱き締める。

ここは御人魚川みとなの川原にある洞窟。私とライティスは、1週間に1度、ここで会っている。今の私には、これだけが楽しみ。このためだけに…、生きている。

「ライティス…。会いたかった…っ」

「ああ…、俺もだ…っ。……ごめんな…、サレス…。1週間にたった1度しか会えなくて…」

「そ…、そんなことないっ。私の…方こそ…、私が『人魚』だといっぱつかりに…、堂々と会えなくて…」

そう…。もし私が…、人魚じゃなかったらどんなに幸せか…。

「何を言うっ！それこそおまえのせいじゃないだろっ！」

ライティスは私の言葉に辛そうな顔をする。

「人魚が堂々と表に出れないのは人間のせいじゃないか…」

ライティスは力強く私を抱き締めた。

「俺たち人間が、人魚のことを考えずに…、興味本意でつかまえたり…するから…」

ライティスは声を絞り出す様に言った。

「ごめんな…。俺は…、お前が川から出ると危ないのを分かっているのに…、お前を手放せない…」

「 やっ、何言ってるの!？」

ライティスの言葉に私の声が思わず大きくなる。

「『手放す』なんて悲しいこと言わないでっ。私は…っ、自分は一魚だけどっ、ライティスと離れるなんて考えられないっ」

ライティスの私を抱き締める手が強くなる。

(好き…。好きよ…、ライティス…)

どうして…、どうして私は人魚なの…？人間に生まれたかった。

人間に生まれて、ライティスの側にずっといたかった…っ！！

「サレス…」

私を抱き締めたままのライティスが静かに口を開く。

「俺達…、かけおち…しないか…？」

「え…」

「かけおち？」

私が驚きの声をあげた瞬間、洞窟の入口から女の人の声が響いた。

「それは困るわね。またあんた達を探さなくちゃならないじゃないかい」

とっさに振り向くと、洋服の白衣を着た女の人と着物を来た男の人が立っていた。

「アクア！」

ライティスが叫ぶ。

立っていた女性は…アクア。私達人魚を追っている若き天才女学者。なんと…ライティスの双子のお姉さん。

「お久しぶりね。やっと見つけたわ」

アクアが不適に笑う。

「まずい…っ！サレス…っ、逃げる…！」

「で…っ、でも！」

アクアの隣にいた男の人が、刀を構え戦闘体勢に入っている。ライティスも、腰につけていた短剣を抜いた。

「ラ…ッ、ライティス…！！！」

「サレス…っ、早く…！行け…！！！」

「…！！」

気がついたら…、ここはベッドの上。

「あ…朝？…今の…夢？」

いつもと変わらない朝だった。違う…と言えば、まだ目覚まし時計のなる5分前だということ。

（ちよ…、ちよつと待って…）今のは…、夢…？だって…、『サレス』、『ライティス』、『アクア』…ったら、あの話そのまま…っ！…しかも…、今の夢の中で私は…、サレスだった…。

もしかして…、これが…、渚君が言ってた…、あの…夢…！？

何これ…。冗談じゃないよ。こんなの…、こんなのただの夢！絶対ただの夢！！渚君になんて絶対言わない！！

ピンポンパンポン

『呼び出しをします。1年6組天原渚君。生徒指導室へ来て下さい』

昼休みの教室に、呼び出しの放送がかかる。ざわめくクラスメイト。

「あゝあ…。呼び出しがかつちやつたか…」

渚君が机の上で脱力してる。昨日渚君は、大事をとって早退していた。

「ちよっと…。昨日のことじゃないの？」

私は小声で言う。

「うゝ…。やっぱりそうだよね…」

渚君は頭を抱え込みうなった。

「とにかく行ってくるよ。昨日のガラスのこと疑われてるんだろうけどさ。『そんなことできる人いると思うんですか？』って、訴えてくる」

苦笑いの渚君は、そう言う立ちあがった。(まあ、そりゃそうだけだ…)

「ところで明日菜ちゃん」

「ん？」

「生徒指導室ってどこ？」

「ったくつ。渚君、君ね、転入してきたばかりでよく分かんないのは当たり前だけど、生徒指導室は玄関からうちのクラスに行く途中にあるんですけど!？」

私は、渚君を生徒指導室に案内しながら怒鳴る。渚君ってクラスメイトの名前もさっぱりっばいし。ってか、覚える気が感じられない!？」

「はい…。これから頑張つて覚えます…」

渚君は、後ろからすくすく着いて来る。

「はいっ。ここだよ。生徒指導室」

「うー…、なんか緊張してきた」

「何言ってるんの。ほらっ、頑張ってるね」
ポンポンと渚君の背中を叩く。

「失礼します」

意を決した渚君はノックの後、そう言って生徒指導室の戸を開ける。

「ん？高瀬か？」

中にいた担任の風見先生が私に気付いた。

「ああ、ちょうどいい。おまえも入れ」

（ え… ） なんで私まで？

言われるまま私と渚君は生徒指導室へ入り、風見先生の差し出した椅子に座った。私と渚君に…、緊張が走る。

「さて、まず高瀬。」

（ え…。私から？ ）

「お前…いじめられてるのか？」

（ へ？ ）

呼び出し食らう覚えがないと思ったら、そういうことか。しかし…、いじめ…なのか？あれ。上靴1回隠されただけだし…（因みに上靴は、今朝学校に来たら靴箱に戻ってた）。

「いや…、いじめって言っても…、上靴1回隠されただけです…」

し、私もおとなしくいじめられてるガラじゃないんで大丈夫ですよ」

「そうか…？」

風見先生が心配そうに言う。（今更ながら…）風見先生っていい先生なんだな」と感心。

「相手は賀川ルイだろ？他の生徒に聞いたが…。アイツ、教師への外面はいいんだけどな…」

風見先生がぶつくさ言う。（良くわかってるな、この先生）

「まあ、なんか大事になる前に言いに来いよ？」

「はい」

私は素直にうなづいた。（なんか…）『教師』ってものをあんま

し信用してなかったけど、この風見先生はいい先生だな。入学から約3ヶ月にして気付いたよ。

「次は天原な」

風見先生の言葉に渚君は、顔をこわばらせる。

「高瀬へのいじめが原因で賀川に怒ったって聞いたが…」

「あ…、はい…、まあ。そうです…」

渚君はしどろもどろに言う。

「で…、お前の怒りに呼応するかの様に窓ガラスが割れた…、と風見先生はメモの様な物を見ながら、首をかしげて言った。きつと、他の生徒から聞いたんだらうな。」

「まあ…。確かに…、そんな感じでした」

渚君は冷や汗をかいている。まあ、私は大丈夫だと思うけど。不思議な力が暴走して窓ガラスを割りました、なんて本当のことを言ったところで誰も信じない…。って言うか、渚君の頭が疑われる？「んなことはないと思うが、一応聞くぞ？そんな感じに見えなくてヤツが多いからな」

風見先生は渚君の目を見た。渚君の顔に緊張が走る。

「お前がガラスを割ったのか？」

「… 違います。一体どうやって割るって言うんですか？」

渚君が意を決して言う。渚君の一世一代の名（迷）演技の開始？

「なんで割れたのか、僕だって知りたいですよ」

渚君が言う。… 開き直ったのか？緊張してた割には、堂々とした態度だよ。

「だよな…。うん…。よし」

風見先生はひとしきり悩んだ後、渚君に聞いた。

「じゃあ、天原。窓ガラスの件は全く関係ないんだな？」

「… はい」

渚君はちよつと間を開けたが、はっきりと答えた。

「分かった。疑って悪かったな。戻っていいぞ」

「うう…。こつちこそ騙してごめんなさいだよ…」

生徒指導室が見えなくなつてから、渚君が嘆いた。

「確かにねえ」

「明日菜ちゃん…。風見先生つていい先生だね」

苦笑した私に渚君は半分涙目。オイオイ

ホント…。風見先生にはごめんなさいだわ。これは私も、渚君の共犯(?)だよ。全てを知つて黙つてるんだから。だからつて…、素直に話したところでねえ。

倒れた原因を追求されたらやばかつたかな？

(ン…?)

待つて…。おかしくない？これ…。忘れただけ…？なんで風見先生は、渚君が倒れた原因を聞いて来なかつた？

「ねえ、渚君」

まだ嘆き続けている渚君に声をかける。

「そおいや、先生。倒れた原因、聞いて来なかつたね」

「え…」

私の言葉に渚君は驚く。

「何そんなに驚いてんの？」

「えつ、いやつ。確かになと思ひましてっ」

渚君は何か慌てた…。様に見えた。(ん…？何さ?)

「そ…っ、そんなこと聞かれたらヤバイじゃん！」

苦笑して言う渚君。

なんだ。慌てたのはそういうことか？

ここまで来れば平気かな…。

「姫様っ、サレス姫様!？」

(ふう…) やーっと逃げ出せた。

さつきから私を呼んでいるのは、私の侍女のライリ。ライリ＝イクスレイ。とにかく口うるさい。

(ごめんね…、ライリ…) 私は、一人になる時間が欲しいの。姫としての仕事が嫌な訳じゃない。だけど、プライベートの時間は…、もっと放っておいて欲しいの。小さい時から側にいたライリ。嫌いじゃないよ？むしろ大好きだけど…、心配しすぎ。プライベートの時間まで干渉してこないで…。

だから…、ごめんね。逃げ出したりして。ちゃんと、帰って来るからね。

でも、どこ…行こうかな。見付からないところは…、そうだ！地上に…、人間界に…行ってみようかな…。

駄目なのは分かっている。未成年の私には地上へ出ることは大犯罪だ。だけど…、だからこそ見付からないよね？この尾も、乾かせば人間の足になるっていうし。人間にも見付からなければ…。

(あ…、遠くでライリの呼ぶ声が聞こえる…)
うだうだしてられない。…よしっ。行っちゃえっ。

「うわっつ。綺麗…」

川から顔を出して最初に目に付いたのは、色とりどりの…(これが…花?)。凄…い。

(尾、乾かさなくちゃ)

私は川からでる。草や花(だと思つもの)に隠れ、あまり目につかない様にして。

「あ…、空に何か飛んでる…」

あれが、鳥つてやつかな？虫…つて言うのも空を飛ぶつて聞いたな。…フワツと風が吹く。風が肌を撫でていく感覚。川の中の波が肌を撫でていく感覚ともまた違う。…気持ちいい。

(なんか…、何もかも新鮮で嬉しいな)

こんな、一人でのんびり出来ること…、今まであつただらうか。

いつつも誰かくつついて来ちゃうからな…。

これからも…、時々なら、川から出て平気かな…。

「うん…、それにしても…。尾、なかなか乾かない…。鱗って、ちよつとぬるぬるしてるからな…」

私は、尾に手で風を送ってみた。その瞬間…。

ガサガサツ、と、後ろから物音がした。

「だ…っ、誰か…っ、いる…？」

思わず振り返る。(どうしよう…っ)、人間に見られちゃった？

後ろにいたのは、人間。男の人。綺麗な金髪の。

(…っ)

目があった。なんで？目が離せない。この人は…誰？

その人は驚いた目でこちらを見てる。そして、静かに口を開いた。

「君は…、人魚…？」

「……………」

また…、あの…夢？

(は……)と、私はベッドの上で大きなため息を付いた。

今度は何？最後に出てきたあの男…、ライティスだよ…。つま

りは、サレスとライティスが初めて出会った時？

「も…、いい加減にしてよ…」

私は布団に顔を突っ伏して、ボソツと言う。

…渚君に言った方がいいのかな…？でも…、もし言ったら…きつ

と…、『やっぱり君がそうだ！』とか『やつと信じてくれたんだね

！』みたいな…。こう…、無理矢理…。

(か…、考えたくもね…) やっぱ言うのよそう…。うん、私は何も見なかった(マインドコントロール)。はあ…。(なんかため息ばかり出るよ…)

「夢、まだ見ない？」

「……………」

(そんな…、今日に限って聞いて来ないですよ…)。今日の渚君の登校して二言目はそれだった。

「い…、いや…。見てないけど…、まだ…」

私はわざと目を反らして言った。

「…『まだ』…？『まだ』って言った…？」

ハ…ッ、しまった。ボロ出しちまったっ。

「『まだ』ってことは、あの話信じてくれたんだね！」

「え、っ！？」

ちよ…っ、待っ…。勝手に自分の都合のいい用に話を進めるな！
っ！！

…これで…、『夢見た』…、なんて言った日には…。(か…、考
えるのよそっと)

ぎゅ…っ、と、思案中の私に何かがおおいかぶさった。いや、何か…なんて言うまでもなく…、アイツ…っ。

「な…、渚君…？」

私が額にプツツンマークを浮かべているのに対し、渚君はニッコリ笑顔。

「夢見たら、ちゃんとして僕に教えてよ？」

……………っ、ホントにこの男は…っ！

「いちいち抱きつくなっ！」

ボスッ…。いつものパターンである。

「えー、今日から3週間、教育実習で来た水奈本先生だ」

間もなく始まった朝のショートホームルーム。風見先生が言う。

(教育実習：?) 確かに、風見先生の隣に、スーツを着た若いお兄さんが立ってるけど…。なんていうか童顔? 高校生の中に入ったら埋もれそう。

「今日から3週間、皆と一緒に勉強することになりました、水奈^{みな}本海吏^{もとかいり}です! どうぞよろしく!」

教育実習の水奈本先生は元氣よく言う。(…なんかさ…) 渚君と似た様なタイプ…。(苦手だ…)。

「あ…、あれ?」

隣で渚君が疑問の声を上げる。

「どしたの?」

「え…、いや…。ちよつと…。まさかね…」

(…は?) 何を意味不明なことを…。
が、『意味不明なこと』はまだ続いた。

「…サレス…姫様…?」

と言ったのは、他の誰でもない水奈本先生である。

「…!?!?」

と、声にならない叫びをあげたのは、私と渚君。(サ…『サレス』
つて…)

水奈本先生は私の方を見て、放心した様に立ち尽くしている。そして、放心した様な瞳のまま、私のところへ歩いて来た。…直後、私の両手を握りしめた。

「姫様? サレス姫様ですね!? 覚えてらっしゃいますか!? また会えて嬉しゅうございます!」

「…は!?!?」

(な…、何!?!? 何なの、この人…)

他の生徒は啞然(当たり前前)。私はパニックって口をパクパクしていたら、渚君がボソツと口を開いた。

「あ…つ、あんた、もしかして…?」

見ると渚君はとても驚いた顔をしている。その声に振り返った水奈本先生も、渚君の顔を見るなり目を丸くした。

「お…、お前は…！」

水奈本先生はそろそろと、渚君を指差す。（な…、何…？）

「姫様をたぶらかした、あの憎きライティス…！」

は？

「だつ、…誰がたぶらかしたつ、誰が！」

ちよ…、ちよつと待つてよ…。この人、サレスとライティスを知つてんの！？またあの話の関係者！？

「どーして君がここにいろの！？」

「そつちこそ…！どーしてまた姫様の近くなんだよ！？」

二人ははたから見たら、いや、私から見てもかなり意味不明な言い合いを繰り広げる。（ちよ…、ちよつと待つて）

「うるさいっ…！」

とつさに私は叫ぶと、二人はピタツと止まり私の方を見た。

「ちよつと待つてよ！二人でギアギアと、訳わかんない…！」

水奈本先生！あなた誰ですか！？」

私の言葉に、水奈本先生はシヨックを受けた顔をした。

「ひっ、姫様！覚えてらっしゃらないんですか…！？」

「知りませんよ！その『姫』つての、止めて下さい！」

「明日菜ちゃんはまだ何も思い出してないよ」

「渚君は黙つてな」

「姫様！覚えてらっしゃいませんか！？俺は姫様の侍女だった」

「ライリ』です！」

水奈本先生がそう言った。

え…？私の…侍女…？侍女のライリって…、まさか…あの…？

「ライリ…！？」

「覚えてらっしゃいましたか…！」

やっと頭の整理がついた私に、水奈本先生は嬉しそうに言う。

ちよつと考えた後に、ふと昨日見た夢が頭に蘇った。『ライリ』、

サレスの侍女の人魚だ。

「ラ…ライリって…、あのライリ…ですよ？そつ、そおいや顔

そっくり?…だけど男!？」

「明日菜ちゃん?…」

一人パニクリながらブツブツ言っていると、渚君がいつになく低い声で言った。

「まだ夢見てないんじゃないかなかったの?」 渚君の疑惑の目。(ハ

ッ、しまったつ。思いつきりボロ出しちまったつ)

「えっ!あつ、いや…」

「どーなの!？」

「み…、見ました…」

いつになく強気な渚君に気押され気味の私(何敬語になってんだ、私)。それから渚君は、喜々として聞いてきた。

「ど…、何処!?!何処の夢見たの!？」

「え…、え」と…。初めて会った時と…、アクアに襲われた時…

「ふんつ。も…、ちゃんと教えてつて言ったじゃん!」

「……………」

いや、だって…、ねえ?

「ま、その話は後でゆっくり。それより水奈本先生!」

渚君は水奈本先生に詰め寄った。

「あんたもしかして…、『ライリ』だった時の記憶ある…、の?」

「そーだ」

渚君の問いに水奈本先生は強気に答える。

「……………つ、どーしてつ、ライリといいアクアといい、前世まえの記

憶あるんだー!？」

「『アクア』!?アクアもいるのか!？」

思わず叫んだ渚君の言葉に水奈本先生が反応する。

「いるよ」

「なにい!? 姫様!俺がアクアからお守りします!」

「今のアクアはそういうことしないし大丈夫だよ」

渚君の言葉に、水奈本先生は『そうなのか?』という顔をする。

「それに…、何もあんたが明日菜ちゃん守らなくても僕が守る!」

(はい?)

「ふざけるなっ！俺は、お前から姫様を守る！！」

(はあ?)

その時、風見先生の止めの言葉が入った。(そいや朝のショートホームルーム中だったっけ)

ってな訳で(?)うちのクラスでは、渚君と水奈本先生の冷戦が始まった。…けど、それより凄いのは聖亜と水奈本先生である。聖亜は隣のクラスだから、現場をみたコトはないけど、既に冷戦通り越して手が出そうだとか…。授業中とかまさに火花が散ってるらしい。(是非、生で見たい)。

そんなこんなで、気付くとこの学校では、私達(私と渚君、聖亜、水奈本先生)の噂で持ちきりになっていた。(こないだ新聞部の人が入ンダビューにきた…。追いついたけど)。そんな中、一つの事件が起こった。

ガッターン！！

「な…、なんだあ？」

と、言ったのは教科担任の先生。今は授業中。突然隣のクラスから何か重たい物が倒れる音がした。(…?聖亜のクラスだ…)

ガラッ

その時、誰かがうちのクラスのドアを勢い良く開けた。それは…、

「聖亜…!?!」

そのままズケズケと教室に入って来たのは聖亜だった。なんだか、怒りに満ちた顔をして。

「天原！」

「は…、はいっ!?!」

怒りにまかせて叫んだ感じの聖亜に、渚君は驚きつつ声を上げる。

(せ…聖亜？何事？)

「お前っ、水奈本のことどう思う！？」

「は？」

私と渚君が同時に声を上げる。(仮にも先生に呼び捨てかい…、

聖亜)

「ヤだろ！？な？腹立つだろ！？ムカつくだろ！？」

「え…、あ…、うん…」

「だろ！？よしっ。お前俺の仲間だ！」

「へ？」

「お前、ヤなんだろ！？あいつっ」

「あ…、そ…だよねえっ。やだよねえっ、腹立つよねえ！？」

「だろ！？」

何意気投合してんだ、この二人…。

「明日菜！お前も仲間だ！」

「はい！？」

「お前だつていい加減ヤだろ！？『姫様』つて呼ばれるのっ」

「まあ…、そりゃ…」

「アーツクーツアーツ」

その時、どこからともなく、水奈本先生の怒りに満ちた低い声が響いた。

「貴様…、今は授業中だぞ…、早く教室戻れ…」

「うるっせえな。誰が貴様の言うことなんか聞くかよ。後、アクアつて呼ぶの止めやがれ」

水奈本先生の言葉に、やっぱり怒りに満ちた聖亜が言う。

「しかもアクア！ついでにライティス！姫様に触れるな！」

水奈本先生が怒鳴る。

(…は…、)なんかため息でる。なんだつてこの兄ちゃん(既に呼び方が先生じゃなくなってる)は、そんなに前世まえにこだわるんだよ…。

その時、隣のクラスからうちの担任：風見先生が静かに怒りなが

らやって来た。

「立花…、高瀬…、天原…、水奈本先生…」

な…、なんかやな予感が…

「放課後…、生徒指導室まで来い」

や…、やっぱり？

風見先生は、静かになった聖亜と水奈本先生ん引き連れて隣のクラスへ戻って行った。

まためんどいことになったぞ…？

放課後。私達は生徒指導室の前に集合している。何故か騒ぎを聞き付けたリアも一緒に。私も関係者だと意気揚々と。

しばしの沈黙後、リアが口を開いた。

「こんなことになったの……、誰のせいだと思う？」

リアのイヤミっいたらしい言葉に、私・渚君・聖亜の3人はビシッと即座に水奈本先生を指差した。

「なっ、なんで俺なんだよっ」

水奈本先生は怒ったが、その言葉に聖亜がキレた。

「なんでも何もねえだろ！？ 貴様がやったらと前世まえにこだわってっからっ！ しかもっ、例え教育実習生だとしても、『先生』ともあるう人が『先生』に呼び出されるとは、『先生』としての自覚が足りねえんじゃねえのか！？」

「う……っ」

水奈本先生は返す言葉につまる（うっわっ、すっごい説得力あるな〜）。

ガチャと、その時生徒指導室の戸が開く。

「何騒いでる。早く入れ」

怖い顔した風見先生が言った。

「んで、お前らなんだ？」

生徒指導室で皆椅子に座ると、即、風見先生の質問が始まった。

「いや……、『何』と言われまして……」

渚君が苦笑いで言う。

「話しちゃってもいいんじゃないの〜？」

リアがため息ついて軽く言う。とっさに止めたのは渚君。

「駄目だよっ」

「だって、言ったってどーせ信じてくれる訳ないもの。言ったって、言わなかったって変わんないじゃない」

(確かにごもつとも)

なんか釈だが、リアの言い分に納得していたら、水奈本先生が口を挟んだ。

「そいや……、カイメールも関係者って……、どういつ……」

「あゝ、リアは現役バリバリなの」

渚君が水奈本先生の言葉を遮りつつ言う。

「えっ!?!? ……あ、だからこの髪……」

「おい……っ」

風見先生が、とても怒りつつ口を挟んだ(先生……、目が怖い……)。

「俺に分かる様に説明しろ」

風見先生の一言で、空気が張り詰める。私達は思わず顔を見合わせた。

「うんっ、よしっ」

沈黙を破って、口を開いたのは渚君。

「どーせ信じて貰えないんだし、言おう!」

「えっ!?!?」

思わず声を上げたのは、私と聖亜、水奈本先生。だけど渚君は、そんな事は気にも止めず、風見先生に言った。

「先生。前置きします」

「ん?」

「これから全て話します。信じる信じないは先生の自由ですけど、決して、作り話じゃないんで」

いつになく真剣な渚君。風見先生は、その真剣さを受け止め、うなづいた。

「わかった。話してみる」

その後、約10分を要して、渚君はあの話の洗いざらい全部を風

見先生に話した。風見先生は、終始腕を組んだまま、真剣に耳を傾ける。

（なんで……。風見先生……。なんでこんな嘘の様な話……。真面目に聞いていられるの……。？）私はてつきり笑い飛ばされるか、『ふざけるな』って怒られるかと思つてたのに……。

渚君が全てを話した後、生徒指導室の中は、重たい空気が流れた。しばしの沈黙……。その中、風見先生が静かに口も開いた。

「今……。『アクア』……と言つたな？ 天原」

「あ……。はい……？」

風見先生の意図のわからない質問に、渚君は首をかしげ気味。

「で……。立花はその……。『アクア』の生まれ変わりだ……。と言うんだな？」

「え……。？ はい……。まあ……」

同じく意図のわからない質問に聖亜も首をかしげる。

（何……。？ 先生……。？ どういうこと……。？）

先生はかなり深いため息をついて、腕を組み直した。

「先生……。？ どうしたんですか……？」

渚君が言つと、風見先生はまたため息をついて、ゆっくりと言つた。

「実は……。な。俺は……。？ その『アクア』……。？ という女性の……。？、

子孫だ」

「！？」

風見先生が……。アクアの……。？ 子孫……。！？ 風見先生の爆弾発言に、みんな固まった。風見先生はそのまま話を続ける。

「立花……。？ その女性のフルネームは、『アクア・リート・ハリ』というか？」

「え……。？ はい。そうです」

「そうか。确实だ。俺は、その人の子孫だ」

シーンとした。あまりの突然のことに。みんな思い当たる言葉もなく、黙りこんだ。

そんな中、聖亜がやっとの思いかのように口を開いた。

「……そうか……。『風見』だ……」

聖亜の言葉に皆振り返る。聖亜は、何かに気付いた様な顔をしている。

「俺……、いやアクアは、人魚探しに協力してくれた日本の風見家の当主と結婚したんだよ……」

「え……、『シヨウ』さんと？ そうだったんだ……」

渚君が驚いて言う。

そいや、前に日本の風見家と協力したって言ってたっけな。

「先生……」

渚君は続けて口を開く。

「どうしてこんな……300年も前の先祖のこと……、知ってるんですか？」

「ああ……。1冊の日記があるんだ」

「日記……？」

それから、実物を見せてもらうことになり、私たちは今、風見先生の車で先生の家へ向かっている。『日記』というのは、どうやらアクアの書いたものらしい。

(……………)

ちょっと待ってよ……っ。なんでこんな展開になってる訳！？ しかも……、風見先生がアクアの子孫ってことは、アクアは実在した訳で。つまりは……、あの話は実話……！？ ん……、いや待てよ？ 実在した人物を勝手に使って空想話を作りあげたっていうことも……（こじつけ？）。

「これだ」

一人で考えを巡らせているうちに先生の家へ着いてしまった。先生はすぐその日記を持ってきて、私たちの前に差し出した。

それは表紙に『DIARY』と書かれた、ハードカバーのポロポロのノートだった。『300年前のもの』と言われても、納得できるほど。

聖亜は懐かしげに眺めている。

「うわぁ……、全部英語……」

ソロツと開いて見ると中は全て英語。(……読めはするけど……、私には訳は無理かな……)

その時、隣で渚君が言った。

「これ……、英語って言ってもイギリス英語だよ」

「イギリス？」

「そ。ハリー家はイギリス貴族だからね」

ああ、それも前に聞いたな。

なんか……、なんでこんなに証拠やら証人やら……。もうやだ。

この話、どんどん真実身をおびてくる。

「先生、これ読めるんですか？」

その時、水奈本先生が口を開いた。

「いや。全然」

「じゃあなんでアクアのこと、ご存知だったんですか？」

「ああ。俺の家には、この日記と共に、代々言い伝えられてきた話があるんだよ」

それは、300年も前に『アクア＝リート＝ハリー』という世界的に有名だった女科学者が先祖にいた……というもの。

しかも、それだけではなく、人魚を追っていたこと、それにより弟と対立したこと、結局は人魚を捕まえることができなかったこと。

この日記と共に、代々伝わってきたらしい。

「すげ……。全部当たってる……」

風見先生の話聞き終わった後、聖亜がボソツと言った。

（全部当たってる……！？）ちよつと待ってよっ。なんで300年も前の話がそんなに正確に伝わってくる訳！？

「しかし……。先生が俺の……。アクアの子孫……。なんか変な感じだ……」

聖亜が呟く。（確かにな）世界は狭い。

って……。私またなんか流されてません？

「ま……。これでお前達の繋がりはわかった」

風見先生が私たちを見回して言う。

「だけど、学校である訳のわかんねえ騒ぎは起こすなよ？」

（確かにね）最近私たち、ギャーギャー騒ぎ過ぎだ（7割、水奈本先生のせいだけ）。

「はい」

皆、返事をした。

帰り道、風見先生の家はあまり遠くないので、歩いて帰ることになった。

「なんか懐かしいな……」

御人魚川みとなの橋にさしかかった時に、水奈本先生が呟いた。

「そいや水奈本……」

その時聖亜が、何かに気付いた様に声を上げた。

「人魚の寿命は800年くらいだろ？ 当時300才にもなっただけなかつた貴様が、どうしてももう生まれ変わってんだ？」

聖亜は、自分で話しかけたにも関わらず嫌々といった感じ。

（寿命が800年？）そいや、前に渚君が人魚は10年で人間でいう1年分年とるとか言ってたっけ。（って事は、ライリは若くして亡くなったのかな？）

聖亜の言葉に水奈本先生は表情を曇らせた。

「あ…、いや…。実は…」

そこまで言うと、水奈本先生は言葉を詰まらせた。聖亜がじれったそうに口を開く。

「なんだよ」

「いや…、実はライリは…、姫様が亡くなった後…、

自殺したんだ」

「じ…、自殺う!?!」

思わず皆で叫んだ。

それから道の往来で…というのもなんだから、私達は川原へ移動した。そして、水奈本先生が詳しく話し始める。

「前の俺…、ライリは…、姫様が亡くなった後…、あの憎きライティスから姫様を守れなかった責任と、姫様を失った悲しみで…、姫様が亡くなった6日後…、自殺したんだ」

重い空気が流れる。水奈本先生の言葉に、皆言葉を無くしてる。

ただ一人を除いては。

「どうやって?」

と、なんの遠慮もなくスパツと聞いたのはリア。(確かにこういうこと気にしなさそうだけどさ…。ちよつと考えるよ…))

「手首を…、切ったんだ。姫様と…、同じ方法を取ったんだ」

水奈本先生は悲しげな、微かな笑顔で言った。更に、空気が重たくなっていく。リアだけは、『それにしたって、死ぬなんてバカね』とでも言いたげ。

そんな中、さっきまで暗い顔してたはずの渚君が声を上げる。珍しく怒った顔で。

「ちよつと待て…。水奈本先生…、あんたの言いぐさ聞いていると、まるで僕がサレスを殺したみたいじゃないか!」

「けつ。そんな様なもんだろつ。テメエが姫様たぶらかしてさっ」

渚君の言葉に水奈本先生はキレる。

(また始まった……。この二人の喧嘩) って言うか、水奈本先生の大人気ないというか……。何、高校生のガキ相手にムキになっただよ……。

「違う！あれは無理心中じゃない！ちゃんと二人合意の上だったんだ！」

渚君は叫ぶ。

「しかもあれはサレスが……っ」

勢いに任せた感じに叫んでいた渚君が、言葉を詰まらせた。何か思い出した様に目を丸くする。そしてそのまま、表情を曇らせ、宙を眺めてボソツと言った。

「そうだ……。あれは……。サレスが言い出したんだ……」

(サレスが……。?)

「そんな訳あるか……っ!!」

水奈本先生が叫ぶ。少し間を開けてから、やっと……という感じで。

「あるんだよ……っ」

渚君は悲痛な叫びを上げた。そして、うつ向きポツリポツリと話した。

「サレスが……。『死ぬ』って言い出したのは……。水奈本先生……」

……、あんたらを……。ライリ達を守りたかったからなんだ……」

「……なんだって……?」

水奈本先生の顔が青ざめる。そして、私の顔をチラッと見た。(

あの……。私を見られても困るんですけど?)

渚君はうつ向いたまま、話を続けた。

「最初サレスは、自分だけが死ぬって……。言い出したんだ。理由を問いつめたら……。これ以上地上にいたらいつアクアに捕まるかわからない。だから、皆に迷惑がかかる前に死ぬって……。ライリ達皆を……。守りたいって……。そして自分が死ぬことで、アクアにこの重大さを気付かせたいって……。言っただ……。」

うつ向きながら語る渚君は、辛く苦しそう。水奈本先生は、青ざめると同時に怒りを込みあげて叫ぶ。

「それで!? そのまま死なせたつてのか!？」

「違うっ! 僕は止めた! 止めた……」

次第に青ざめた、苦しそうな顔になっていく渚君。

「止まってねえじゃねえか!」

「違う……っ! 止めたけど……、サレスは本気で……っ。だから一緒に……っ」

怒りに任せて叫ぶ水奈本先生。だんだん……、脅えてる様な感じに見えてきた渚君。(何……? 一体どうしたの……?)

「僕が殺したんじゃない!!」

川原に渚君の声が響きまたる。渚君は、脅えた様に叫び、同時に、崩れ落ちる様にその場に座りこんだ。

皆、言葉をなくしてる。ただならぬ雰囲気、風見先生も立ちつくしてる。

渚君はカタカタ震えてる。何? 一体……、どうしたの? 渚君。

私はそろっと歩み寄り、渚君に声をかけた。

「渚……君?」

私はしゃがんで渚君の顔を除き込んだ。ちらっと、私を見た渚君の顔は……。 (な……っ、泣いて……)

「うわっ」

その直後。突然渚君が私を抱き絞めた。いつもの軽い感じじゃない。まるで助けを求められたみたい……、必死で。

「渚君……?」

やっと、私の口から出た言葉はそれ。

あまりの事態にか、珍しくリアの止めが入らない。私も何故か……、振り払えない。

「ねえ……。渚君……、どうした……」

「ごめんね……」

渚君がボソッと言う。

御人魚川付近は、大きな川なのに、人通りが少ない。だから、小
声でもいやに響く。

渚君は、何かに脅えるかの様に少し……震えてる。

「ごめんね……。水奈本先生の言う通りかも……。結局言っ
て、サレス……前の君は……、僕が前の僕が殺した……ことになるのかも
……」

「……え……？」

渚君の『告白』に、息を飲んだ。私だけでなく、皆も。渚君は震
えたまま、私を抱き絞めて……。いや、しがみついている。

(サレスとライティスは心中したんでしょ?)なのに、渚君……、
ライティスが『殺した』って……。、どういうこと?

「やっぱり貴様かーっ!」

その時、水奈本先生が拳をふり上げ叫んだ。

(先生……。っ、もしかしてなく……。っ)

「先生つだめっ!」

私は思わず渚君を振り払い、水奈本先生を止める様に渚君の前に
立ちはばかった。水奈本先生は、拳をふり上げたみピタッと止まっ
た。

「明日奈ちゃん……」

「姫様……」

渚君と水奈本先生が力なく咳く。

それから渚君は一呼吸置いてからボソツと言った。

「明日奈ちゃん、ありがとう……。でも……。いいんだ」

その言葉に皆、渚君の方へ振り向く。渚君は静かに立ち上がった。
そして薄く笑って口を開いた。

「明日奈ちゃん……。ありがとう。でも僕は、君を……。サレスを
守れなかった……。いや……、

サレスはライティスなんかと出会うべきじゃなかったんだ……」

渚君は辛そうな笑顔で語る。辛そうではあるけど、はっきりと。

「僕は水奈本先生に……。ライリには殴られても仕方ないこと……。、

してるんだよ」

誰もいない静かな川原なのに、渚君の言葉でさらに静まり返った様な気がした。みんな言葉をなくして立ち尽くしてる。何分かして、珍しく通った人の声で、我に返った。

そして……、水奈本先生が口を開く。

「ハハ……。やっぱりそうなんだな……？ 貴様が姫様を……殺したんだな……？」

「……そんな様な……ものだよ……」

水奈本先生の言葉に、渚君はうつ向いて、静かに答えた。

「そうか……。殴ってもいいんだな……？」

水奈本先生は、拳をさすりながら上目使いで言う。

「うん。覚悟は出来てる」

顔を上げた渚君が、水奈本先生の目を見てはつきりと言った。

「そうか……。じゃ、お言葉に甘えて……っ」

(あ……っ)

「ダメーっ!!」

気付いたら、私は渚君と水奈本先生の間割って入っていた。しかも、渚君に多い被さる……。いや、抱き締める様に。そして、私と渚君はその場に座りこんだ。なんでこんな行動を取ったのかわかんない。ただ、二人とも間違ってると思った。殴らせてはいけないと思った。そしたら、体が自然と動いていた。

水奈本先生は、呆然として、拳を振り上げたまま硬直してる。渚君も呆然として固まってる。

私は必死に、言いたいことをまとめてる。

「……違う、違う……。二人とも……。間違ってるよ……。っ」

頭の整理が少しいつて、やっと口を開くまで、2〜3分かかっただろうか。私は、この妙に声の響く川原で、思ったことをそのまま言った。……まだ、頭の整理はしきれていないけど。

「二人とも間違ってるっ。『サレス』はそんな風に思ってたなかったっ。私が……。本当に『サレス』なのかはわかんないっ。でも……、

でも私が今まで2回しか見てない夢の中での『サレス』はっ、誰が悪いか、そんなことなんも考えてないっ。『サレス』はただ……、ただ純粹に『ライティス』が好きで、側にいたくて……。だけど……、口うるさいとか言いながらも結局『ライリ』のことも好きで……、守りたくてっ。

『サレス』はただ、それだけだったんだよ……」

(なんか……、言いたいことまとまってない……)

聖亜やリアも、水奈本先生に渚君も言葉をなくしてる。

「……姫様」

水奈本先生がボソツと言い、力尽きた様に拳をストンと落とした。

「……明日奈ちゃん」

渚君の優しい声が響いた。ふと、渚君の顔を見ると、うつすら涙目で優しく微笑んでいた。そして、ホツとしたかのような軽いため息をついて、優しく強く私を抱き締めた。

「ありがとう……。明日菜ちゃん……」

なんだろう。渚君の言葉に、なんだか心の奥が暖かくなった。

「お前ら……」

しばらくして、聖亜が口を開いた。

「いつまでイチャついてるつもりだ？」

その言葉に、私は我に返った。

「……」

ザザッと、私は無理矢理渚君から離れた。

(……そうだった)私、何渚君なんか抱き締めてんの!? 何渚君なんか抱き締められてんの!?

「あゝあ、立花君……。せっかくいい雰囲気だったのにブチ壊しじやん……」

と、渚君はとてもがっかりした様に言った。

「だ……っ、誰がいい雰囲気だっ」

「えー……？だって今回は、明日奈ちゃんの方から抱きついてきてくれたんだよ？」

「う……」

渚君に突っ込んで欲しくない所を、思いっきり突っ込まれ、言葉につまる私。

(そーだ……) そうだよ……。今回は、私の方から……っ。

(っかー……っ)

一生の不覚っ！！

「リア様！」

その時、川の方から水の音と共に女の人の声が響いた。皆、一斉に振り向く。

「げっ、レーネー!!」

とっさに叫んだのはリア。(リ……、リア様……？ レーネ……？)

そこには、川から首から上だけを出した女の人がいた。そしてその人は周りを見回した。

「に……っ、人間！」

その人はそう言うと、パシヤンと川にもぐって行った。

「な……、何……？」

私がボソツと言うと、渚君が口を開いた。

「リア……。今の人、確か……」

「そうよ。私の侍女の『レーネ』よ」

と、リアは呆れ顔。それに、水奈本先生が反応する。

「じ……っ、侍女！？ お前、そんなに位くわい高いのか!？」

「そーよっ。私は現長老の娘よ!？ それに、カイメール家よ!？」
リアが得意気に語る。

「カ……、カイメール……？ あ……っ、あの大金持ちの……っ!

？　こんなクソ生意気な小娘が！？」

水奈本先生は目を丸くさせ、尚且、リアを指差して言った。

「ク…………っ、クソ生意気な小娘とは何よ！？」

「いえ…………っ。滅相もございませんっ」

（何やってんだよこの二人…………）しかも水奈本先生敬語になってるし。

「あゝ、そうそう。レーネは水奈本先生…………、ライリと同じ家の者よ」

リアが思い出した様に言う。

「え？　イクスレイ家？」

「そっ！　あんたをえらく慕ってるわ。侍女の鑑だって。ライリは侍女達の間では有名よ」

「ライリさんなんですかー！？」

リアが言い終わるや否や、川から驚きと喜びに満ち溢れた声が響いた。

「に…………、人魚…………だ…………」

私は呆然として言った。

リアの侍女という『レーネ』さんが、リアの説得で陸に上がった。（私らは人魚を捕まえたりはしないってことね）

私の目の前に今、腰から下が魚…………、世間一般でいう『人魚』の女性が座っている。

「ホ…………、ホントに大丈夫なんですかあ…………？」

レーネさんは弱々しく聞く。

「大丈夫！　私なんか毎日会ってるのよ」

リアが得意気に話すが、レーネさんは不安が拭いきれない様子。

（ちよ…………）

ちよつと待つて…。なんで人魚なんか実在してる訳ー！？

「あ……、あれ？」

その時、レーネさんが私の顔をマジマジと見て言った。

「もしかしてあなた……、サレス姫の生まれ変わりの方じゃござい
ませんか？」

(……へ?)

目を丸くして固まった私をヨソに、あいつがいつものノリで私に
抱きつきつつ言った。

「そう！ この人がサレスの生まれ変わり！ ね、明日奈ちゃん」

(……っ)

ホントにこの男は…っ。

「そんなこと知らん！ それにっ、いちいち抱きつくなくっ！」

そんな私達のやりとりを見て、レーネさんはため息つきつつ言っ
た。

「サレス姫様……、やはり人間に転生なさったんですね……。人魚
でしたら……、また姫として生活して頂きたかったのですが……」

レーネさんは、染々と嘆きながらボソツと言う。

(ひ……、姫として……?)

じよ……、冗談じゃない！ 私は人間だー！

「姫として……って、例えば王族の生まれじゃなくても？」

パニック中の私をヨソに渚君が言う。するとレーネさんはキリッ
とした声で言った。

「はい。その通りですわ。例えば人間の男にたぶらかされ、最後は無
理心中という不名誉な形で終わったにせよっ、姫としての実績は今
までのどの誰より素晴らしいものだったんですからっ」

レーネさんは腕に力を込め力説。(へえ……。サレスってそんな
凄かったんだ……)

っ……、私また流されてるー！？

「ちよつと……っ」

突然、怒った渚君の声が響く。

「君も誤解してるっ。僕はサレスをたぶらかしてなんかないっ」
渚君は珍しく怒鳴る。レーネさんは負けじと反論。

「何が誤解ですかっ」

「何がじゃないっ。僕とサレスは出会った瞬間に、こうバツクに光が走ってそうな一目惚れという恋に落ちて入ったんだ!!」

怒って顔を真っ赤にさせた渚君が力説。(何をクサイこと言ってるんだよ、この男……)

「何が一目惚れですかっ。貴方がサレス姫をたぶらかしてそう思い込ませたの間違いじゃありません!？」

「へえ。サレスって、そんな男にたぶらかされる様な器の姫だった訳?」

「う……っ」

渚君の鋭い突っ込みで口を積むぐレーネさん(勝者渚君だあね……)。

「もういいですわっ。とりあえずサレス姫の生まれ変わりの方が見付かった事を王に伝えて参りますっ! リア様っ! 帰りますわよっ」

「え……」

レーネさんは負け惜しみの的に叫び散らし、リアの腕をガツシリ掴んだ。

「ちよっ、冗談じゃないわよ! 私は渚の側にいるのよ! 離しなさいよっ」

リアの抵抗も無視し、レーネさんは川へ向かう(以外と力持ち……)。

「バイバイ」

リアにニコやかに手を振る渚君(解放されるもね)。リアは悲壮感たっぷりに叫ぶ。

「渚ー!!」

ドボンッと、リアとレーネさんは川の中へと消えていった。(な

んか……) リアにはざまあみろって感じ? (あの人嫌いだし)

「ちよつと待て」

その時、水奈本先生がボソツと言う。

「アイツ、明日から学校どうすんだ……?」

たまに先生らしいこと言う。

次の日。私と渚君と聖亜は、一応リアのことを風見先生に報告に行った(リアのことだから2、3日で戻って来るだろうって話になったけど)。風見先生は、イマイチ話に着いていけない感はあるものの納得してくれ、他の先生達に話をつけてくれることになった。(ホントいい先生) リア、あんた恵まれてるよ?

それから……。

「なあ、立花。あの日記、うちの家が持っていていいのか?」

風見先生が神妙に聞いた。聖亜はポカンとして返す。

「へ?」

「もとはと言えば立花の……前世のものだろ? うちとしても代々伝えていかなきゃいけないって訳でもないし。読めないし」

風見先生の言葉に聖亜の表情が少し曇る(何? どしたの?)。

が、曇ったのは一瞬だった。

「ああ。したら俺が貰います」

(……なんか意外……)

あれだけ前世は関係ないって言う聖亜だし、いらないうって言うかと……。

そして、次の休みに取りに行くことになった。んだけど、渚君が『もう1回見たい』などと言い出し、更にいつものノリで、私まで行くハメになった。(なんで私まで……)

日曜日。私と渚君、聖亜は風見先生の家へやってきた。インターホンを押すと風見先生が出て来た。

「おお、来たか。わざわざ悪いな」

「いえ……」

「おじさんっ」

風見先生の言葉に聖亜が答えかけた時、私達の後ろから女の人の声が響いた。

「ちよつと勉強教えて貰おうと思ったんだけど……、お客さん？」

振り返ると私達より少し年上な感じの美人な女の人が立っていた。

（『おじさん』って……、風見先生のことかな）

「ああ、利寿。すまん。こいつらは俺の生徒だ。で、コイツは俺の姪の笠上利寿だ」
かさがみりす

風見先生は私達にその人を紹介した。そして利寿さんは、私たちにニコやかに挨拶をした。

「こんにちは」

「あ……、こんにちは……」

私達が口々に答えた時、利寿さんの顔から笑みが消えた。そして、とても神秘的な顔をしてボソツと言った。

「……あなた達……、誰？」

「え……？」

利寿さんの唐突な言葉に私達は反応するのに時間がかかった。利寿さんは、私達の顔を見ながらブツブツと独り言。

「……この顔……まさか……？　こんなになぞっくり……」

訳が分からずポカンとしてると、利寿さんはある1点を見て固まった。その視線の先にいたのは……、聖亜。

「アクア？」

と言ったのは他の誰でもない利寿さん。(へ?)何?聞き間違
い?

「アクア……? アクアなのね……?」

利寿さんの顔が喜びで満ち溢れていく。涙目になるほど。聖亜は
目を見開いて立ち尽くして居る。

「アクア……っ! 会いたかったー!」

「うわっ」

利寿さんは喜びの声をあげながら、聖亜に抱きついた。その拍子
に、二人はバランスを崩し、その場に崩れた。

(ちょ……、ちょっと……)なんでこの人の口から『アクア』なん
て出てくる訳!?

「アクア……っ。会いたかった……」

利寿さんは、何度も『アクア』と呼びながら聖亜を抱き締めて居る。
聖亜はそんな利寿さんを無理矢理引き離し、顔をマジマジと見た。

そして、何かピンと来た顔をしてボソツと言った。

「もしかして……、お前…… ショウ?」

「ごめんなさい。紹介が遅れました」

その後、風見先生の家に入り、利寿さんが改めて自己紹介を始め
た。

「私は笠上利寿。おじさん……、風見先生の姪です。つまり、アク
アの子孫です。そして、私自身は……、私の前世は……」

アクアの夫の風見翔太郎かざみしょうたろうでした」

「ええ、!?!」

数秒の間、私と渚君、そして風見先生は同時に声をあげた。

「ショ……っ、ショウさん!?!」

渚君は目を丸くして言う。それに対し利寿さんは涼しげに答える。
「ええ。生まれた時から記憶があったの。……で、その呼び方がす
んなり出る辺り……、やっぱりあなたライティスなのね？」

「えっ!? あっ、はい。まあ……」

驚きのあまり、渚君はしどろもどろ。そして、利寿さんは私を見
た。何故か……、冷たい眼差しで……。

「そして……、あなたはサレスの……？」

(な……、何……?) 言い終わると利寿さんの眼差しが更に冷たく
なった気がした。

それから利寿さんは、私から視線を反らし、聖亜を見た。

「ねえ、アクア……」

利寿さんが静かに口を開く。

「どうして捕まえないの？」

「は？」

利寿さんの唐突な言葉に聖亜は怪訝な顔をする。

「どうして? 念願だったじゃないっ! 人魚を捕まえること!

目の前にいるじゃないっ!」

「あ!?!」

利寿さんの言った『捕まえる』の意味を理解した聖亜が、顔をし
かめる。

「今が人魚を捕まえる絶好のチャンスじゃないっ」

(もしかしなくても……) 『人魚を捕まえる』って……、私を捕ま
えるってこと……?

「ねえっ! アクア……」

「うるせえっ」

利寿さんの言葉を遮り聖亜が怒鳴った。

「今の俺にそんな気はねえよ」

聖亜が利寿さんを睨む。

「そんな……っ。私はまたアクアと人魚探しができたらなって……、
ずっとアクアを探してたのよっ!?! アクアがやらないなら……、

「私がやっちゃうわよ!?!」

「やめろっ!」

聖亜の一言で辺りが静まり返る。利寿さんもビクツとして口をつぐんだ。聖亜は、かなりのブチ切れ状態だ。

「俺にその気はねえつつつてんだろ?!? しかもっ、明日菜も今は人間だぞっ」 聖亜の言葉に利寿さんは息を飲む。

「アクア……」

利寿さんは困惑した瞳でボソツと言った。

「後、今の俺は『アクア』じゃねえ。『立花聖亜』って名前があるだ。『アクア』なんて呼ぶんじゃない」

(聖亜……?)

なんか……、初めて見た。こんなに怒った聖亜。聖亜は……怒りっぽくはあるけど、どっか冷めた人間だから、今まで本気でキレたところは見たことない。

「明日菜っ。帰るぞ」

「え?」

聖亜は利寿さんから目を反らして言った。

「立花……っ! 日記は……っ」

「あ、持って帰ります」

風見先生の言葉にも聖亜は口々に目も合わせない。(一体どうしたの?)

後ろの方から、涙目になった利寿さんのか細い声が聞こえた。

「アクア……」

「アクアじゃねつつつてんだろ! ……ったくっ。帰るぞ! 明日菜っ」

利寿さんの声が聞こえるや否や、聖亜は容赦なく怒鳴りつける。

「あ、はいっ。先生……っ、あの……、お邪魔しました」

聖亜は風見先生から日記を受取り、軽く頭をさげると玄関に向かった。私も慌てて追う。

「あっ、僕もっ。お邪魔しましたっ」

渚君も後に続いた。

(なんだか……) 気まずい雰囲気を残したまま出てきちゃったけど……、いいのかな。……でも、それより……。

「聖亜……、一体どうしたの？」

「別につ」

聖亜は冷たく返して来た(うつ、そっけない……)。

「あ、明日菜ちゃん。家まで送るよ」

「結構だ」

と、渚君を拒んだのは私……、よりも聖亜が一瞬早かった。

「聖亜……？ ……わあっ」

聖亜は私の腕を掴み、聖亜の方へ引き寄せた。そして、渚君にガンを飛ばした。

「俺は明日菜ん家の裏に住んでんだ。何もテメエが送る必要はねえ」
「……へ？」

渚君は驚きの声をあげた。

「明日菜っ。行くぞ」

「え？あ……、うん……」

渚君は聖亜の意外な言動に呆然としていた。

(うん……。凄く……。意外)

今までの聖亜は、渚君が私にどんなちよっかいかけてきても、ひたすら傍観してたのに……。急に……。何……？

(うー……。っ。なんか暗い……)

さっきから二人で無言のまま歩き続けている。聖亜の顔は未だに少し怒ってる。なんか……。気まずい。(なんか話題……。あ、そうだっ)

「せつ、聖亜っ。さっきの利寿さんさ、今でも聖亜が好きみたい……」

私の問いかけに、聖亜は凄じ怒った顔でこっちを見た（思わず言葉につまるほど）。……何？これは禁句ですか……？

それから聖亜は、いつもより低い声で言った。

「お前……。ああいうの、前世まえに流されてるっもおもわねえ？」

「え……？」

聖亜は怒ると同時に、とても真剣な目をしていた。

「確かに、前世では俺とアイツは夫婦だった。けど俺にはそんなの関係ねえ。アイツがまだ俺を好きなのは、アイツがシヨウの気持ちに流されてる様にしか見えねえ」

聖亜はまっすぐ私の目を見てる。なんだから、返す言葉が見つからない。いつになく真剣な聖亜の瞳に。

「明日菜。お前もか？……お前も前世に流されてるタイプか？ま

た…、天原ヤツがいいのか？」

「ち……、違……っ」

「俺はっ」

とつさに否定した私の言葉を聖亜は遮る。とても真剣な、強い口調で。

それから聖亜は少し黙りこみ、うつ向いた。何か悩んだ瞳をして。そして数秒後。顔を上げた聖亜の真剣な瞳に、何かの決心が宿った。

「俺は、今の俺は、

明日菜が好きだ」

……え……？

突然の言葉に反応できない私。

「俺と付き合わないか？」

真っ白になった私の頭に、いつになく真剣な聖亜の言葉だけが残った。

5 (前書き)

もし 読んで下さっている方がいるのであれば

もし 待っていて下さっている方がいるのであれば

大変長らくお待たせいたしました

The legend of Mermaid 第5話です

今回より 小説の文章が今までと 多少でも違うと思います

この小説は 自サイトの小説の再録なのですが その自サイトに
て たくさんの批評サイト様に批評して頂きまして 少なからず学
んだ結果です

今までは 自サイトの小説をそのまま移してきただけでしたが 今
回よりは 手直しをしてあります

既に投稿済みの小説も 時間はかなりかかるかと思いますが 手直
しをしたと思います

それでは お待たせし過ぎた The legend of Me
rmaid 第5話

よければご覧下さいませ

びっくりした。

……なんてものじゃない。

『俺は、今の俺は、明日菜が好きだ。
俺と付き合わないか?』

帰って来てからずっと、私は自分の部屋にこもってる。帰って来る最中も、帰って来てからもずっと、頭の中で聖亜のあの言葉が、リピートしてて止まんない。

私は、突然のことに頭が回らなくて、とりあえず一晩考えさせてとことわって、走って家に帰った。聖亜の顔を見ることも出来なかった。

いや、見ても、見えなかった。

頭の中は真っ白。聖亜の言葉だけはいやに鮮明に浮かび上がって、他は把握出来なかった。

考えもしなかった。

聖亜が、私を女として見てたなんて……。

近くにすぎたせいかな？

私と聖亜は、今年で初めてクラスが別れたというクサレ縁。はとこだし、家は裏同士だし、親同士は凄く仲いいし。聖亜の姿を見ない日なんてほとんどなかった。

そのせいかな？

今までの私にとっての聖亜は、男も女もなかった。けど、今日で一変。私の中の聖亜は、普通の男になった。初めて、私と聖亜は女と男なんだ、って理解した。

どうしよう……。。

聖亜のことは決して嫌いじゃない。いや、どっちかって言うと、『好きだ』。聖亜は、私が唯一心を許している男子。

「は〜……」

なんだか深いため息が出た。まさか、この私がこの手のことで悩む日が来るとは思わなかった。しかも相手がああ、聖亜とは。

私は今まで、人を好きになったことなんてない。もちろん、告白されたのだって初めて。まあ……、渚君にはされたっぽいけど。

聖亜のことは『好き』。だけど、これが恋愛の『好き』なのかどうかが……、わからない。

どうしよう……。どうしよう……。っ。

さっきから、顔のほてりが消えない。心臓もいつもより早く波打ってる。頭の中では、相変わらず聖亜のあの言葉がリピートしてる。

こんなの、初めてだ。

まさかこんな風になっちゃう自分がいたなんて……。

「あー。駄目だ……。頭混乱して考えられないや」

私はベッドに横になって天井を見上げた。

全然駄目。聖亜の真剣な瞳が、あの言葉が、グルグル回って頭が働かない。

落ち着いて。落ち着いて、自分。聖亜の言葉を、ゆっくり考えよう。

聖亜は、どうして私なんかを好きになったのかな？ 渚君にしたってそうだ。こんな……、見た目平々凡々で、性格ひねくれた私なんかを。一体、何がよかったのかな。

そういえば……、聖亜は言ってた。今も尚聖亜を好きだと言う利寿さんは、前世の気持ちに流されてる様にしか見えないって。

うん、確かに。そう、見えなくもない。

渚君も？

渚君は……、私をサレスの生まれ変わりだと信じて疑わない。だから？ 渚君本人の気持ちではなくライティスの気持ちに流されて、私のなかに見るサレスが好きなのかな。

私……、私は？

聖亜は私に、『お前も前世に流されるタイプか？』って聞いた。

違う。

私はサレスじゃない。そんなものに流されてたくない。私の中にはサレスなんていない。サレスの気持ちなんてわからない。

渚君は、……嫌。

あんな私の意見おかまいなしに抱きついてきたり、女々しいのに頑固で。子どもっばい様なナヨツとしてる様な……。私の苦手な物を総まとめにしたようなヤツ。

しかも、『ライティスの気持ちに流されて』言い寄って来る男なんて。

絶対駄目。

じゃあ、聖亜は？

あっさりさっぱりしてて、ちょっとキツイところあるけど。それは私も人のこと言えないし。何より聖亜は私にとって、唯一心を許した、気のおけない

男子。

私、聖亜のことは好き、……だ。

そつだよ。渚君なんかよりずっと好き。

聖亜なら、いい。気も合うし。長年つるんでるから、お互いよく分かってるし。

いい、……んじゃないかな。

うん。きつと……。

次の日。

昨日、一晩考えた。ほとんど寝てない……、いや、寝れなかった。だけど、一応答えは出した。ちゃんと、聖亜に答えを出さなくちゃいけない。

けど。

まだちょっと顔合わせ難いから今日はちょっと早目に家を出ちゃおう。

「行ってきまーす」

ガチャッと、勢い良く家のドアを開ける。

「よう」

「わっ」

家を出ると、門の所に聖亜が立っていた。驚きのあまり思わず目を丸くして、更に体は一步引いた。

「せ、せ……、聖亜!？」

「早いな」

口ごもる私に対し、腕を組んだ聖亜は平然と言う。

「お……、おは、おはよう」

なんだがまともに話せない。びっくりした。いつもより15分も早く家を出たのに、まさか門の前で待ってるとは。

「行くぞ」

「えっ、あっ、はいっ」

何故か敬語になってしまう私。

それにしても、聖亜はなんていつも通りな態度なの……？ 私がこんなにあたふためいてるのに。まあ、普段は別に一緒に学校行ってる訳じゃないから、いつもと違つと言えは違つけど。

なんとなく無言のまま歩く私達。なんだが緊張してしまう。いつもと同じ通学路。大して遠くない学校が、いつもより遠く感じる。

言わなきゃ。言わなきゃ。だけど、どうしよう。

話しかけるタイミングが分からない。

「明日菜」

私が話を切り出せなくて、しばらくうつむいて歩いていると、私の隣を歩く聖亜が口を開いた。私の方は見ないで前を向いたまま。

「は……、はいっ」

「結論は出たのか？」

急に核心付いてくる言葉に心臓が跳ね上がる。ドキドキと、自分で煩く感じるほど。

落ち着いて、自分。キチンと一晩考えた答えを聖亜に伝えなくちゃ。自分で切り出せなかったこと、聖亜が与えてくれたチャンス。勇気を出して。

「で……、出た」
「そうか」

聖亜はゆっくりと振り向き、私の目を真っ直ぐに見つめた。

「じゃあ、聞かせてくれ」

「う、うん……っ」

なんか、聖亜に真剣に見つめられると緊張する。心臓が凄く早さでバクバク言ってる。このまま倒れるんじゃないかって思うくらい。心臓の音だけ頭に響いて、外の喧騒も耳に入らない。

「い……、いいよ」

「……え？」

やっとの思いで答えを伝えた私に、聖亜は目を丸くして疑問の声をあげた。凄く、驚いた顔をしている。

「私、聖亜と付き合っつ。私、聖亜となら大丈夫って、聖亜とならいいって、思ったの」

言えた。

なんか、凄い緊張……。動悸が、うるさい。

「……お前、本気か？」

『言えた』と、ホッと一息ついたのも束の間、聖亜の口から予想外の言葉が漏れた。

「俺は……、絶対断わられると思ってたんだが。……いいのか？」

どうして？ 聖亜は凄く真剣で、だけど何処か疑問の眼差しをしてる。喜ぶのではなく疑問……？

「いいよ」

なんとなく首を傾げながら答える私。聖亜は真剣な瞳で更に続ける。

「だいたいお前……、天原はいいのか？」

「な、なんで渚君が出てくるのっ」

またも思いもよらぬ聖亜の言葉。

『サレスになんか流されない』、私はそんな思いから、思わず声が大きくなった。聖亜はそんな私に、本気で疑問の目を向ける。

「明日菜……。お前、本当に天原のことは好きじゃないのか？」

今度は私も疑問の目になる。『私が渚君を？』。なんでそうなるの？ どうしてそう思うの？

「す、好きじゃないよっ。あんなヤツっ」

思わずムキになる私に、聖亜の顔が少し曇った様な気がした。

「そうか……」

何？ なんか、私変なこと言った？

むしろ、喜ぶことを言ってるよね？

「せ……」

私が思わず声をかけた瞬間、聖亜はニツと笑って私を見た。

「後悔すんなよ？」

いつもの勝ち気な聖亜だ。顔が曇っていった様な気がしたのは、
気のせい、かな？

「明っ日菜ちゃ〜んっ、おっはよ〜」

不意に聞こえた言葉に、体がビクッと反応した。
校門の手前、後ろの方からアイツの声が響いた。

「な、渚君。お、おはよ……」

「あ、立花君もおはよ」

「よう」

う、う〜ん……。

なんか、言った方がいいのかな。私と聖亜が付き合いだした事
でもなあ……。

「明日菜……」

急に聖亜が小声で話しかけて来た。何と無くつられて、小声で返
す。

「何？」

「コイツに言ってもいいだろ？」

「……え」

やっぱり……、言っちゃうの？ っていつか、言つべき？

私の困惑を感じとった様に聖亜は軽いため息をついた。

「明日菜。こついうヤツははっきり言わないとつけ上がるぞ？」

それなんか、すっごい納得。

うん……。やっぱり言つべきだよなあ。渚君は私をどうやら好きらしいし。でもな、だからって当て付けの様に言わなくてももって気も……。しかも私、渚君と席隣だし。気まじくなりそう……。……。

「言つぞ？」

聖亜が真剣に言う。

うん……。

ま、いいか。どうせ渚君だし。気まじくなつたってたいしたことない。

そう。

どうせ。

「うん」

「ねえ……、さっきから何二人でコソコソ話してるの？」

二人で小声で話していると、渚君が面白くなさそうに言った。する

と聖亜は、渚君の面と向かって立った。顔には、勝気な笑顔。

「天原。もう明日菜に手え出すなよ」

「……へ？」

突然の事に目を丸くする渚君。聖亜はそつと手を伸ばし、優しく私の肩を抱いた。

ドクン、と心臓が大きく波打つ。全身の血が逆流する。

ここ、学校の前庭なのによく聖亜は、恥ずかしげもなく。私の顔は、真っ赤だ。

「今日から俺達、付き合いだしたんだ」

「っ」

渚君が息を飲むのがわかった。目を見開いて、言葉もなく立ち尽くしてる。

聖亜はニツと笑うと、私の肩を抱いたまま学校の玄関へ向かう。

皆見てるんですけど……。ホントに聖亜は、どうしてそんなに大胆なの？

「……明日菜ちゃん……？」

私達が歩き初めて少しして、後ろから微かに渚君の声が聞こえた。

「嘘でしょ……？」

半分かすれた様な渚君の声、小さな声。なのに何故かはつきり耳に残った。

そして、なんだか私の何かに、

突き刺さった。

凄いきまずい……。

只今1時間目が始まる直前。私の隣では、悲しそうな、辛そうな、怒ってそうな、渚君が影のある顔で座っている。渚君は、朝のシヨートホームルーム直前に教室入ってきた。いつもより乱暴にドアを開け、椅子に座った。一言も口を開くことなく。隣に座る私を、全く見ることもなく。

さっきのことは、学校全体……、とまではいかなくとも、既にクラス中には知れ渡っているようだ。渚君ファンの女子達は、こないだまで『天原君とはどういう関係?』とか言ってたクセに、今は『あの天原君を振るなんて……』等と、わざと聞こえる様にしてるとしか思えない状況で言っている。

いろいろ言われてるけど、私は別に振ってないんですけど……。別にちゃんと告白された訳じゃないから、私もちゃんとは断る必要ないし。

良く分かりもせずに、言わないで欲しいよね。

はあ……。ため息が出る。なんか疲れる……。

聖亜にしても、あの男離れた顔で結構モテるものだからさ。当

然うちのクラスにも聖亜ファンな娘はいる訳で、もともと目はずけられてたけど更に睨まれることに……。

なんだかな、私が何をしたっていうんだか。

だいたい、私には何故聖亜がモテるのか、謎だ。だって、そりゃ私は聖亜のあのかなりあつさりさっぱりした性格は性に合うけど、噂で聞いた聖亜の女子への降り方はかなり酷いものがある。聞いたところによると、表情一つ変えずに面と向かって、『貴様には興味ない』と言い放つたらしい……。なのに人気は衰えることをしらない。

それから数日。ずっと聖亜と行動を共にする私に、皆の……、特に渚君の痛い視線が注がれた。

渚君とは、あれ以来一言も話してない。

それどころか渚君は、誰に対しても態度が冷たい。こないだ渚君に『キヤーキヤー』言い寄って来た女子に対し、顔も見ずに怒った顔で『うるさい』と言い放った。

後、最近学祭へ向けての準備が放課後少しづつ始まってらんだけど……、

あの渚君が一切手伝わない。ただならぬ雰囲気クラスの皆も何も言えない状態。

水奈本先生の絡みにも無反応。

逆に聖亜と水奈本先生は酷くなってるけど。

そんな風に数日過ぎて……。

遂にというか、水奈本先生が教育実習の最終日を向かえた。

帰りのショートホームルームでの水奈本先生からの一言なども終え、なんだかこんな時だけ先生に見えるけど。

放課後。真っ先に来たのは、やっぱりというかなんというか……、私のところである。

「姫様あつ！　しばしのお別れですねっ！　とても哀しいですー！」

水奈本先生は私の両手を取り、涙でも流しそうな勢いで話す。

「あつそっすか」

「寂しいですけど心配なさらずにっ。何か困ったことがございましたら真っ先に飛んで参りますから！　だから……、だからっ、せっかくライティスからは逃れたのに……っ。姫様っ！　早くアクアの餌になるのは止めて下さいー！！」

また言ってる。

水奈本先生は、私と聖亜が付き合い出してから、毎日毎日この台詞を1日3回は言ってる。

「餌って……」

「貴様……」

その時、どこからともなく冷たい妖気でも放ちそうな聖亜の低い声が響いた。

「明日菜に触んじゃねえ……」

聖亜……。なんだかかオーラとか見えそつな位の低くドスの効いた声。

「アツ、アクアツ！ 貴様っ、いい加減姫様を餌にするのは止める
！」
「餌とはなんだ。それに、貴様こそいい加減に『アクア』って呼ぶ
の止めやがれ」

聖亜が本気でキレル直前だ。目は鋭くて、声はいつも以上に低い。

「水奈本……。貴様、今日で教育実習終わりなんだよな？ ……っ
てことはもう貴様の顔見なくてすむんだよな？ あゝ、せーせーす
る」
「う……っ」

聖亜の勝ち……。

口喧嘩で聖亜に勝てる人は、きっとそういないよね。口の悪さも
さることながら、頭の回転の早さってどうか。

「明日菜。帰るぞ」
「あ、うん」

と、私と聖亜が歩き出した時、後ろから私達を呼び止める声があ
た。

「明日菜ちゃん。立花君」

その声は、渚君の声。聖亜はピタッと足を止めると少し険しい顔
をして、ゆっくりと振り返った。

「天原……」

「……渚君」

渚君は、ちょっと前までの明るく少し子どもっぽい渚君からは想像も出来ない様な顔をしている。怒ってる様な、悲しんでる様な、辛そうな……。なんだか少し、大人びた様に感じる。

「天原……。俺、お前に『明日菜に手を出すな』って言ったよな？」

聖亜が静かに怒った口調で言う。対して渚君は、表情は相変わらずだけど、なんだかちよつと穏やかな口調で話す。

「別に、今のは話しかけただけで、手は出してないでしょ？」

「じゃあいい加減、下の名前で呼ぶな」

二人の間には限りなく冷たい空気が流れてる。

ここは廊下。行き交う人がこつちを見ていく。またも、凄い見せ物になってる。だけど、聖亜と渚君はそんなのおかまいなしに話してる。とても、氷ついた空気の中で。

「じゃ、改めて。立花君、高瀬さん」

ドキッと、何故か心臓が跳ねあがった。『高瀬さん』、か……。

なんだか変な感じだな。

「話がしたいんだ、3人で。」

屋上でいいや。ちよつと、来てくれないかな……」

この河守高校の屋上は、あまり人が来なく、静かだ。私達3人が来た時も誰もおらず、シンと静まり反っていた。

「ねえ……、立花君」

屋上に来て数分。暑い陽射しの中で、無言の時間が続いた。そして、やっと渚君が口を開いた。

「いつから、明日菜ちゃ……、じゃないや、高瀬さんが好きだったの？」

渚君は空を見上げて呟く感じで言った。その質問に聖亜は、渚君の顔も見ずに床を眺めたまま、少し間を置いてから答えた。

「その辺……、よくわからん」

「どうして……？」

「存在が近すぎたからだな」

「近すぎた……？」

「ああ。前にも言ったが……、はとこで幼馴染みでくされ縁で。その上、家は裏で親が仲いいし」

「なるほど……」

なんか、普通の様で、普通じゃない会話が続けている。

二人はさつきからお互いの顔も見ずに話をしてる。しかも、5秒位の間を空けつつ。なんだか淡々と……。

「天原」

その時聖亜が不意に顔を上げ、厳しい眼差しを渚君に向けた。

「こんなこと聞くために俺達を呼んだのか？」

その言葉に、渚君の顔が一瞬固まった。それから、うつ向き軽いため息を着いた後、聖亜と視線を合わせた。

「……まさか」

渚君は薄く笑っていた。

なんか……、渚君が笑ったの久しぶりに見た。だけど……、今日のはいつもの明るい笑顔じゃない。凄く、陰がある笑顔。

「どうしても、納得出来なくて……」

渚君はボソツとそう言うと、クルツと後ろを向いた。

「なんか、どう考えても……、少なくとも最初は立花君が明日菜ちゃんを女の子として見てたとは思えなくて……。なんで、どうしても、一体いつから……、って」

渚君は冷めた笑いを浮かべた。

「確かに、ついでにないままで、俺にとっての明日菜は男も女もなかったな」

聖亜は、とても真剣な瞳で返す。

聖亜も、そうだったんだ……。

私にとっての聖亜も男も女もなかったもなあ……。凄く、近い存

在だったから。

告白されるまでは。

「じゃあ、どうして女の子として見る様になつたの……?」

「良く分らんが……、お前が現れたからだな、きつと。明日菜に言い寄つて来た男なんて、お前が初めてだからな。それを見てたら、だんだん……、な」

「ああ。なるほどね……」

なんか、この二人は軽く私をけなしてない? 要は、モテないって訳でしょ? 確かに事実だけど。

それにしても仮にも『好きな人』のことでしょう? なんていうか、この二人はもの好きなのかな。

「なんかさ……」

渚君はゆっくりと、こちらに向き直つた。辛そうな表情で。

「どうしても納得出来なくて。信じられなくて、いや、信じたくなくって」

渚君は聖亜の目を真剣に見て言った。はっきりと。それから、私をも、真剣に見た。

なんだか、こんな真剣な渚君。見たことない……。

それから聖亜は、少しうつ向いた。それから軽くため息をつき、顔を上げた。

「納得?」

……させてやるのか？」
「え……？」

そう言った聖亜は、勝ち気な目をしていた。
聖亜の言葉に、渚君の視線は、私から聖亜に戻る。渚君の目には
困惑の色がうかがえる。

……聖亜、何する気なの？

「明日菜」

聖亜は真剣な瞳で私の目を見て呼んだ。指で手招きしながら。

どづいつこと……？

私は聖亜に呼ばれるまま、聖亜に近づいた。すると聖亜は、ちょっと強引に私を抱き寄せた。
さっきまでの勝ち気な目ではなく、凄く真剣な目。強い力を持った瞳が私を見つめてる。

不意に聖亜の顔が私の目前に広がった。

ほんの数cm先の聖亜の顔。私の唇に触れる柔らかい感触。私の顎と腰に添えられた腕。

気付いた時には、私は聖亜にキス、されていた。

な……っ？

聖亜は、ゆつくりと私を離れた。

聖亜は、真剣な顔で私を見てる。私はただ、目を見開いてる。

何？ 何が起こったの？

私は今、聖亜と……？

聖亜は静かに渚君の方へ視線を向けた。

「納得したか？」

見ると、渚君は息を飲み、固まっていた。目を見開き、顔面蒼白とも言える表情。

何故だか、私の心臓が跳ね上がった。

あんな表情、見たことない。

少し間をおいて、渚君は握り拳に力を入れ、うつ向いた。かすかに、震えてる。

「……した……っ」

と言ったと同時に、渚君は屋上の出口へと走り出した。

ま、

待って。

「渚く……っ」

とっさに足が動いた。体が勝手に反応した。
渚君を、追い掛けなきゃ。

一歩踏み出した所、私の足は止まった。いや、止められた。私は腕を掴まれた。

振り返ると、当たり前だが聖亜。私の腕を掴んだ聖亜。真剣な、怒った様な、寂しそうな表情を浮かべてる。

また、私の心臓は跳ね上がる。

「……行くな」

聖亜……。

なんか、たった一言の聖亜の言葉が、凄く悲痛な感じに聞こえて、私は、動けなくなった。

「納得したよな……？」

「え……？」

帰り道。

なんとなく2人で無言のまま歩いていた。すると、不意に聖亜が口を開いた。ボソッと、力なさげに。

「だから、天原」

「あ、ああ……」

多分ね……」

私は、は切れの悪い返事をした。

さっき、渚君はうつ向いたまま、顔を見る間もなく走ってっちやったから、よくはわかんないけど。

何より、一度に色々ありすぎて頭が働かない。なんだかよくわからない。

「なあ。明日菜」

「え……？」

不意に聖亜が立ち止まる。つられて私も立ち止まる。

静かに、真剣に私の目を見つめる聖亜がいた。そんな聖亜は、無言のまま数秒私を見つめ、それからはっきりと言った。

「嫌だったか？」

「……キス」

「……っ」

急な、そしてストレートな問いに、私の顔が赤くなる。心臓もまた跳ね上がる。動悸も早くなる。

なんだか改めて実感してしまう。だけでも実感はわからない。

私、聖亜と、したんだよね……。

キス、を。

「嫌だったか？」

「う、ううんっ。そんなことないっ。私は聖亜の彼女だもんっ」

なんか今にしてどつと恥ずかしさが込みあげて来た。なんだか嫌だったのか、嫌じゃなかったのかもよくわからない。

勢いだけで返事してる。

「ごめんな。強引で、不意打ちだったし。雰囲気もクソもなかった。だから……、嫌だったんならはっきり言ってくれ」

聖亜は、真剣さと共に、すまなさそうな顔をしている。

確かに……、不意打ちだしよくわかんないうちにされてたって感じだったけど……。

「大丈夫。嫌じゃない」

はっきり言っただけじゃない。だけど、今、私の中に、嫌、って感情はない。これって、嫌じゃなかったからだよね？

その時、ふわっと聖亜が私を抱き締めて来た。その腕は、力強く、優しい。

「せ、聖亜？」

「信じるからな……？」

私を抱き締めながら聖亜は、耳元でボソツと言った。

『信じるからな』……？

「う、うん」

その時私は、聖亜のその言葉の真意がよく分かっていなかった。ただ、言葉通りの意味だと、軽く頷いてしまった。

頷いた私を聖亜は、更に強く抱き締めた。

昼間でもあまり日の光の届かない深い森の中。

「ライティスッ、ライティスッ！」

目前に彼はいないというのに、思わず声が出る。

私は、川で洗ってきた重たい洗濯物を持って、深い森の中に木やつるや葉、拾った布などで作った我が家へ向けて走った。

「ライティスッー！！」

「サレス……？ どうした？ そんなに慌てて」

ライティスは、私の呼ぶ声に気付き、息子のセインをあやしなから家、とは呼び難い家から顔を出した。私は、走ったせいで荒れた息を無理矢理落ち着かせ、必死になって言った。

「来た、来たよ……っ。もう、アクア達がつ！」

「な……っ」

「さっき、川で洗濯してたら……、遠くの方でちらっとな……っ」

ライティスの表情がこわばる。さつきまで和んだ感じだった小さな家の中が、一気に張り詰めた。まだ小さなセインまでも、神妙な顔をしている。ライティスは、一瞬悩んだが、直ぐ様決断した。

「サレス……っ。行くぞっ」

「はいっ」

『行く』、というのは、この家を片付け、別の場所へ移るといこと。

私達は、3週間以上同じ場所にいたことはない。今では、ほとんど森の中で暮らしている。

息子のセインが産まれて、間もなく2年。私達家族3人は、ずっとそついう生活をおくっている。

「ここまで来ればいいか」

「うん……。だね」

川でアクア達を見掛けたのは昼前。今は夜中。足場の悪い森の中を、ずっと歩き続けた。

「はあ……」

二人して木によしかかり、深いため息と共に、その場に座り込んだ。セインがライティスの腕の中でぐずってる。ライティスはセインの頭を優しく撫でながら、私に言った。

「大丈夫か？」

「うん。今日はあんまり走ってないし」

私達人魚には、地上で走り回ったりする体力がない。普通に生活するのに支障はないんだけど、どうにも走るのはキツイ。この逃亡生活で、ちよつとは体力がついたとは思うけど……。

こんな私を抱えての今の生活は、とても辛い。

私が、人魚であるばかりに……。

「ごめんね……」

いろいろと考えてるうちに、思わずそんな言葉を呟いた。

「……は？」

ライティスは疑問の声を上げる。

「ごめんね。苦労ばかりさせて……。私が、人魚であるばかりに……」

「なっ」

私の言葉にライティスは目を丸くする。

「何を言うんだっ！ お前は何も悪くないっ！ 悪いのは相手が人間じゃないからってっ、研究材料としか見ない人間……、アクア達だろう！」

「うん……。でもこのままじゃ、ライティスもセインも、一族の皆も守れない……。」

私がいなくなれば、全てが解決するのかな……」

はあ……。

なんか、深いため息ついちゃった。

また、あの夢、か。

そういえば子どもいたんだっただけ、あの二人。なんか、ちょっと久々だったな……、この夢見るの。

っ、疲れる。

この夢は、なんか本当に精神的に疲れさせてくれる。

実際、人魚は実在してたし……。どんどん現実の中に幻想が、人魚が入り込んでくる。認めざるを得なくなる。

はあ……。もうこの話は考えるの止めよう。どんなけ考えたって
真実は変わらないんだから。

無駄に悩んでないで学校行こう……。

そうだ。

学校行くと渚君がいる……。

昨日、あんなことあったばっかりだし。余計気まずく……、なる
よね？

なんか、嫌だな。

渚君は一体、どんな顔して学校へ来るだろう……。

私は一体、どんな顔して学校に行けばいい？ 渚君に会ったらど
んな顔したらいい？

いや、渚君に会ったら私は、一体どんな顔をしてしまうだろう。

「あゝ、天原は風邪で休みだ」

朝のショートホームルームで、担任の風見先生が言った。

休み？

『風邪』って……、ホントに？ もしかして、昨日のことで……？

なんて、自意識過剰かな。

「渚ーっ！ 久しぶりーっ！！」

私が考えを巡らせているうちに、いつの間にかショートホームルームは終わり、教室にかん高い声が響いた。

もの凄く聞き覚えのある声……。

ドアの方を見ると、案の定リアが立っていた。川に帰ってたはずなのに、また川から出て来たの？

「……あらあ？ 渚は〜？」

リアはキョロキョロしながら、私の所、いや、正確に言うと渚君の机の所へやって来た。

「ねえ、渚は？」

リアは仕方なくと言った感じで私に話しかけた。リアに話しかけ

られたのって初めてかな。

「え？ あ……、風邪で休みって……」

「休み？ 嘘お。せつかく出て来たのにい。学校来た意味ないわ」

リアは渚君の机に、覆い被さり、頬をスリスリしながら言った。
それから、すつと顔をあげる。

「かぁえろつと」

不意にリアがそんなことを言った。平然と伸びをしながら。私は
我が耳を疑う。

「え！？ こんな久々に学校出て来たのに!？」

「だ〜って、私は渚に会うために学校来てるのよ。渚がないんだ
つたらいる意味ないわ」

リアは当然と言わんばかり。

なんて言うか……、どうしてこの人はこんなにも渚君が好きなんだらう。趣味がわからない。見目がいいのは、まあそうかもしれないけど。

「それに」

一人でリアに呆れていると、リアは私の耳元でボソツと言った。

「私は人間で言うと高2に値する年齢なのよ」

目が点になる私。

「ええ!？」

私の驚きをよそに、リアは小声で続ける。

「しかも、天下のカイメール家のお嬢様だし、更に長老の娘だし、小さい時から英才教育受けてるのよ? 学校なんて必要ないわ」

リアは得意気に語る。そう言えば前に水奈本先生が『カイメール家は大金持ち』みたいなこと言ってたっけ? 自分で言ってしまうのがリアらしいと言っかなんというか。

それより、夢で見たけど、成人してない人魚が地上に出るのって犯罪なんだよね? 確か。そんな天下のお嬢様が地上でフラフラしてていいの?

「よし。渚ん家に寄って帰る」

リアは、そんなことを言いながら軽くステップ踏んで教室を出て言った。

リア。渚君ん家知ってるんだ。

大丈夫なのかな、渚君。ホントに、只の風邪……? まあ、私が何もそんなに気に止めなくてもいいな?

ちゃんと告白された訳じゃないし、だから私もちゃんと振った訳ではない。それは確か。だけど、この状態は……、

軽く振ったことにはなるんだろう。

あの時、渚君は凄く辛いような顔をしていた。でも……、それは、私が悪い訳じゃない。

そう。別に、誰も悪くない。

それから、渚君は今週いっぱい学校に来なかった。リアもだけど。その間に学祭も終わった。まあ私もクラスの花店の店員担当時間以外は全然学祭に参加しなかったけど。聖亜と屋上でポーツとしてた。協調性のないからね、私達。威張れることじゃないけど。

次の週。

朝のショートホームルームが始まるギリギリ直前、渚君が登校してきた。

無表情で一言も言葉を発さず、自分の席に座った。一瞬足りとも私の方は見ずに。

すごいきまずい……。

空気でピリピリしたものを感じる。ただ怒ってる訳じゃない。悲しさや辛さや、いろいろ入り混じった神妙な空気を。

そんな中、怖い物知らずな渚君ファンの女の子達が、渚君の机を取り囲んだ。

「天原君っ。久しぶり！」

「もう風邪はいいの？ 1週間も来ないから心配しちゃった」

「天原君と学祭まわりたかった」

その娘達は黄色い声で渚君に語りかける。が、渚君は一切反応なし。誰の顔も見ずに、無表情で黙り込んだまま。

「天原君？ どうしたの黙り込んで」
「一緒にお話ししようよっ」

渚君があらさまに無視してるのに対し、その娘達はおかまいなしに話しかける。この相手の状況構わずの態度。ホントに渚君が好きなの？

そのうち、次第に渚君がキレて行くのがなんとなくわかった。流れて来る空気が変わった、っていうか……。

「うるさいっ！」

2〜3分して渚君はついに完全にキレた。渚君叫び声に同調するかの様々に窓ガラス1枚割れた。

一瞬にして教室が静まり返った。渚君の回りを取り囲んでいた女の子達は、口をポカンと開けたまま立ち尽くしている。

これはまた、力のコントロールが効いてない？

渚君は、回りを取り囲んでいた女の子達を押し退けて、ガシッと私の腕を掴んだ。

「へ？

……わっ」

渚君は私の腕を掴んだまま、私が反応する間もなく、凄じ怒った足取りで教室を出た。そして向かったのは隣のクラス、そう。

聖亜のクラスだった。

「な、渚君……？」

私が話しかけても聞いているのかいないのか、渚君は無反応。渚

君は勢い良く、聖亜のクラスのドアを開けた。

響き渡ったドアの音に静まり返った聖亜の教室。

一瞬の間。

その後、険しい顔をして聖亜は立ち上がった。渚君は、私の腕を掴んだまま、他のクラスなのにも関わらず、ドンドン進んで行く。そして、聖亜の机の前までやって来た。

な、何……？ 一体何をやる気なの？

渚君は聖亜を睨みつける。睨む渚君は珍しい。聖亜も渚君を睨みつけてる。

2人の間に緊迫した空気が流れる。

そして聖亜は、私の腕から渚君の手を無理矢理払い除け、私を聖亜の方へ寄せた。

「明日菜に、手え出すなっつたろ、天原」

静まり返った教室に、聖亜のいつもより低い声が響き渡る。

聖亜のクラスメートが啞然として私達を見てる。完全に見せ物になってる。

そんなことはかまわず、2人は睨み合いながら対峙している。そして渚君が静かに口を開いた。

「宣戦布告……、するよ」

「何い？」

聖亜はより一層眉をつり上がらせた。

せ、せんせんぶこく？

私は、なんだか頭が真っ白。働かない。

「宣戦布告だよ。宣戦布告。なんのことだか分かるしょ？」

「ああ」

「もう少しで夏休みだし、気を付けた方がいいよ」
「そうだな」

2人は、今にも殴り合いそうな程睨み合いながらも、静かに会話している。ある意味よけい怖い。

それにしても、『宣戦布告』って……。

私……、のことなんだよね？

つまりは、『私の取り合い』……。ってことになるの？

「さ、明日菜ちゃん。教室戻ろっ」

「へ？」

渚君は混乱中の私の肩を押し、強引に教室を出ようとした。ふと見ると渚君の顔にはあの笑顔が戻っていた。そう。渚君特有の、あの、子どもっぽい笑顔が。

なんだか、久しぶりに見た。

教室を出る直前、渚君は急に立ち止まる。そしてゆっくりと聖典の方へ振り返った。

「立花君」

「なんだよ」

一瞬の間。直後。渚君は聖亜を指差した。
そして、はっきりと言う。

「明日菜ちゃんは、絶対落とすっ！」

な、なにそれ。

「フン…ッ。ふざけんなっ。やれるもんならやってみろっ」

負け時と聖亜も返す。

な、な、な……？

睨み会う聖亜と渚君。呆然として頭が真っ白な私。目を丸くして
言葉を無くす聖亜のクラスメイト。

一体何？

凄い発言。凄い状況。

これは、我が身に起こっていることなの？

これより、『聖亜VS渚君』の、大戦争が幕を上げた

【5】 終了

5 (後書き)

読んで下さりありがとうございます

多分 次の投稿もある程度時間がかかってしまつかと思ひます
すみません

今回ほど 遅くは致しませんので もしよければ またよろしくお
願ひ致します

6 (前書き)

もし 読んで下さっている方がいるのであれば 続きを待っていて
下さっている方がいるのであれば

毎回毎回

お待たせして申し訳ありません

私生活のバタバタで 更新を定期的に行うことが難しくなっています

が 更新をやめる なんていうことは消していたしません

なので よければ今後もよろしくお願い致します

一体……、聖亜も渚君も、私のどこがそんなにお気に召すのだろうか？

だいたい私は、顔は平々凡々、まさに並。性格はひねくれてる……、という並以下。頭の良さが唯一の取り柄みたいなもの。
彼氏いない歴15年、モテない歴15年、男嫌い歴15年だったのに……。

妙な展開になったもんだ。

高1の夏の始めに現れた、この私に初めて言い寄って来た男2人。1人は、長年つるんできたはとこ兼幼馴染み兼、現在私の彼氏なんていうものとなってる立花聖亜。

もう1人は、季節外れの時期に転校してきて、私を探していたなごという変なヤツ、天原渚。

なんだかなあ……。誰がこんな状況になると予測出来ただろうか。今は夏休みに入って何日か経った、8月の始め。渚君が転校してきたのが6月の終わり。まだ1ヶ月ちょっとしか経ってないのに、回りの状況が普通ここまで急変するものだろうか？

聖亜自身も、今の自分の状況にかなりビツクリしてるって言うてたし。

やっぱり、そうだよなあ。こないだまでは男も女もない、ただの幼馴染みだったんだし。

聖亜とは夏休み中、たまにフラフラ出かけてる。どっちかが買い物とかある時に誘う感じ。

そして、1回バツタリ渚君に会ってしまった。渚君の後ろにはリアもくっついてたけど。

なんていうか、聖亜とリアがグルになってる、というか……。そのせいで、余計渚君はキレる寸前、あわや殴りあい……。とまでは一応行かなかったけど、そんな風になりかねない感じだったから、私はなんとか話をうちきって、聖亜をつれてそそくさ逃げた。かなり……。注目浴びてたけど。

いつこの付き合いが親の耳に入るだろう……。なんとなく、気恥ずかしくてまだ言っていないから。

その時を機会に、聖亜にできるだけ1人でふらつくなど念をおされた。

ガチャッ。

「行ってきまーす」

夏休みも下旬に差し掛かる頃。今日は、聖亜と出かける約束。私は勢い良く家を出た。

ああ、今日も暑い。

雲のない綺麗な青空。キラキラと照り付ける太陽。ここんとこ連日30度を超えている日々。そのせいか、聖亜とも出かけてなかったんだけど、今日は久々。聖亜が買物だか。

にしても……、ここまでしょつちゆう出かけた夏休みは始めてだ。少し、いつもより焼けたなあ。ちょこつと小麦色、なんだか健康的な色だ。

ああ、そうだ。

頼むから今日は、渚君とバツタリ会いません様に。

「あつ！ 明日菜ちゃんだ！」

不意の聞き慣れた声に、体がビクツと反応してしまった。

聖亜と2人で街中をふらついてたら、後ろからこの騒がしい街中でもハッキリ聞こえるほどのどでかいアイツの声が響いた。ゆっくり振り返って見ると、遙か彼方150m位向こうから誰かが走ってくるのが見えた。

そう。あれは紛れもなく渚君……。

どうしてこんな人混みの中、しかもあんな遠くから分かる訳……

？ ある意味感心してしまう。

なんて変に感心していると、聖亜が私の腕を掴んだ。

「逃げるぞっ」

「え……っ」

私の答える間もなく、私の腕を掴んだまま聖亜は、全力疾走しました。

「うわっ、ちょっ……、聖亜っ、は、速……っ」

「は！？ 何！？ 風で聞えねえわっ」

ちよ、ちよっと待って。

聖亜と私じゃ、足の速さに差がありすぎるんだけど。全然ダメ。一緒に走ってるんじゃないかって、ただ引つ張りまわされてるだけだ。

「立花君！ なんで逃げんのさ！ 臆病者ーっ！！」

「ツバーカツ！ 逃げんのも時には勇気だ！」

後ろの方から渚君の大声が響き、聖亜もまた叫ぶ。

なんて言うか、またもの凄く見せ物になってる……。

数分後。

どうやら渚君を撒いたらしい。

私達は、街の真ん中にある大きな公園のベンチで休むことにした。

……正確に言うと、私が休んでる。聖亜は割りと平然……。

「せ、聖亜……っ」

私はかなり荒れた息を必死で抑えて言った。

「あ？」

「あ？ じゃないよ……。私の足の速さも考えて。速いよ……」

「速いったって、お前の足に合わせてたら、お前、思いつきり天原の餌食だぞ」

それは、そうかもしれないけど。でも、疲れる……、と言うよりもしんどい。こんなに走ったのなんて久々。

「喉乾かね？ 飲み物買ってくっから座ってる」

「へ？」

聖亜はへバツてる私にそう言うと、今いるベンチと対角線上の反対に位置する自販機へと走って行った。

よく体力残ってるな。大きな公園、今の私じゃそれを走ろうなんて思えない。

それにしても、なんでこんな人混みの中、計った様に渚君に会うのかな？　そして、なんで渚君は、あんな遠くから私らの姿を発見出来る訳？　恐るべし……。

「見つけたっ」

「！？」

一人で考えて込んでいると、私の後ろから急に男の声があった。っていつか、言うまでもなく。

「やほっ！　明日菜ちゃん！」

そろりと振り返ると、案の定、リアに付きまとわれつつも満面の笑みの渚君が立っていた。

その直後、渚君から笑みが消え、珍しい厳しい顔になり、不意に視線が私より上に上げられた。

「久しぶり。立花君」

「え……？」

「よお。天原」

ふと見ると、缶ジュースを2本持った聖亜が立っていた。凄く冷ややかな瞳をして。

「聖亜っ！ いつの間につ」
「今来た」

速……。本当にその体力はどこから……。
って、いやいや今はそれどころではない。早くここからいなくな
らないと、また……。いや、今度こそ本当に殴り合いに……。っ。

「せっ、聖亜！」

「ん？」

「もう行こっ！ 疲れなら取れたからっ」

私は急いで立ち上がり、強引に聖亜の腕を引っ張った。

「立花君」

「あんだよっ」

渚君に背を向けて行こうとした瞬間、渚君に呼び止められてしま
った。聖亜は立ち止まり苛立たしげに応える。
駄目だ。なんだか、一触即発の雰囲気。

だが、私のハラハラを裏切り、渚君の口からは思いもよらぬ言葉
が出てきた。

「気付いてないの？ もしかして」

「はあ？」

私と聖亜は意表をつかれ、素頓狂な声をあげた。が、渚君は冷静
に、私達を通り過ぎさらに後ろの方を指差した。

「あつち。よく見てみなよ」

言われるまま、渚君の指差す方を見た。広い公園、目を凝らしてすると、公園の木の陰に何か、誰かが隠れた。

え……？ 何？ 誰？

聖亜は無言でその木に向かってゆっくりと歩き出す。

「あつ、逃げやがった！」

近づく聖亜に気付いたその誰かは、慌てて走り出した。とっさに聖亜もその人を追いかけて地面を蹴る。

少しずつ追いつき、そして、その人の腕を掴んだ。

「キャッ」

「ああゝ！？ テメエ……ッ」

聖亜が捕まえたその人は、見覚えのある女性。

「り、利寿さん……？」

「貴様、何してたんだ？」

聖亜により無理矢理ベンチまで連れてこられた利寿さん。に、聖亜が聞く。呆れた様な怒った様な、目が座ってる。

「し、ごめんなさい。ふと……、2人の姿を見かけたものだから、

気になって……」

利寿さんはうつ向き、申し訳なさそうに言う。声は弱々しく、震えてる。

「気になってだあー？ 俺が何してようと貴様にや関係ねーだろ。テメエ、ある意味ストーカー行為だぞ!？」

確かに……。

聖亜は嫌気がさした様な顔をして、心底深い溜め息をついた。

「ごめんなさい。どうしても、気になって……」

この人、本当に聖亜が好きなの？ まだ……、今日を入れても2度しか会ってないのに……。それなのに、ここまで、本気なのは……、やっぱり『前世』のせい？

利寿さんは思い詰めた顔をしている。そして、何かを決心したかのように、手を握りしめて言った。

「ねえ、アク……、じゃない、立花君っ」

「んだよ」

聖亜は相変わらず冷ややかな目をしてる。さげすんですらいそうな瞳。

「どっして、どっしてサレ……、高瀬さんと歩いてるの？ まさか……っ」

悲痛な色を帯びた表情の利寿さんの問いに、聖亜は一瞬黙って私

をチラッと見た。冷やかな瞳、ではなく……、何か沈んだ……。

な、何……？

「そつだよ。明日菜は俺の彼女だよ」

「そんな……」

利寿さんの顔が、更に曇る。悲壮感漂う表情、目が泳いでる。

「明日菜。行くぞ」

「え？ あ、うん」

聖亜は私の手をしっかりと取った。優しく、だけど力強く。そしてそのまま、利寿さんと渚君、ついでにリアに背を向けて歩き出した。

その時、利寿さんが口を開いた。積が切って溢れたかのような叫び。

「どうして、どうして……！？」

その言葉に、聖亜はピタッと立ち止まる。

「私は今でも、アクアが……、立花君が好きなのにつ。ずっとずっと探してたつ。またつ、前世まえみたいえに2人で、一緒にいたいから……っ！」

利寿さんが切実に叫ぶ。

ホント……、どうしてそんなにまで？

それから利寿さん達には背を向けたまま、聖亜は少し間を開けてからゆっくり口を開いた。

「お前ら……、自分で前世まえの気持ち流されてるって思わねえ？ 俺には、お前らは現世いまでも前世まえの時の思いに流されてる様にしか見えななんだよ」

静かに、それでいてはつきりと強く、聖亜は言った。相変わらず利寿さん達には背を向けたままで。

その姿は、背を向けたままのその姿はまるで、『俺は違う』という意志の表れの様。

聖亜の言葉に、渚君も利寿さんもただ、息を飲んで呆然としてる。何も、言い返さない。何も言い返せない？ つまりは、凶星、なのかな。

聖亜は、少し間をあけて更に続ける。相変わらず静かに、強く、そして淡々と、言い聞かせる様に。

「確かに、前世まえでの俺と笠上は、アクアとシヨウは夫婦だったけど、前世まえと現世いまは違うんだよ。

俺とアクアは、違うんだよ……」

昼間の街中の憩いの場、として賑わう公園。に、聖亜の声が妙に響き渡った様に感じた。

渚君と利寿さんは、神妙な顔をして聖亜の後ろ姿を眺めてる。聖亜は、なんだか無表情だ。無表情の瞳で、私でもなく、宙を眺めてる。私の手を取る聖亜の手に、少し力がこもった様に思えた。

それから、何秒間そのままだったろうか。無言で、重たい空気が立ち込める私達の間。聖亜は、何も言わない。そしてそのまま、私の手を取ったまま、静かに公園を後にした。

それ以来……、夏休み中、渚君も利寿さんも私たちの前に姿を現すことはなかった。聖亜の言葉が心に刺さったのかなんなのか。2人とも神妙な顔をしてた。何も言い返さずに。

こんなこと、考えたことなかったのかな？

なんか、聖亜って凄い。なんか、凄いいろいろ考えてる。重たい言葉。

別に……、前に流されてる訳じゃない私にも、なんだかズシツとくる言葉だった。

9月1日、始業式。

残暑厳しい9月。天気予報では今日は30度を越えるらしい。

久しぶりの制服に久しぶりの学校。そして何より、久しぶり早起き。

課題しか入ってない軽い鞆を手に、朝から暑い空を見上げた。

そう、今日から学校。

「よお」

「あ、聖亜。おはよ」

いつもの登校時の待ち合わせ場所。聖亜が一足先に来ていた。

聖亜……。と渚君は、また衝突するのだろうか？　これから学校。夏休みはもう終わり。毎日、顔を合わせるんだ。でも、あれから姿を現さなかった渚君。もう、何も、言わなくなってしまうのだろうか？

「明日菜？」

「へっ？　あ……、何？」

聖亜に呼ばれて私は現実へと引き戻された。なんだか、隣りの聖亜のことも忘れて、考えこんでた？

「どした？　黙り混んで」

「えっ？　ああ、いや。なんでもないよ。ちょっとボーっとしてただけ」

なんとなく、言い訳。だって。

『何も言わなくなってしまう』って何？　私、何考えてるの？

渚君が、『何も言わなくなる』、それにこしたことないじゃない。

『なってしまう』。何、その言い方。まるで、そうなって欲しくない様な……。

「明つ日菜ちゃんっ！　おっはようー！」

「……お、おはよ……」

今日、渚君が教室のドアを開けて、一言目はそれだった。

なんか、『何も言わなくなってしまう』どころか、まるで何事もなかったかの様に……、至って普通の夏休み前と同じ態度。

いや、それどころか、行動がエスカレートしてる。

夏休み前よりも更に馴れ馴れしい、というか……。常に私について来ようとすると、常に私に話しかけてないと気がすまないみたいにしよっちゅう話しかけて来るし。更に、聖亜に対してすらなんか馴れ馴れしい。

というかなんというか……。

さっき久々に会った聖亜に対し渚君は、『やつほー、聖亜君っ。ひっさしぶりーっ、元気だった？』、なんて話しかけてた。それはもうとてもニコやかなか渚君スマイルで。聖亜は一瞬呆気にとられて目を丸くしたけど、すぐ『下の名前で呼ぶな』と、後ろから強烈な蹴りを入れていた。

この渚君の態度には、私も呆気にとられて目を丸くした。と言うより、この世で有り得ないものを見てしまった気分だった。

渚君は、次の日もそれからもずっと、そんな調子……。

「なんつなんだっ、あいつはっ」

夏休みが終わり1週間が過ぎたある日の昼休み。渚君をなんとか撒いて、屋上にやってきた私達。聖亜が疲れと呆れと怒りをおり混ぜて言った。

「アハハ。だね……」

私は冷めた笑いと共に呟いた。

私なんか今日、学校の敷地に足を踏み入れてから初めて視界に渚君がいない気がする……。そして相変わらずリアも渚君の回りをうるちよろしてる。

なんか疲れる。最近逃げてばかりの様な気が……。

その時、ガチャと静かに音をたて、屋上のドアがゆっくりと開いて行く。

珍しい。この学校の屋上はめったに人がいない。私達は良くいるけど。私達がいる間に誰かが来る、なんてことすらほとんど体験したことがない。私と聖亜は一瞬目を見合わせ、ドアを見た。

そして、私と聖亜はまた、顔を見合わせた。そこに立っていたのは、ドアを開けたのは、

渚君だった。

傍らには、リアがくつついてる。そんなことは気に止めない雰囲気、勝ち気に微笑んだ渚君だった。

さっき、撒いたのに……。

「天原っ！ テメエ……、なんでここが分かった……！？」

聖亜は、渚君から私を隠すかの様に、私の前に立った。渚君はニコッと笑って返す。

「うん。なんとなくね」

「なんとなくだあー!？」

「うん。多分、これも僕のこの変な力の一種だと思う。なんとなく、明日菜ちゃんのいる方向がわかるんだ」

「何い、……?」

ニコニコの渚君に、今にもキレそうな聖亜。

ああ、だから街中とかでも私を見つけたのかあ。って、納得してる場合じゃない。

この状況はちよつと……。今度こそ、殴り合いとか……。

「ねえ、明日菜ちゃん、立花君」

ふと見ると、渚君は珍しくマジな顔をしていた。

「話があるんだ。聞いてくれる？」

「話、だと……？」

いつもよりも低い声で言う聖亜。渚君は無言で頷く。いつもよりも大人っぽい、真面目な顔で。

聖亜は軽いため息をつくとき、顔を険しくさせた。そして、私の手を強く握る。

「貴様と話すことなんかねえ」

そう言うと聖亜は、私の手を引いて屋上の出口へと向かった。そして、渚君の脇を通り過ぎた直後。

「逃げるの？」

聞き慣れた渚君の声であり、聞き慣れない渚君の張りのある声。聖亜はそれに反応し、足を止めた。渚君と聖亜は少し横にズレてるけど、背中を合わせた様な状態。渚君は、こっちは背を向けたまま動かない。聖亜も足は止めたものの、振り返りはしない。

「逃げる、だと……？」

「うん。違っ?」

「違っ」

「そっ?」

「そっだ」

何、このずいぶんと淡々とした……、雰囲気。相変わらず背を向けたままで。顔も見ずに淡々と話す。

怖いくらい普通に……。怖いくらい……。普通じゃなく。

「とにかくっ」

渚君は振り返った。その顔には、いつもの渚君スマイルが戻っていた。

「聞いてよ。夏休み中に立花君に言われたこと、僕なりに考えて答え出したんだから」

「あの後ね、僕、ずっと考えてたんだ」

渚君は、屋上のフェンスによしかかり、ペタンと座りこんだ。それにつられて私達も座る。聖亜は、渚君のいる方からは少し体の向きを反らしてる。リアは、こんな時でも渚君の側からは離れない。

「立花君にああ言われてさ、僕、結構ショックだったんだ。そんなこと……。考えたことなかったからね。」

あの後、僕が明日菜ちゃんの前に姿を現さなくなったのは、少し自分でゆっくりと考えてみようと思ったからなんだ」

めったに人の来ない屋上。渚君の静かな声がいやに響く気がする。聖亜は体の向きは反らしたままでけど、顔だけは渚君の方へ向けた。真つ直ぐ渚君の目を見ている。とても真剣に。

渚君は空を見上げてる。

「でね、僕なりにしつかり答え出したんだ」

渚君は視線を下ろした。そして、ゆっくりと私を見て、聖亜を見た。

「ねえ、立花君なら分かると思うけど……、サレスと明日菜ちゃんって、似てると思う？」

「……いや、顔はそのままだが……、中身は全然違う」

「でしょ？ 明日菜ちゃんとサレスって、同じなのは顔だけなんだよね。性格は別人」

「まあ、な」

聖亜はボソツと言った。その聖亜の肯定の言葉に渚君は一瞬笑って、また真面目な顔になった。

「立花君、あの時言ったよね？ 『前と今は違うんだ』って、『俺とアクアは違うんだ』って……」

渚君の言葉に、聖亜は何かを悟った様な顔をした。そして、渚君から視線を反らした。『ちっ』と、舌打ちして。

「もう、何が言いたいか分かったでしょ？」

渚君はニコツと笑う。聖亜は軽くため息ついて、ボソツと口を開いた。

「ああ。つまりは明日菜も……」

「前世まえと現世いまでは違う」

2人の声が綺麗に揃った。

「って言いたいんだな……？」

「そつ。僕とライティスは違うし、明日菜ちゃんとサレスも違う。だから、この気持ちは前世からそのまま来た訳じゃないよ」

渚君はニコニコしながら言う。聖亜は、渚君から視線を反らしたまま、神妙な顔をしてる。

「まあ、でもね……」

渚君が笑顔を消して口を開いた。

「最初は、そうだったかもなあ」

「は？」

聖亜が怪訝な顔で渚君を見た。

「うん。最初の頃は……、まだ転校したての頃は、サレスの来世だから、明日菜ちゃんが好きだったのかも……」
「ほら見ろっ」

渚君の言葉を遮って聖亜が怒鳴る。渚君は、一瞬びっくりして、それから笑顔になった。その笑顔はいつもの子どももっばい笑顔じゃない。なんだか……、優しく微笑んだ。

聖亜ではなく、私を見つめて。

「でも、今は違う。」

本気だよ？ 本気で……、明日菜ちゃんを愛してるよ。」

な……。

耳を疑った。言葉に詰まった。だって。

初めて聞く言葉。言われたことない言葉。

今のは、何？

私に言ったの？

私が言われたの？

顔が、熱い。

渚君は、そんな凄まじい発言を、照れもなく言った……。

あ、『愛してる』……？

「貴様、人の彼女によくも又ケ又ケと言いやがるな」

聖亜は深いため息をついて渚君を睨みつけ、それから軽くうつ向いた。何やら、静かに怒ってるっぽい……？

「うつっ！ もう遠慮しないよ」

渚君はニコニコ顔で答える。そんな渚君の言葉に聖亜はまたも深

いたため息をついた。それから、心底嫌そうに『ちっ』と舌打ちをする。

「ああ、そうかよ。つつつか、今までも遠慮なんてしてねえだろう。フンッ。」

「もういいだろ？ 明日菜っ、行くぞっ」

「え、あ……、うん」

聖亜は私の手を強めに握り、屋上から出て行った。

『本気で明日菜ちゃんを愛してるよ』

私は、渚君のあの凄まじい発言が頭から離れなかった。なんだか上の空で、『帰るぞ』という聖亜の言葉への返事も、申し訳ないけど生返事気味。だって、こんなこと、体験したことないんだもの。

顔が赤いのが分かる。

渚君は、珍しく追って来なかった。

ああ、駄目だ。のぼせちゃう。

何分経っただろうか。私は、さっきから風呂の湯船でボーツとしてる。なんでだろう。渚君のあの言葉が頭から離れない。

『本気で明日菜ちゃんを愛してるよ』

この言葉ばかりが頭の中で渦巻いて、思考回路が正常に働かない。何やってんだろ。顔のほてりが消えない……。

どうして？ たかが……、そう、たかが渚君の言葉なのに。しかも今更な感もあるのに……。

渚君の、気持ちなら知ってた。

ちゃんと言われたことはないけど。なんてもの好きにも、私なんかを好きだ、ということ。それを、言葉に出して言われただけなのに……。

知ってた、ことなのに……。

「ハア……」

なんだかため深い息が出た。こんなことで……、私は何を考えこんでるの？

たかが、渚君の言葉。

知ってたことなのに。知ってたことを、改めて言われただけなのに……。

凄まじい発言ではあったけども……。

ああ。駄目。こんなところで、湯船の中なんかで考えこんでたら、ホントにのぼせちゃう。この顔のほてりは、お風呂にいるせいで余計じゃない？

もう上がらなきゃ。

風呂から上がるのと立ち上がるうとした。いつものつもりで、湯船の端に手をかけ、延ばしていた足を曲げ、力を入れた。

瞬間。

私はバランスを崩した。激しい水温、激しい水しぶきが舞う。湯船に沈みかけた所を、すんでの所で両手で湯船にかけた手に力を込め、体を支えた。

な、何？ 足が、言うことを聞かない……。

私は息を飲んで固まった。

言うことを聞かない足。に、目をやると、私の視界に飛び込んで来たのは、『うるこ』。

青とも、緑とも取れる、美しい色の、うるこ。

足が、私の足が魚に……。いや。

私が人魚になっていた。

何、これ。

正に、頭が真っ白。

今、何が起きてる？ なんだか、固まって動けない。体が、自分の物じゃないみたいに、硬直して動かない。

これは、夢？ 幻？

一体、どういうこと？

私の足が魚に。私は、人魚なの？

嫌……っ！

背筋が凍る。ゾツとして、寒気が体中を走り抜けた。

慌てて目をつむる。顔を左右に振る。目を擦る。

このことを、気のせいにするために、見なかったことにするために。夢、幻にするために。

何秒、目をつむっていたかな。

数秒後、恐る恐る、目を薄く開ける。

「あ、あれ……？」

目前に広がったのは、見慣れた人間の、私の『足』だった。魚ではなく、人魚ではなく。

戻、った……？

今のは、なんだったの？　なんか、呆然唾然。とにかく驚いて動けない。頭も体も動けない。

私の足が魚になっていた。私自身が、人魚、になっていた？
どうして？　なんで？

あれは夢？

そう言えば。前に渚君が、私は人魚になって行くみたいなのを

言ってた。体に変化が表れるって。

それ、なの？

私の体に、人魚になる変化が……？

私、人間じゃなくなるの？

また、背筋が凍る。

人間じゃなくなる、なんて、嫌。怖い。

まさか。まさか、そんなこと……？

そんな『まさか』だよな？ 私は、今、ちゃんと人間だもの。
2つの足で地面を歩ける。これからも歩いていく。

そう。ちゃんと人間だ。

『人魚』になんて、なりたくない。

何、これ……。

押し寄せる不安を無理矢理押し込み、お風呂から上がり、パジャマを着て、洗面所の鏡の前に立った。

そこでまた、私は凍り付くことになった。だって、なんか。

髪の色が、いつもより青い？

気の、せい？ いや、気のせいじゃないっ。青い。青いよ、絶対。元から少し青っぽかったのは確かだけど……、それにしてもいつもより。

「なん、なのさ……」

鏡の中の自分に向かって、ボソツと呟く。受けとる相手のない言葉は、静かな洗面所に響く。

鏡の中には、凍り付いた私がこっちを見てる。少し、青ざめた瞳でこっちを見てる。

何……。これも、渚君の言う、体に起こる変化なの？

私が、人魚になっていく、って言うの……っ？

「明日菜、どうしたんだ？ それ……」

次の日の朝。私と聖亜の待ち合わせ場所にて、聖亜が啞然として言った。これが今日、聖亜の開口一番。

「わかんない……」

私は自分の髪を数本つまんで力なく言った。

私の元気のない言葉に聖亜は何かを感じ取ってくれたらしく、ポンポンと私の頭に手を置き、優しく撫でた。

足が魚、なのはすぐ治ったのに、この髪の色は一晩経っても戻らなかった。

昨日は、なんだかいろいろ頭の中で渦巻きちゃって、ろくに寝れてない。

私は人間だ、って、必死に思い込もうとしてた。

一つ、気付いた。この髪の色……、リアの髪の色に似てる。

「わっ。明日菜ちゃんっ、髪青いっ」

渚君の開口一番もそれだった。同じクラスの連中もさることながら、他のクラスの人達まで集まって、私の髪を見て行ったりしてる。

そんなジロジロ見ないで……。染めた訳でもないんだし。

「明日菜ちゃんっ。体に変化、表れてきたねっ」

「え……？」

私の隣で渚君が、満面の笑みで言う。

『体に変化が現れた』？

「や、やっぱりそうなの？ ……これ？」

「うん。だと思っよ」

恐る恐る聞き返す私に対し、渚君はあっさりと言う。

そ、そんな……。私、何？ これからこんな変化が出てくるの？

嫌。

嫌だよ、そんなの。

私の気持ちも考えずに、どうしてそんな簡単に言うの？ 渚君。

そんなこと、聞きたくない。聞きたく、なかったよ。

私の表情があらさまに曇ったのかな。渚君の瞳が、心配そうに揺れた。

「明日菜ちゃん。ど、どうしたの？」

私を、『サレスの生まれ変わり』だと信じて疑わない渚君。心配はしてくれるけど、その理由については、疎いかもしれない。

「高瀬、何事だ……？ それ」

現在昼休み。案の定というか……、風見先生に呼び出された。聖亜と渚君も付いて来てる。聖亜は、なんだか元気のない私を心配してくれてる。渚君も、そうなんだけど、理由については良くわかっていないみたい。

呼び出された場所は、風見先生が化学教師であるが故に化学準備室。呼び出された原因は、まあ、言うまでもなくこの髪。

私のせいじゃないのに。

しかも、なんて言ったらいい？ 渚君の言う、『体に現れた変化』だなんて認めたくない。口に、したくない。

「あの、先生。なんか、昨日の夜から急に……」

私はあんまり言いたくなくて、あったことをそのまま言っただけです。渚君が軽く、聞きたく言葉を言っただけのけり。

「先生つ。例のあの話のやつですよ」

やめて。

そんな簡単に言わないで。

聞きたくない。

私は、そんな風には思っていない。

「ああ。人魚がどうのこうの……、ってやつか？」

「そうです……っ」

渚君の言葉を遮る様に、聖亜が渚君の頭を小突いた。と言つより、殴つたに近いかな。

私の、表情を察してくれて……。

それにしても風見先生はすぐに何の話だか察してる。

こんなにあっさりと話が通じてしまうなんて。先生、信じてるのかな。

あんな、突拍子もない話なのに。

ふと見ると、風見先生は腕を組んで考えこんでいる。やっぱり、信じてない？

「なあ」

「はい？」

「だからって、なんで青くなるんだ……?」

「ああ。それは人魚が青い髪だからですよ。ただ、人魚全員が青じゃないですけど。青系……、緑から紫までいますよ」

風見先生の素朴な疑問、渚君はのにこやかに説明する。風見先生は感心したかの様になづきつつも更に疑問の目。

「だから、なんで高瀬の髪は青味が強くなったんだ?」

「ああ。それは多分、『人魚』に近付いてるんでしょうね」

いや

渚君がニコやかにさらっと言った言葉が、私の心の奥に深く刺さった。

ちょっと待って。

『人魚に近付く』? 私が…?

いや。

私は、人間だよ?

なのにこれから人魚に近付いてくつて言つの? なんで?
それでこのまま放つとけば人魚になるの? もしなったら……、
何? 私は人間じゃないの?

青ざめた。

怖い。怖い。

怖い。

「先生……っ」

ガタツと、私は思わず立ち上がった。顔は、軽く上を向けて。風見先生の顔を、見てる様で見てない。

下を見たら水分がこぼれ落ちそうだったから。

「もう、この髪の毛のことは、いいですよね？」

「あ、ああ……。まあ、仕様がないよな」

急に言い出した私に、風見先生は驚いている。

「分かりました。行こっ、聖亜っ」

「え？ ……ああ」

聖亜も、驚いている。

だけど、私はそんなことは気にせず、気にしてる余裕はなく聖亜を連れて、化学準備室を出た。

そそくさと。逃げる、みたいに。

「明日菜。どうした？」

聖亜は私を引き止める様に言う。私は、相変わらず視線はやや高くしてズンズン歩いていたのをピタッと止めた。

最初は、何とも思わなかった。渚君に初めて会って、この『人魚』の話が聞かされた頃は。でも、こうして訳の分からない変化が我が身に起こって、事実、人魚も実際に存在している。

なんだか、急に、不安……？ 恐怖……？ そういっても言えない感情が渦巻いてきた。

「うん。なんか、ね……」

私は、静かに口を開いた。

聖亜は私の前に立ち、目線の高さを合わせてくれる。

「なんかさ、よく分かんないけど……。何？」

私って、なんなの？」

「明日菜？」

言いたいことのまとまっていない私に、聖亜は疑問の声を上げる。

「何？ 私って……、

人間じゃないの……？」

ちよつと間を開けて、最大の疑問を、不安を、恐怖を、口に出した。昼休みの人通りの多い廊下。なのに……、私の声が響き渡った様な気がした。

【6】
終了

7 (前書き)

またも 大変長らくお持たせ致しました(汗)

The legend of Mermaid 第7話です

もし よければ お読み下さいませ

放課後。

「お邪魔しま〜、す」

ここは聖亜の家、の聖亜の部屋。

あの時、昼休みももう終わる時間だったから、放課後、聖亜に家に誘われた。

『ゆっくり、話そう』って。

「なんか、ちょっと見ない間にシンプルな部屋になったねえ」

聖亜の部屋を見渡し呟いた。

最近でも聖亜の家に自体は何度も入ってるけど、そう言えば聖亜の部屋は久しぶりだ。家同士の交流はまだまだ続いているけど、流石にもう一緒に遊ぶ、なんて年でもなくなっただから。

なんて言うか、黒ばっかりな部屋だ。そして紺や白が点在。そして以外にといつかなんとといつか片付いている。いや、それ以上に物が少ない。

「あつたりめーだろ。お前が最後に俺の部屋入ったのいつだと思っ
てんだ？」

一人で感心していると、お茶のペットボトルとポテトチップスの袋を持った聖亜が後ろから現れた。

「え、いつだっけ？」

「小5」

そんなに前だったかあ。

部屋に通された私は、聖亜に差し出されたクッションを敷いて床に腰を下ろした。聖亜は、私に向かい合う様にベッドに座り、ポテトチップスの袋を開ける。

それから、不意に真面目な顔になった。

「言いたいこと、全部言え」

いつものぶつきらばうな聖亜の口調。だけど、まじめな表情と真摯な瞳で親身になってくれてるのが分かった。

言いたいこと……。

いっぱいある。

聞きたいことも、いっぱいある。だけど、私の中でイマイチ整理ができてない。

何から話せばいいのかな……。それが、わからない。

うつ向き、言葉を探す私に、聖亜は急かしもせず静かに待っていてる。私がひとしきり考えた後、口に出たのは、最大の不安だった。

「私って、人間じゃないの……?」

うつむいたまま、小さな声で言った。聖亜はうなづき口を開く。私を、真正面から見て。

「どうして、そう思うっ？」

どうして……。

聖亜の問いに、あまり回ってない頭を回転させる。いろんな感情がグルグル渦巻く。何から言えばいいのか、わからない。思い付いたことを、口に出せばいい？

だめ。なんか、泣きそう……。

「うん。」

なんかさ、髪も……、こつやって青くなった訳でしょ……？」

泣くのをこらえるために、あえて視線を上げた。下を向くと重力に逆らえずに涙が溢れそうだったから。でも。

「うん。後は……？」

優しくつなづく聖亜と、目があった。その瞬間、もう駄目だった。私の意思に逆らい、一粒の涙が私の頬を伝った。

もう、駄目だ。

止める術は、私にはない。

「後ね、昨日、お風呂で……、一瞬足が、
魚に……っ」

涙も止めずに、私は思ってることを全部聖亜に言った。聖亜は、真剣な優しい目で私を見る。

涙のせいで、上手く話せない。言葉が、切れる。

「人魚、空想上の物な、はずなのに……、存在してたし……」

不意に、聖亜の手が目前に伸びる。優しく、私の頬から涙を拭いた。

だけど、そんな優しい聖亜の行為に、応えてる余裕は今の私にはなかった。

一度外に出してしまった言葉は、気持ちは、もう、とどまることを知らない。

「どうしてこんなことが私の体に起こるの……？　なんで私なの……！？」

話していくうちに、次第に頭の中が整理されていく。と同時に不安も恐怖も大きくなる。何が怖いのか不安なのか、自分で嫌と言う程理解していく。だんだん声にも、力が入った。

「つまりは私は、人間じゃないの！？」

最大の不安。最大の恐怖。

思いつき外に放った。私の涙を、聖亜はそっと拭う。そしてそのまま、私の肩を抱いた。

「俺は、人間だと思っぞ」

「え」

私の耳元で聖亜は囁いた。それから、私に視線を合わせ、ゆっくりと言ひ聞かせる様に言った。

「確かにおまえには、『人魚』っぽいところはある。が、俺からすればいいだけだ。」

「いいか？ まず人魚は10年たってやっと人間でいう1年分歳取るんだ。後、地上で走り回る体力もない。だけどお前はどうか？」

聖亜が私に問う。

「10年で1歳分歳を取る。ことは渚君に聞いた。走り回る体力がないことは夢で見た。私、は、今まで1年で1歳、歳を取ってきた。地上を走り回ることもできる。確かに……、そこだけを考えたら人間だ。」

「だけど、この髪の色、魚になった足。」

「これは、人間じゃない……。」

「明日菜っ」

「グルグル考え込む私に、聖亜が言う。」

「考え過ぎるなっ。」

「考えて見る。どうして人間の両親から人魚が産まれるんだっ!？」

「聖亜は強く言う。」

「ああ。確かに……。」

「あれ……?」

「でも前に渚君が……。」

「私達、サレスの子孫だって……、渚君が言ってた……」

私の言葉に聖亜は目を丸くした。
そういえば、聖亜は知らなかったっけ？

「それホントか？」

聖亜の問いに、私は無言のままうなづく。
そして聖亜は軽いため息付いた。

「だとしても明日菜……、300年前だぞ？ 何代前なんだよ。そんな大昔の人魚の血……、もうないも同然じゃないか？」

『ないも同然』。

そうかな。そうなのかな。

だと、しても……。

ダメ。

聖亜、ダメだ、私。

考え過ぎって言われても、考えてしまう。

私は、人間でありたい。

何分かして、私が少し落ち着いたところ、聖亜も少し落ち着いたかのように、ポテトチップスに手を伸ばした。そして、呟いた。

「天原は、なんで俺達がサレスの子孫だって知ってたんだ……？」

あ、確かに。

ライティスやサレスの死んだ後を知る術はないし……。どうやって？

「家系図でもあったりしねえかな」

「家系図？ ああ。あるよ」

「！？」

ダメ元で、聖亜のお母さんに聞いてみた。ら、聖亜のお母さんはさらりと言った。私と聖亜は声ならぬ声を上げた。

「え！？ マジ！？」

「それちよつと見せてくれっ」

「え、なんで？」

「いいからっ」

聖亜の言葉に、おばさんは家系図を探しに行く。私と聖亜は、言葉なく顔を見合わせた。

「冗談だった、つもりなのに。まさか、ホントにあるとは……」。

「ゴホッ。しっかしきつたねえな、これ」

聖亜の部屋に埃が舞う。

おばさんが持ってきた家系図は、太くて大きな巻物だった。物置に入れたまま、半分忘れられてたらしく、かなりの埃にまみれてい

た。私達は、むせながら埃をはらう。そんな中、聖亜が染々と言う。

「なんでんなもんあんだろなあ」

「確かにね。もしかしてうちにもあるのかな」

「ああ。かもしれねえな。よし。だいたいいいな。開くぞ？」

聖亜がゆっくりと巻物の紐をほどいた。

コロコロと音もなく転がる巻き物。

最初は白紙。少し転がして初めて、人の名前が出て来た。

よく見ると、完全な家系図ではなかった。最初に出て来た名前は、私と聖亜のひいおばあちゃんに当たる人の名前。その人の子供に当たる人から私達にかけては何も記されていなかった。

2人で首を傾げたが、考えて見れば当然な気もした。

このご時世に、いちいち家系図に残す、なんて聞いたことがない。

まあ、家系図があること事態、変な気もするけど。

「300年前つたら何代位前になるんだ？」

「う〜ん……、12〜3代位かなあ」

「このひいばあちゃんて3代前だから……」

家系図を更にコロコロ転がして行く。と、それはとある代まで止まっていた。

「あれ？ 14代目より前は書いてねえな」

「ホントだ。」

……あつ、聖亜っ。見て！ 13代前のとこ！」

目に入った文字に、私は慌てて指差した。その書かれていた名

前は……。

「セイン、ハリー……」

私と聖亜は同時に声を上げた。

『セイン＝ハリー』。

サレスとライティスの息子の名前だ。

因みに……、サレスとライティスに当たる15代前、セインの前は『不明』と書かれている。

『セイン＝ハリー』は、実在した。

じゃあ、やっぱり私達は……、サレスとライティスの子孫？

「明日菜っ」

「え……？」

睨む様にして家系図を見ていた聖亜が、突然声を上げた。

「見ろっ。ここで立花家と天原家に分かれてるっ」

聖亜の指差す先を見ると、ちょうど唯一続いていたハリー家のところが、娘2人しか産まれなかったみたいで、立花家と天原家に分かれていた。

5代前……、ってことは。

「私で言う、父方のおばあちゃんのいとこに、天原って人がいるん

だ……」

「俺で言う、父方のじいちゃんのいところか」

なんか、私達と渚君の家って、すっごい遠い親戚なのかと思ってたけど……、それほどでもない？

「ホントに俺らってサレス達の子孫なんだなあ」と、聖亜が感心した様にしみじみと呟いた。

サレスの子孫。

つまりは、『人魚』の子孫。

ああ、駄目。そんな深く考えちゃ駄目……。

さつき聖亜も言うてくれたのに。人魚の血が混ざってるのは私だけじゃないって。私は一人じゃないんだって……。

でも、やっぱり……っ！！

「聖亜ー！」

私が一人でうじうじ考えていると、下から聖亜のおばさんの声が響いた。

「友だち来たよ」

え……？

「友だちい？俺に友だちと呼べる様なヤツいるかあ……？」

聖亜は心底疑問な顔で言う。

確かにそうかもしれないけど、自分で言うのって……。

「んなあ、…っ」

私を部屋に残し階下へ行った聖亜の怪訝な声が響く。すると次に聞きこえた声は、いやに聞き覚えのあるものだった。

「やつほー!!」

え………？

思わず私も部屋を飛び出し階下へと向かう。すると玄関に、ニコやかに手を振る見覚えある少年。

「あ、天原あ、………!?!」

「渚君っ!?!」

と、リア。

「貴様……っ、なんでここににいるんだ？ いや……っ、それよりもっ、なんつで貴様が俺ん家知ってたんだよ」

聖亜が静かに怒る。

ここは聖亜の部屋。ここにいるのは私・聖亜、そして突如現れた渚君とリア。もちろん、聖亜に怒られているのは渚君。

「学校でも言ったじゃん。僕は明日菜ちゃんのいる方向がなんとなく分かるって。それ辿ったら立花君の家に辿り着いたの」

「……………」

見るからに聖亜の怒りは、静かながらも膨れ上がってきているにも関わらず、渚君はニコニコ顔であっけらかんと答える。そんな渚君の態度に、聖亜は本気で怒りを爆発させる気配。

「だからって、何故うちにあがってくる……………っ!？」

「もちろんっ、明日菜ちゃんに会いたかったからっ」 本気で怒り狂いそうな聖亜を前に、渚君はニコやかにかつ爽やかにそんな言葉を言い放った。なんて怖い物知らずな……………。

「貴様……………! 今すぐ消えろ。俺の視界に入ってくんな……………!」

聖亜は渚君の胸ぐらを掴み上げ、もの凄い低い声で言った。眼光鋭く、更にすわってる。

怖いよ、聖亜……………。

「あつ、家計図だ! それっ、僕ん家にもあるよっ!」

怒り狂った聖亜から話題を反らす様に渚君が言った。わざとらしい程の明るい声で、家計図を指差して。

「え？」

「あ、あんのか!? やっぱお前ん家にも!？」

「あるよ〜。だから僕らはサレスの子孫だって分かったんだよ」

不意の渚君の言葉に、聖亜も怒るのを忘れて声をあげる。

「やっぱり、そうだったんだ。と、なると、やっぱり私の家にもあるんだろっか、この家系図。」

「ところで明日菜ちゃん。なんで立花君家なんかにいるの？」

と、渚君が唐突にニコやかに言う。なんていうかホントに、渚君って前ぶれなく話の腰を折る。そんな渚君の言葉に、聖亜はまたしても静かに怒る。

再び聖亜の手は渚君の胸ぐらへ。

「自分の彼女を自分の部屋に入れて何が悪い。しかも『なんか』ってなんだ？『なんか』って」

聖亜。なんか短気なのはいつものことだけど、なんか拍車がかかってない？「そういうんじゃないってっ、んなわざわざ家系図なんか引っ張り出して来て何を話してたの？」

「え、ああ……」

渚君の言葉に聖亜の表情が曇る。と同時に、渚君を掴みあげていた手を放す。ちらっと私を見て、小声で『言ってもいいのか？』って聞いた。

ありがとう、聖亜。気を使わせてばかりだ。私は聖亜の目を見てうなづき、自分で口を開いた。

「うん。あのね、私、人魚のことでいろいろ不安になって……、話を聞いてもらったの」

私の言葉に、渚君が笑顔を消した。そして、一呼吸間を開けてから口を開いた。

「不安？ どうして……？」

渚君の真面目な瞳。珍しいだけにドキッとする。

「うん、いや、ね……」

あれ……。さっきちよつと落ち着いたはずなのに。思い出したら……、考えたら……。駄目だ。

「なんて言うか、私、人間じゃ……。ないのかな……。っ」
「明日菜っ」

私の言葉を遮り、聖亜が強い口調で言う。思考の迷宮から我に戻ると、大きな手が私の頬を包み込み、目の前には聖亜の顔があった。強い瞳。優しいけど強い瞳が私を見る。

「深く考えるなって言ったろ。思い出したらまた考えちまうんなら、何も詳しく説明する必要なんてない」

目頭が熱くなる。

なんでわかるの？ 聖亜。私なんにも言っていないのに、どうしても的確に欲しい言葉をくれるの？ 私の表情とか態度って、そんなに分かりやすい？

「人間じゃない？」

渚君がボソツと言う。聖亜は瞬時に反応。

「蒸し返すなっ」
「人間よ」

え？

聖亜の叫びなど我聞せず、今まで静かだったリアが突如口を開いた。

「人魚の私から見れば、あんたは人間よ」

リアがしれっとした顔で言う。

「うん。僕もそう思う」

渚君も口を開いた。珍しい真面目な瞳で。なんか、思いもよらぬ、って感じ……。渚君の中で私は、人魚なんだと思ってた。だって……。

「渚君、前に『私は人魚になっていく』、みたいなこと言ってたじゃん……。それに、今日、学校でも……」

そう。渚君が転入してきた頃、渚君に言われた。『人魚になっていく』って。その頃は、深く考えてなかったけど……。実感もなかったし。

更に今日。学校で私の青い髪について風見先生に説明する時だった。渚君は、私は『人魚に近付いてる』みたいなことを言ってた。

「ああ。ごめんね。明日菜ちゃん。僕、言葉足らずだったねえ」

渚君は申し訳なさそうな顔をする。

「明日菜ちゃん自身が人魚になるとは思ってないよ。なられちゃうしね。なんていうか、人魚の性質を持つ、みたいな感じかなあ」

性質を、持つ……？

『人魚になる』のと、『人間だけど人魚の性質を持つ』のって、なんかそんなに違うのかな。人魚そのものになるのではなく、人魚の特殊な能力を持つ、みたいな感じ？

なんにしても、そんなものだっていらん。いらんよ。
普通の、普通の人間がいい。

でも、これも深く考えたら駄目かな。考えない方がいいのかな。

不意に聖亜が私の頭を優しくなでる。そして私の目を見て無言のままうなづいた。

不思議。言葉はなくても十分励ましになる。

「ごめんね。明日菜ちゃんっ」

不意に、雰囲気ぶち壊しの渚君のいつもの明るい甘ったれた様な声が響く。

「そんなに気にしてたなんて……っ」

おもむろに私に抱きつこうとした渚君。が即座に、聖亜の蹴りとリアの止めが入る。

「貴様、どさくさに紛れて何しやがる」

「渚っ！ 渚は私の物よっ」

なんだこれ……。いつものノリだ。

一気に、重たかった場の雰囲気が軽くなった。今のは……、もし

かして渚君なりに気を使ったのかな。なんて……、どうだろう。あの渚君だし。

でも、なんとなくそんな気がする。

うん。なんか、少し元気出たかな。

深く考えるのは、もうやめとこう。

数日後。

「ふあ……。ねみ」

私の隣で、寝転がった聖亜が大きなあくびをしつつ、伸びをする。

ここは、『御人魚川』の川原。

最近私たちは、放課後をこの川原でのんびりすることが多い。最近放課後は、何故か渚君はめつたにひつついて来ない。学校は、なんか私達、つまりは私・聖亜・渚君・リア、そしてしつくく残る水奈本先生の変な噂が未だにあつてなんだか居にくい。家は、聖亜との付き合いが親にバレそうで嫌だし。まあ、隠したいって訳でもないけど、あんまりさらけ出すのはなあ。

それを考えるとこの川原って、人通り少ないし、静かでいいんだよね。

私と聖亜は、特に何をすることもなく、何をしたいでもなく、ただその場所が私達の特等席かの様に座って、綺麗な川を眺めていた。

今日までは。

不意に水のはねる音が静けさを切り裂いた。川から聞こえて来た、結構大きな音。

さつきまで草原に寝転んで、半分寝ていた聖亜が起き上がる。

「ん？ なんだ？」

「わかんない。なんだろ……」

私と聖亜は目を凝らして、音がしたあたりの水面を眺めた。すると……。

バシャンッ。

「姫様っ！」

激しい水音と供に女の人の声が響く。目を丸くした私達が見たものは、川から顔だけだしてこちらを見ている女性。しかも、『姫様』って一体……。

「あれ？ あいつ……」

目を見開いたまま、聖亜がボソッと言う。

「あいつ、リアの侍女じゃねえ？」

「え……？」

リアの侍女……？

って、前にリアを川に引きずり込んでったあの人の……？

「そうです！」

私が口を開くより先に、その川から顔だけだした女性が言った。こちらに向かつて泳いで来っつ。

「私、リア様の侍女であります、レーネ・イクスレイでございます！」

そうだ。確か、レーネさんだ。本人の名乗りによって、私の中でやつと顔と名前の記憶が一致した。

レーネさんは、なんだかとても丁寧な口調で喋りながら、川からはい上がって来た。

「おい。いいのか。んな人魚の足のままで」

「ああ、そうですわっ。これ乾くの遅いんですよねっ」

聖亜の冷静な突っ込みに、レーネさんは慌てて足、というか尾を乾かす。

それにしても、そんな大事なことを忘れるなんて……、なんかこの人、少しテンポずれてる様な……。それとも、足を乾かすのを忘れる程慌てる様な用事？

「あの、レーネさん。なんか用ですか？」

「え？ ああっ！ そうですわっ」

私の呼び掛けにレーネさんははっとした。そしてまたも足を乾かすのを忘れて凄い勢いで言った。

「姫様っ！ リア様っ、リア様を見掛けませんでしたか!？」

ひ、『姫様』って……、何？

「リアなら今日学校にいたぞ」

レーネさんの本意とは違う所がひっかかっていた私の代わりに、
聖亜がボソツと言う。

「ほ、本当でございますか!？」

「ああ。けど、その後は知らねえぞ」

「そうですか……」

聖亜の答えに、レーネさんは途端にしょんぼりと肩を落とす。

「だけど、レーネさんには悪いけど、私ははっきり言ってリアなん
てどうでもいい。それよりも……!」

「あの、レーネさんっ」

「はい。なんでございましょうか、姫様」

私の言葉にレーネさんは、とてつもなく丁寧な口調で返す。少し
丁寧過ぎる様なその口調も気になるけど、それよりも。

『姫様』

私がひっかかるのはそこ。

「あの、私、『姫』じゃないんですけど……」

「まあっ。何をおっしゃいますかっ、姫様っ」

私の言葉にレーネさんは目を丸くして驚く。

「例え生まれ変わっても姫様は姫様……」

「レーネさんっ!」

私はレーネさんの言葉を遮り、軽く怒鳴った。レーネさんはビクツと肩を震わせ話を止めた。

「レーネさん。私はもうサレスじゃないんです。生まれ変わったらもう別人なんですっ！」

私は最初は静かに。けど少しずつ力が入ってきてしまった。レーネさんに、私にも……、言い聞かせる様に。私が、そう思い込むために。

「今の私は、極々一般的な人間の、高瀬明日菜ですっ」

私は、人間だ。

レーネさんは、私の言葉にびっくりしていた。そして、だんだん神妙な顔になっていき、小さく息を飲んでから静かに口を開いた。

「そう、ですか……。分かりました。姫様がそこまでおっしゃるのであれば。これからは『明日菜様』と呼ばせて頂きます」

それは……、本当に分かっているのだろうか。私からすると『様』付け自体が嫌なただけだな。イマイチ理解しきつてくれてはいないんだろな。

「あの、それでは私、人間に見られないうちに帰ります。明日菜様っ、今日はありがとうございましたっ」

レーネさんは、言うなり華麗に川へ飛込んだ。

『人間に見られないうちに』って……、私達は思いっきり人間な

んだけどなあ。信頼されてるのか、それとも人魚仲間と思われるのか……。なんだかなあ……。

カサツ。

その時、私達の後ろから草の擦れる音が響く。いや、風の吹く川原だから、草の擦れる音なんてそこら中から聞こえる。よい一層、大きな音、というか……。

私と聖亜は何の気もなしに振り返る。と、そこには背の高い綺麗な女の人が立っていた。ちよつときつい感じの美人、年は20代中盤くらいかな？

その人は、5m程離れた所から私達を、なんだかとても熱心に凝視している。

一体、誰？

「ちよつと紗子（いさな）さーんっ。速いっすよっ」

その女の人の後ろから、今度は男の人が現れた。何が入っているのか、私達の鞆よりも大きなハードケースの重たそうな荷物を肩にかけた、やたら背の高い人。年は女の人より若くて、20才ちよつとかな？ 金髪で目が青い。けど、顔は日本人だから、髪染めててカラーコンタクトかな。

「もつっ、八田君っ。遅いわよっ」

『紗子』さんと呼ばれたその女の人が、その男の人：『八田』君に向かつて言った。

長身の若い男女。2人とも綺麗な顔してて、男の人は金髪、青い目。とても目立つ。

す、紗子さん？ 八田君？

私と聖亜は訳が分からなく、ポカンとして2人を眺めていると、紗子さんという人が口元に薄く笑みを浮かべた。そして、静かに、衝撃的な事を放った。

「君達、人魚と知り合いなの？」

私と聖亜は、固まった。

と、いうことは言うまでもない。

「ねえ。君達、人魚と知り合いなの？」

固まったまま何も言えない私達に、その『紗子』さんは、じれったそうにもう1度そう言った。

なんか、一応、疑問系ではあるものの、否定させない雰囲気。座ったままの私達を見下ろすこの『紗子さん』の目は勝ち気だ。確信持って言ってる。きっと、ただ確認するために、聞いてきている。

なんて、のんきに状況説明してる場合じゃない。

私と聖亜は、互いに助けを求めめるかの様に顔を見合わせた。全身から血の気が引いて行く。寒くなるくらいに。

それから数秒。聖亜が平静を装って、静かに口を開いた。

「な、なあ。あんたら……、誰？」

「え？ ああ、ごめんなさい。紹介が遅れたわ」

紗子さんは、シオルダーバックから名詞を取り出した。

「私、フリーの新聞記者の砂賀野紗子さかのうさちです。」

「しっ」

砂賀野紗子さんのニコやかな自己紹介と名詞に、私と聖亜は同時に声を上げ、更に同時に言葉を詰まらせた。

「あ、俺は紗子さん専属カメラマンの八田友柁っ。ヨロシクっ」

「専属だったの？」

「えっ、違うんすか!？」

八田君って人がなんか言ってるけど、放心中の私達の耳には残らない。

新聞記者……? って、まさか、レーネさん見られた……? いや、それならまだしも、もしかして写真……、なんか撮られたり? 八田君って人のあの大きな鞆は、もしかしてカメラじゃない?

顔面蒼白。今の私の顔は、きっとそんな言葉がびったりなんじゃないだろうか。渡された名詞を見たまま、私の身体は凍り付いている。

多分、聖亜も同じ。

「じゃあ、改めて聞くけど……」

と、砂賀野紗子さんは私達の側へ寄って、相変わらず座ったままの私達に視線を合わす様にしゃがんだ。そして、ニコツと笑う。

「君達、人魚と知り合いなんだよね?」

「何のことだよっ」

1、2秒の間の後、聖亜が砂賀野さんから目をそらしつつ言った。

「あらあ？ 何のことって、しらばっくれないでよ。今、一緒に話してた人、人魚でしょ？」

砂賀野さんは、ニコツと勝ち誇った笑みを浮かべてる。

やっぱり、しっかりバツチリ見られてるのかな？

「知らねえよ」

聖亜が吐き捨てる様に言う。その時、砂賀野さんの後ろに立っていた金髪の、八田とか言う人が、重たそうな鞆から大きなカメラを取り出した。

「フッフッフ。隠したってムダだぞ？ 俺がバツチリ撮っちゃったかねっ」

砂賀野さん同様、勝ち誇った笑みを浮かべ、カメラを掲げる八田さん。

そんな。本当に……、写真なんて……！

「そ……っ」

思わず『そんなっ』と声を上げた私を、聖亜が口を覆って止めた。聖亜は、鋭い目で砂賀野さんと八田さんを睨んでる。

「ホントかよっ？ 撮ったって」

「あぁっ。本当本当っ」

八田さんはニヤニヤして言う。聖亜は目をより鋭くさせる。

「じゃあ、現像して見せてみるや。今すぐにつ
「うつ」

聖亜のいか八かな強気発言に、八田さんは言葉を詰まらせた。

「ほら見ろつ。やっぱ嘘だつ！ ホントに撮ったんならこつそり現像して、新聞にでもなんでも載っけるだろ。明日菜、間に受けんなよ」

聖亜は私の頭にポンと手をおいた。

凄……。

本当、こつこつという時の聖亜って頼りになる。落ち着き払ってて、凄
い。頭の回転が早いのかな。きつと。

「もつ。八田君つ！ 余計なことしないでよつ」

「よ、余計つて。そりゃないんじやないっすか！？ 紗子さーんつ」

八田さんの失敗に砂賀野さんが怒鳴る。

とりあえず、写真は撮られてはいないんだな。だけど……、砂賀野さんのこの自信たつぷりな態度は、人魚を『見た』のは、確かなんだな。

「ねえ、しらばっくれないで教えてよ。君達、人魚と知り合いなん
でしょ？」

相変わらずの笑顔で、しつこく食い下がる砂賀野さん。

なんか、この人を納得させるのって……、至難の技かもしれぬ。

「おい。貴様」

と聖亜は、砂賀野さんへ激しく睨みつけ、低い声で言った。嘲笑う様に、鼻にかけて。

「あんた、いい年こいて人魚なんて信じてんのか？ バツカじゃねえ？」

「私もねえ、そんなの信じてなかったけど……。なんせ、この目で見ちゃったからね」

「けっ。どうせ見間違いだろ。近眼じゃねえ？」

「そうかしら」

聖亜の悪態に、笑顔で返し続ける砂賀野さん。なんかこのやり取り、怖いんですけど。

「あの、明日菜様………？」

その時、何処からか聞き覚えのある女の人の声。いや、あの呼び方……、『レーネさん』。

人魚だ。

再び、血の気が引いた。

「レ、レーネさんっ！今は出て来たら………、………？」

とっさに声のする方へ振り返り、『出て来たら駄目』と言いかけた。が、そこにいたのは。

レーネさん。確かにレーネさんだけど……。足が、ある。服、着

てる。

『人間』、のレーネさんだ。「レ、エネ、さん……？」

私は、驚きのあまりすんなりと言葉にならない。

そんな私よりも遅れること数秒、砂賀野さんが目を丸くして口を開いた。

「あなた、もしかして……、さっき、この2人と話してた人……？」

何、この人。顔まで判別する程はつきり見たの？ あの時、まさに人に人の気配なんてしなかったと思う。なのに、一体何処から見たの？

「そうですわっ」

呆然とする砂賀野さんに、レーネさんがすかさず口を開いた。

「先ほどこのお二方と話をさせて頂いていたのは私ですわっ」

な、何？ もしかしてレーネさん、私達のやりとり見てたんだ。そして、助けに来てくれた……？

「そうそ！ コイツだよ。さっき俺らが話してたのは」

畳み掛ける様に聖亜も口を開いた。

「見間違いだったんですかねえ？」

私達をマジマジと見ながら八田さんが呑気な感じに言った。直後。

鈍器の打撃音。

「痛っ」

「そんなはずないわよっ」

砂賀野さんが八田さんを拳で殴りつつ、怒鳴った。
な、なんか、思った通り凄い人だな、砂賀野さん。

「私はこの目でしつかりと見たのよ!? 八田君っ! あんただっ
て見たでしょう!？」

「まあ、それっぽいのは見たっすけど。俺、砂賀野さんみたいに、
目え、良くないっすから」

「ええっ、そうよっ! 私は両目3・0よっ! 何よ!? あんた
のそのカラコンは飾り!？」
「飾りっす……」

凄い剣幕の砂賀野さん。八田さんは、殴られた所をさすりつつ、
ボソボソ言う。なんだか、八田さんが憐れだな。

「とにかくっ」

仕切り直すように、砂賀野さんは私達を睨みつけ怒鳴った。

「この目で見ちゃった以上、何がなんでも証拠押さえてやるわっ!
これからあなた達を徹底的に追うから! 覚悟しといてっ!」

そう言い残し、砂賀野さんは慌ただしく嵐の様に立ち去る。八田
さんが慌てて後を追う。やっと、帰ってくれた……。

疲れた……。疲れる、砂賀野さん。

「これから俺と明日菜。追い回されるな」
「だね……」

聖亜の唇を噛み締める様な呟きに、私は力無く返事をする。やっぱり……、そうなっちゃうよね。

「ど、どうしましょ……っ」

少し呆然としていたレーネさんが、再びパニックになったかのように、悲痛な声を上げる。唇は震え、顔色は青く、瞳からは涙が零れる。

「私、私……、王様にお叱りを受けますっ！ リア様の侍女から外されたらどうしましょっ！ それに、それにっ、明日菜様までご迷惑を……っ」

「あ、はいはい。レーネさん、とりあえず落ち着いて。一番悪いのはレーネさんじゃなくてリアですよ」

私はレーネさんを丸め込む様に言う。

でも、この『一番悪いのはリア』って言うのは実際問題当たっている。リアが川から出てうるうるしてるから、レーネさんが探さなくてはならなかった訳だし。

「とにかく、レーネさんはすぐ川に帰って下さい。そして、もうむやみやたらとこっちには来ないで下さいね。後、リアには私から話しておきますから」

「は、はい……っ。ありがとうございますっ、明日菜様っ」

泣き崩れそうな勢いのレーネさんが、私の言葉にうなづき、深々

とおじぎをする。そして、華麗に川へと飛込んで行った。

綺麗。

潜った瞬間、足は魚の尾へ、服は溶けるかの様に水の中へ消えて行く。鱗がキラキラと光り、水面に揺れる……。流れる様に泳ぐ。人魚が泳ぐ姿って綺麗なんだなあ。

レーネさんは、川から顔だけ出してもう1度おじぎをした。そして、川へ深く深く潜って行った。

「ええ！？ マスコミにばれた！？」

翌日。今は12:30、昼休み。屋上。いるメンバーは、私・聖亜・渚君・リア。渚君とリアの見事なまでに重なった叫びが、静かな屋上に響き渡った。

「いや。まだ完全にバレた訳じゃ……。写真も取られてないし」

そんな2人に気押されつつ、私はボソボソと答える。渚君はヒステリックに叫ぶ。

「な、なななっ、なんっでんな事になったの！？」

「いや、レーネさんがね……」

「レーネが！？」

私の言葉が言い終わらぬうちにリアが声を上げる。『レーネ』という名前に反応して。

「もーっ、何やってんのよ、レーネはっ」

私まだ、『レーネさん』がどうしたのかは言っていないんだけど……

「あのなあ……。リア」 聖亜が呆れ顔で、更に深いため息ついて言った。

「何よ」

「貴様の侍女はなあ、お前を探してたんだぞっ。んでっ、偶然河原にいた俺らにあんたの居場所聞いてて、それである新聞記者に見られたんだぜ？ そうなると、1番悪いのテメエじゃねえか」

それ、昨日私も思った。その通りだよ。レーネさんが甘かったところがあるのも確かだけど。何より元凶はリアだ。

「ええ。私い？」

リアは、不満気に口を開く。

「そうかもしんないけどさあ。でも私、人魚に産まれたくて人魚に産まれてきた訳じゃないしい……」

リアが口を尖らせる。

この人。分かってはいたけど、なんて言う軽い女だ。一体私達はなんのために必死になってるの？ 当の本人が、おおげさかもしれないけど、仮にも自分の一族の存亡の危機だと言っのにこの態度。

「ま、しょうがないわね。私、一旦川に帰るわ」

と言い、スクツと立ち上がったリアは、やれやれと言った感じ。呆れてすらいるかも。

リアはそのまま、猫撫で声で渚君にじゃあねといい、軽い足取りで屋上を後にした。

残された3人で、深い溜め息。

なんか、腹が立つ。昨日、私達はあんなに一生懸命砂賀野さん達を誤魔化して来たのに。本当、リアは好きになれない。

「あ。やつほー、君達。コンニチワッ」

放課後。いつもの様に私と聖亜、そして無理矢理着いて来た渚君とで、帰ろうとした時、私と聖亜は校門手前で固まった。校門の向こうに、にこやかに手を振り、声をかけてきた女の人がいたからだ。隣りに金髪の男の人をつれた女の人……。

「さ、砂賀野さん……」

「え!?! この人が!?!」

誰だか分からずに首を傾げていた渚君が驚きの声を上げる。

そして聖亜は静かに怒って口を開く。

「なんで俺らの学校知ってんだよ……っ」

「昨日制服着てたじゃない。すぐわかったわよ」

あからさまに怒っている聖亜の機嫌は無視し、砂賀野さんは相変わらずにこやかに言う。そんな中渚君は困惑しつつ、小声で言う。

「ね、ねえ。明日菜ちゃん。本当にこの人達が、例の……、あれ？」
「ああ。うん、まあ……」
「あら……？」

私達の会話に気付いた砂賀野さんは、渚君の顔を凝視し、首を捻る。

「君、昨日はいなかったわねえ。なのに私達のことこの子達から聞いている……、となると」

そこまで言うと砂賀野さんはニヤリと笑う。

「もしかして、この子も君達の仲間……っ」

砂賀野さんは不意に口をつぐむ。目を丸くして。

何故か、というと、聖亜と渚君が凄い目で砂賀野さんを睨みつけたのだ。凄い、凍て付く様な2人視線。流石の砂賀野さんすら、黙らせた。

「な、何かしら……？」

ただならぬ2人の物言う視線に、砂賀野さんは目を泳がせつつ呟いた。

その時、渚君の回りの石ころが数個、音もなく浮き上がった。空へと舞う風船かの様に、軽く。

砂賀野さんと八田さん、そしてその場に居合わせていた河上高校目の生徒達が丸くした。

「な、渚君っ！ ストロープッ……！」

「っ」

とつさに、渚君の方を揺らし止める私。その声に渚君は我に返った様にハツとして、石は地面へとそのまま落ちた。

怒る気持ちはわかるけど、『石ぶつけた』なんてなったら洒落にならない。

「聖亜もっ！ キレるの終わりっ」

私は聖亜の背中を軽く叩いた。聖亜は舌打ちをする。

砂賀野さんと八田さん、その他生徒達は固まったまま。呆然として、話す言葉が見つからない感じ。

それにしても、渚君。あの力まで見られちゃったよ……？

「あの、砂賀野さん？」

「え……、え！？ 何！？」

砂賀野さんは、ようやく我に振り返り声をあげる。私は、不覚にも見慣れてしまったけども、あんなもの見て驚くのは、信じられないのは、当たり前。

とりあえず、学校に来られるのはまずい。しかも、今は早くこの場を去らないと、渚君の力とかのことで泥沼になりそう。

「砂賀野さん。もう、私達に関わらないで……、っても、無理だろうから、せめて、学校には来ないで下さい」

できるだけ、変な噂はたたない様に。誰かが何処かで、『人魚』に辿り着く可能性がない、とは言い切れない。できるだけ明るみにならない様に。できるだけ、誰かが人魚にたどり着いてしまう可能性が低くなる様に。

そうでなければ、また人魚を危険に晒してしまう……っ。

ちよ、ちよっと待って……？ 私、何を、言ってるの？

『また』、って何？

どういう意味？

「明日菜？」

「！！！」

今度は私が固まっていた。聖亜に呼ばれて我に返った。ふと視界に入った聖亜の顔は心配気に瞳が揺れている。きつと、私が凄く呆然とした顔をしていたんだろっな。

「どした……」

「ん？ 明日菜ちゃん、どうかしたの？」

「な、なんでもない……」

聖亜の言葉に、渚君も私に言葉を投げ掛ける。

とっさに、『なんでもない』としか答えられなかった。

私は一体、どうしたの？

「せ、聖亜っ。行こっ」

「え？ ああ」

私は、まだ呆然とつつ立ったままの砂賀野さん達に軽くお辞儀を

して、聖亜を連れて歩き出した。聖亜は首を傾げつつ、私の成すがまま付いて来る。渚君は猫撫で声をあげて追いかけて来た。

後ろの方で、校門辺りが騒がしくなってる。チラッと見てみたら、砂賀野さん達は未だ立ち尽くしてる。

『また、人魚を危険に晒してしまっ……？』

『また』って何……？』

『また』って何？ 『また』って何！？』

どうしたの？ 私……。私は、人魚じゃない。私は、サレスじゃない。私には、サレスなんて関係ない。私は、人間。人間だよ？ 人間、なのに……。

「明日菜、どうしたんだ？」

聖亜が、校門が見えなくなっってから、改めてそう聞いた。だけど、私に答えられない。

そもそも、どうして私はこんなにまで必死になって……、人魚を守ってるの？

なんで？

「明日菜……？」

私は、その場に崩れる様に座りこんでしまった。

なんでかな？

私は人間。絶対に人間。

前世だって関係ない。もし、もし仮に、前世と言うものが存在して、私の前世が人魚、サレスだったとしても……、関係ない。

今の私には、関係ないことなのに。

「明日菜。どしたんだ？ 大丈夫か？」

「明日菜ちゃん……、どおしたのお？」

渚君は消え入りそうな声で言う。

聖亜は、そっと私の肩を掴み立たせる。スカートについた砂埃を軽くはらってくれる。

「おい。明日菜？」

うつむいたままの私に、聖亜は目の高さを合わせて静かに言う。
なんか、聖亜に隠し事って……、出来ないや。

「聖亜……」

「ん？ 何だ？」

「ねえ。聖亜はどうして人魚を守ろうと思つ……？」

「っ」

私の質問に、聖亜は顔を強張らせた。

なんで？

理由は、わからない。だけど、聖亜の表情は次第に曇っていき、
終いには顔をうつ向かせた。

一呼吸置いてから静かに口を開いた。

「俺は、前世で、前世の俺が……、人魚にやってきてしまったこと
に対して……、罪悪感がある」

「え……」

思いもよらぬ聖亜の言葉。うつむきつつも、はつきりと言った。私と渚君は驚いて、少しの間を置いてからやっと反応出来た。私より、先に渚君が口を開いた。呆然としたまま呟く様に。

「罪悪感なんて、持ってたんだ……」

「ああ。アクアの時は……、罪悪感の『ざ』の字もなかったけどな」

聖亜はうつ向いたまま。小さなため息をついた。それから顔を上げた。その瞳は、毅然としていた。

「やっちまったことは、どうにもなんねえし……、悪あがき程度にしかならねえかもしないけど。せめてもの償いに俺は……、アイツらを守っていききたいと思う」

はつきりと、決意すら感じる力強い言葉。

聖亜は、アクアが、自分の前世がしてしまったことで戦ってるんだ。そのために、人魚を守ってる。前世のことで戦ってる。だけど、自分のために戦ってる。

私は、何を言ったらいいのかわからず、黙り込んでいた。聖亜は、そんな私の目を見てニツと笑った。

「なあに暗くなってるんだよ。お前、アレか？　なんで自分が人魚のために必死になってんのか……、とでも考えたのか？」

図星。

流石聖亜だ。15年も一緒にいたから、私のことなんて結構お見通しだったりする。まあ、15年も一緒にいても聖亜のことはよくわかんないことも多いけど。

「凶星、だろ？」

聖亜が優しい顔で言う。私は、少し間を置いて小さくうなずいた。

「なんで？」

その時、不意に渚君が口を開いた。ふと見ると、困惑した顔をしてる。その声に、力はない。

「なんで？ いいじゃん。必死になったって……。明日菜ちゃん自身にだって関わってくるかも……」
「貴様は黙ってるっ」

聖亜が凄い形相で渚君を睨む。渚君は口をつぐむ。今尚、困惑して。

渚君は、人魚に対して、前世に対して、渚君自信の感覚と私の感覚のズレには疎い。

聖亜は改めて私の瞳を見た。

「いいか？ 明日菜。深く考えるな。お前がとっさに人魚を守ろうと必死になってたってんなら、それはお前が人間だとか、サレスがどうかかそんなことは関係なく、お前自身が単純に人魚を守りたいと思ったんだ。違うか？」

深く考えるな」

聖亜は、ずっと私の目を見てる。力強い眼差しで。なんとも頼もしい瞳で。

単純に、私が人魚を守りたい？

「明日菜、人魚が世間に見付かればどうなるなんて、誰にだって簡単に予想つくんだ。それを止めようってんだから、それは人として凄い良いことなんじゃないか？」

どうして、聖亜の言葉にはこんなに説得力があるの？ どうして私が欲しい言葉を的確に言ってくれるの？

そうか……。

私が、私自身が人魚だとか人間だとか、そんなことは関係ない……。

ただ、危険な目に会いそうな人達を、人魚を守りたいと思っただけなんだ……。

「うん。そうだね……」

私はゆっくりとうなずいた。そんな私を、聖亜はそつと強く抱き締めた。

聖亜って……、凄いな。あんなに渦巻いてた心が、凄く軽くなった。こんなにも、迷いが簡単に消えた。

どうして聖亜には、私の欲しい言葉が分かるの？

「……？」

ふと見上げると聖亜は、私、ではない方を見ていた。鋭い目で。険しい顔で。真剣に。

聖亜の視線を辿る。その先には、渚君。

不意に私の心臓が早鐘を打ち鳴らす。目に映る、渚君の表情を見て。

渚君の瞳が、揺れていた。悔しい。悲しい。辛い。いろいろな感情が渦巻いて、瞳が揺れている。その感情が、ハタから見てもしっかりと読み取れる様に。

私の頭は真っ白になった。動悸が更に速度を増して行く。心臓どころか、全身の血管が波打っている。

渚君から、目が離せない。

どうして？

それから渚君は、唇を噛み締めうつ向いた。拳に力を込め、そして、私達に背を向けて走り出した。

渚君……っ！

自己嫌悪。

帰宅後。私は自室のベッドに倒れ込み、自分の頭を叩く様な勢いで抱えた。

どうしてだろう。

あの後私は、とっさに聖亜から離れて渚君を追った。

なんで？ わかんない……。なんで渚君を？ 聖亜の前で、聖亜から離れて、いや。あれは振り払ったに近かった。そこまでして……、
どうして。

ベッドに突っ伏しながら、自問自答を繰り返す。……答えられないけど。

なんか、あの渚君の悲しそうな、悔しそうな、辛そうな……。なんとも言えない顔を見たら、頭が真っ白になった。心臓が激しく鳴り響いた。

何も考えれなくなって、走り去っていく渚君を見たら、とっさに体が動いてた。

とっさに、聖亜を振り払っていた。

わからない、わからない……っ！

渚君を追い掛けて、まあ、追い付けなかったけど。それから我に返った時、血の気が引いた。自分のした行動の意味が分からない。慌てて聖亜のところに戻ったら、今度は聖亜が、去り際の渚君と同じ様な顔をしていた。それから聖亜は薄く笑って……、帰るぞ、と言っただけだった。

その後も、聖亜はこのことには触れなかった。
全く、一切、こんなことは、なかったかの様に。

どうして？

ねえ、聖亜……。どうして怒らないの？

私は、渚君を追ってどうするつもりだったんだろう。なんで……。この体はとっさに渚君を追い掛けたの？どうして……。聖亜を振り払ってしまったの？

どうして私は、聖亜を裏切った……？

私のした行動は、聖亜への、完全なる裏切り行為だよな？ なのに、どうして聖亜は私を責めないの？

心の奥がもやもやする。罪悪感。もの凄い罪悪感が渦を巻いている。

聖亜、しっかり怒ってくれた方がまだ少し良かったよ……。

あの、聖亜の辛そうな顔が頭から離れない。

明日、明日聖亜に謝ろう。

絶対、謝ろう。

急いで朝ご飯を口に書き込んだ。鞆を掴み取り、ろくに鏡も見ずに家から飛び出した。

こつこつ日に限って、私は寝坊した

現在 8：05。走れば遅刻はしないけど。

いつも聖亜と互いのうちから少し行ったところにある公園で7：40に待ち合わせしてて、7：50になっても来なかつたら先に行くって決めてあるから。聖亜はもう、多分いない。

待ち合わせの場所には……、やっぱり誰もいない。

まあ、こんな時間までここに居たら、歩いては間に合わなくなるし、当然だけど。

とにかく、急がないと。

靴箱に手をつけて、肩で激しく息をする。学校まで走って、息が荒れている。なかなか戻りそうもない。

学校にはなんとか間に合ったけど、やっぱり聖亜には追い付けなかった。

遅刻寸前だから、すぐ教室行かないとショートホームルーム始まってしまう。

聖亜に謝るの、昼休みまでできない。

「おはよう。高瀬さん」

急いで上靴に履き替えていたら、後ろから聞き慣れない声があった。

「え？ ああ。お、おはよう……？」

振り返ると、そこには同じクラスの女子が1人立っていた。

私は面喰らった。クラスでは1匹狼で、孤立していると云っても過言ではない私。入学間もなくなら^{こんにち}まだしも、今日になって私にわざわざ挨拶してくる人なんて居なかつたから。渚君以外は。

あれ？ この子……、その渚君ファンで、私を毛嫌いしてた娘だ。なんで突然、挨拶なんか？ 悪いけど、気味悪い。

その時、鈍い打撃音が遅刻寸前なせいで人気のない玄関に響き渡る。と同時に、私の後頭部が鋭い衝撃に襲われた。

何が起こつたのかが理解出来ない。

視界が歪み、白くなった。次の瞬間、頭に広がる激痛の波に飲まれ、意識は闇へと引きづりこまれた。

意識を失う刹那。

妙に冷静に事態を理解した自分がいた。

渚君ファンに襲われた、と。

【7】
終了

8 (前書き)

もし

待って下さっている方がいるのであれば

またもお待たせして すみません

とりあえず

どんなに更新が遅くとも
相当なことがない限り 更新はやめません

できる限り頑張ります

では

もし良ければ

痛い……。

頭がガンガンする。

私、殴られて？ 気絶、したのかな……？

ゆっくりと目を開けて辺りを見渡す、けれど真っ暗でよく分からない。体制はうつぶせ状態。動こうとしても、手足が言うことを効かない。縛られてる。それに、殴られた部分の痛みで動く気力もない……。

ここはどこかな？

キーンコーンカーン……。

少し遠くでチャイムが聞こえる。遠くって、ここは学校じゃないのかな。それともスピーカーのない部屋？ 今のチャイムは、1時間目始まりのチャイム？ 終わりの？ それとも2時間目？ 3時間目？

わからない。

これは、渚君ファンからのいじめだろうか？ さっき、私に挨拶してきた娘は渚君ファンの娘だった。多分……、いや、絶対、その娘と私を殴った人はグルだろう。

なんだって、私がこんな目に合うの？

「ん……？」

気絶してボヤけていた頭がはつきりしてきた。それで気付いたけど、なんか体濡れてる……？ 水でもかけられた？

って、あ、あれ……！？
服、服は……？ 制服は……！？

ちょ、ちょっと待って……。まさか。
少しづつ目は肥えて来てる。だけど、まだ良くは見えない。

ちょっと、冗談じゃないよ。まさか、まさか……。っ。

気付いた時には怒ってた。こんな理不尽ないじめにあつて。
高校生にもなつてこんな幼稚なことされて。だけど、時間が経つにつれて、それは不安へと変わって行く。

必死になつて目を凝らしてた。そして、足の辺りを見たとき、妙なことに気が付いた。

「え、ちょっと……」

受け取る相手もないのに表に出した言葉は、闇の中に飲まれていく。

「まさか、これ……」

最初は、いじめで良く聞く、脱がされて云々かと思った。だけど、これは、それどころの話じゃない……。っ。

「ちょっと、冗談じゃない」

さっきの『冗談じゃない』とは意味が違う。

「ねえ、冗談でしょ……？」

受け取ってくれる相手もないのに、私は敢えて声をあげた。助けを求めて声をあげた。

「ねえ、やだ。ねえ……っ」

目は肥えては来てるけど、こんな暗闇の中ではつきりと見える訳はない。よくは、見えないけれど、これは間違いない。足が言うこと効かない感覚も、よく感じると足首にある紐のせいだけではない。足全体が、思う様に動かせない。足と足がくっついてるかの様な……。

間違いない。

これは、足が魚に。いや。

私が、人魚になってる。

嘘……っ！

なんで？ 濡れたから……？

私はやっぱり、人魚なの？ 人間じゃないの……？

不安、なんてものじゃない。恐怖にも似た様な物が私を襲う。さっきの娘達、私を殴った娘達は見たんだろうか。こんな風に……なつた、人魚になった私を……。

助けて……。

聖亜なら、無断私が休むなんてことはないし、変だっと思ってくれる？

渚君なら、私が居なかつたら探してくれる？

「ねえ……、誰か」

弱々しく発した声は、ただ闇に飲まれていく。

「誰か、助けて……」

ここは、どこなんだろう。学校の中なのかもわかんない。ちょっと動くと、どこかこっか何か当たる。物置みたいな感じかな。だけど真っ暗で、目は肥えてきたけど、何かあるのはわかってても何かあるのかはわからない。

どうにか、起き上がれないかな……？

「よっと」

ふう。起き上がった。固い床にうつぶせは、少しキツかった。

一息ついて、もう一度辺りを見回す。視点が高くなったおかげで、さっきよりは視界が広がった。

なんだかはわからないけれど、背中にはよしかかることの出来る何か。肌触りで、段ボールかな？ その他にも、積み上げられた段ボールの様なもの。その向こうには棚？ 見上げると、天井は低く感じる。やっぱり、どこかの物置なのかな。

一通り観察を終えて、視線は私自身に向く。目に入るのは、一番見たくない足。魚の尾になった足。

マジマジと見て、視線を逸らす。深い溜め息。溜め息のせいで、その場が静まり反った様な気がした。静寂が押し寄せる。

人間ではない私の、孤独感の様に静寂が襲ってくる。

早く、誰か私がないことに気付いてよ。

って言っても、無理だろうな。私、一匹狼で、ひねくれてるから友だちいないし。そもそも、友だち作ろうとすらあんまりしないし。こういう時に、駆け付けてくれる人なんていない。

いや、聖亜、渚君。

2人なら来てくれる？ 見付けてくれる？

「誰か、見つけてよ……」

敢えて、言葉に出してみた希望。それにより、一つ気がついた。ハッとした。

ちょっと待って。こんな姿を、こんな『人魚』なんかになつてしまっている姿を、あの話知ってる人以外に見られたら……、どうなる？

「嫌……っ」

思わず、声に出た。全身鳥肌が立つ。寒気、恐怖、不安。いろんなものが爆発した。

他の人に見られたらなんて、想像しただけで、それはもう大変な事態に……。

怖い……。

これ、確か乾かすと元に戻るんだっけ。でも、こんな閉めきった空間でそう簡単に乾く訳もないし。

怖い。

凄く怖い。他の人になんて見られたくない。

あ。駄目だ……。泣きそう。

「誰か、助けて……」

怖い。どうしようもなく怖い。

「ねえ、誰か……っ」

誰か……？

違う。『誰か』じゃない……っ。

「聖亜、渚君……」

思わず口から溢れた2人の名前は、ただ闇に飲まれて行く。2人の名前を呟いた途端、私の頬を一筋の涙が伝っていった。

駄目だ。もう、堪えられない。

今まで抑えていた涙が一気に溢れ出した。あとはもう止どまることを知らずに溢れ続ける。頬を伝い、胸元に落ち、足へと流れて行く。

「助けて。渚君、聖亜……」

もう嫌だよ。どうして私がこんな目に合うの？ 怖い、怖いよお

……っ。

いじめにしても、人魚になってしまいうことに関しても、私何もしてないのに。何も悪くないのに。

「助けて。ねえ……、助けて」

受け取ってくれる人もいないのに、口に出す。真っ暗で無音の中、頭の中だけでこんなことを考え込んでいたら壊れそうだ。自分の声でもいいから音が欲しい。

でも、もう大分限界。

ここはどこ？　なんで私がこんな目に合うの？　あの娘達は、殴ってきた娘達はこの姿を見た？

もうやだ。

やだよ。

助けて、助けて……っ！

声が届く。そんなことは考えてもいないけど。それでも、声に出さずにはいられなかった。叫ばずにはいられなかった。いつも、私を気にかけてくれている2人に。SOS。

「助けて……、助けてっ！

な、渚君っ、聖亜ーっ！」

「明日菜っ」

「明日菜ちゃんっ」

……え……？

私が思わず叫んだ瞬間、勢い良く戸が開く音が響き、私の回りを光が包んだ。そして、私を呼ぶ2人の男の声。いや。2人の男、なんて言わなくても。

今まで真っ暗だったのに急に明るくなったせいもあり、逆光のせいもあり、涙目のせいもあり。2人の男の姿はシルエットとしてしか捕らえることができない。だけど、この2人は……っ！

「大丈夫か!? おま……、なんでんな格好にっ」

「明日菜ちゃ〜んっ！ 大丈夫!？」

そう。

「渚君、聖亜あ……っ」

もう、何も考えなくて。ただただホッとするばかりで。安堵するばかりで。

私はただ、しがみつくなかのかの様に、2人の胸に飛び込んだ。

「お前、なんで人魚になつてんだ……?」

「わかんない。目が覚めたら、体濡れてて……、良く見たら人魚に……」

私は、なかなか止まらない涙を必死に拭いながら答える。そんな私の頭を聖亜は軽く撫でる。それからボソツと言う。

「こりゃ、体乾くまで身動き取れねえな」

確かに。いつになったら、乾くかな……。

そういえば。

「ねえ、ここ何処……？　なんでわかったの？」

「ここ？　ここねえ、南階段下の地下物置だよ。でね、僕は明日菜ちゃんの気配追って辿り着いたんだけど。」

「なんでこんなことに……っ」

「俺派と天原派の奴らの仕業」

「は？」

渚くんの声を遮り、聖亜が口を開いた。何やら怒った口調で。目も鋭くなっている。

「俺がここに来れたのは、俺派の奴らで行動が妙だった奴らをしばいて、口割らせたからだ」

聖亜が腕を組みながら怖いことをさらりと言う。なんか、その状態が想像付くから怖い。そんな義理もないし、様を見ると言えばそうだけど。その娘達が少し哀れ。だって本気で怒った聖亜は私でも怖い。

「どうやら、俺のファンだって奴らと天原のファンだって奴らがグルになったみたいだな。まあ、思いつきり風見先生に言いふらして来たから、今ごろは先生にしばかれてるぞ」

やっぱり、渚君ファンの娘達の仕業かなっていうのは間違いじゃなかったか。しかし、聖亜ファンの娘達まで絡んでいたとは……。本当、なんで私がこんな目に合わなくてはならないのか。彼女達は男のことしか考えることないのかな。こんなことやってるから、ファン止まりなんだってことに気付かないのかな。

「ねえ、明日菜ちゃんのこの姿……。その娘達に見られてるんじゃないか……」

渚君が心配そうに呟く。

そう。それが、一番心配。もし、見られていたら、どうなるか。想像もしたくない。

「いや、多分見られてねえよ」

私達の心配をよそに聖亜があっさりと言う。その瞳は、確信すらしている。その自身の真意もわからなく、言葉なく聖亜の顔を見上げる私を、聖亜は優しくなでながら言った。

「あいつらの反応見たら……。見てねえだろうなと思う。もし、この姿見てたら騒ぐだろ」

聖亜、後半はひどく言い難そうに眉を下げた。でも優しい顔は崩さない。……。気を、使ってくれているんだろうなあ。私、今、人魚の話に敏感なことを一番理解してくれている人だし。

「うーん……。なんでかな」

不意に渚君が首を傾げる。

「何が？」

「明日菜ちゃん、水、かけられたんだよね？」

「多分……」

「人魚って本来、水道水じゃ人魚にならないんだよ」

「へ？」

私と聖亜が一呼吸置いてから同時に反応した。こんな新事実。しかも聖亜も初耳なことなんだ。

「なんで反応しちゃったのかなあ。まあ、まだ完全に人魚って訳じゃないのかな。だから普通の水にまで反応して？」

あ、そして普通の水だから反応に時間かかってあの娘達はこの姿見てないとか！」

首を傾げ、何やらブツブツ呟く渚君。最後には何やら自分で納得したらしく手をパチンと打ち鳴らす。

人魚、か……。

私って、やっぱり人間じゃないのかな。実際、私は今人魚になってしまっている訳で。人間ではない。

これは、夢？ 幻？ そうだよな？

そうであって欲しい。

私は人魚なの？ 腰から下は魚で、上は人間の。

上は人間……。

ふと、衝撃的なことに気がつく。息を飲む。

私は、もの凄い勢いで2人に背を向けた。突然の私の行動に2人は疑問符を投げ掛ける。

「明日菜？」

「どしたの？」

「な、なんでもない……っ」

慌てて首を振る私に、渚君と聖亜が首を傾げる。

そういえば私、上半身、素っ裸なんだ。

一気に体温が上がっていく。一気に顔が真っ赤に染め上がる。なんで今まで気付かなかったの、私は。なんで平気だったの、私は。

そして、この2人にしても、なんで平気なの？

そういえば、レーネさんが人間から人魚に戻った時は、服は溶ける様になくなっていったけど、人魚から人間になる時は？

「ね、ねえ……」

私は2人に背を向けたまま、両手で胸を隠しつつ呟いた。「あ、あのさ……、人魚から人間に戻る時って、ふ、服はどうなるの？」

「あ？ 服？ ああ、それは人間に戻ると同時に人魚になる前の格好に戻る……。って、お前、今服着てないこと気にしてんのか？」

聖亜は軽いため息をつく。

なんて失礼な態度。

「あ、当たり前でしょー！？ なんつであんた達そんな涼しい顔してられるのー！」

私は片手で胸を隠しつつ、顔だけ振り向いて怒鳴った。思いつきり指差して。

私は、こんなに火が出る程恥ずかしいのに、そんな他人事のように言われてしまったては腹も立ってしまう。が、2人はあっけらかんと答える。

「だって、人魚は皆こうだし……。ねえ？」

「ああ」

この態度は、本当に何も気にならないんだろうな……。だけれど、私は気になる。平気じゃない。見目を気にするということはあまりしない私でも、さすがにそのくらいの恥じらいはある。2人も、少しは私の気持ちも考えてくれてもいいのに。早く、乾かないかな。

その直後、不意に私の体を何か包む。覆うというか……。不思議な感覚に私は視線を下げる。すると目に入ったのは、制服。続いて、私の足。

「戻った……？」

尾は人間の足に。制服もきちんと着ている。

私は立ち上がり自分の体を見回す。そして、バタバタと手で触り感触で人間であることを確かめた。自分自身の足であることを確かめた。

「戻ったーっ！！ 私は人間ーっ！」

「わかった。わかったから落ち着け……。とりあえず教室戻るぞ」
受かれて叫ぶ私に、聖亜は軽く呆れ顔。
そして、手をポンと私の頭に置く。

あ……。

聖亜の手の温もりで思い出した。そういえば私、聖亜に謝ろうと
していたんだった。

言わなくては。早く言わないと、こっぴつことはどんどん言い難
くなってしまふよね。

勇気をふり絞って、私はつんと聖亜の袖のすそをひっぱった。

「ん？ なんだ？」

聖亜は顔だけで振り向く。なんだか、顔見れない。これって、やっぱりきつと……。私、後ろめたいんだよね。

私は、聖亜と目を合わせられなくて、聖亜の背中に額を押し当てた。そして、深呼吸。意気地のない私自身の背中を、押す。

「明日菜？」

「聖亜。あの……、ごめんなさい。」

昨日のこと

私の言葉を聞いた瞬間の聖亜の身体、不意に力が入った。肩を張る。

「気にしてねえよ……」

聖亜はそう言うと、私の頭にポンポンと手を置く。軽く、そつぽを向いて。私の頭の置かれた手は、なんだか……。限り無く優しくった。

「えー？ なんのことー!？」

「テメーには関係ねえ」

「えー？ 何さ？」

割り込んで来た渚君に、聖亜はいつもの調子で返す。

なんで……。怒らないの？ 聖亜。

私、かなり酷いことしてる。残酷なことしてる。怒っていいんだ

よ？　むしろ、怒ってくれればいいのに。

こんな簡単に許されてしまうと、逆に辛いよ。

許されてしまったけれど……。あの、強張った聖亜の背中。気にしてない訳は、ないんだよね。

罪悪感が余計に強くなる。胸がキリキリ痛む。

ねえ、聖亜。私なんかの、どこが良かったの？

「ほらっ。ボサツとしてねえで教室戻るぞ」

聖亜が私の背中を押す。力強く、優しく。

いいのかな？

私、聖亜の彼女でいいのかな。

「そついえば、今何時間目？」

教室まであと少し。人影なく、静まり返って……。はいない廊下。人はいないが、各教室はかなり騒がしい。そんな中を歩いていてふと気になった。

もしかして休み時間？

そんな中、渚君が明るく言う。

「3時間目のど真ん中！」

「え……。2人とも授業は？」

「フケた」

聖亜が軽く言い放つ。そんなに軽く言わないで欲しいなあ。それにしても、3時間目。そんなに経ってたんだなあ。一体、どれだけ眠ってたのかな。

そして、今現在3時間目真つ直中。それって……。

「教室、入り難いんじゃない？」

「大丈夫だと思うぜえ？ 犯人共は今、先生に呼び出し食らってるだろうから、授業になってないと思うぜ？」

犯人……。まあ、いきなり襲いかかって来た訳だから、その表現は間違つてない。犯罪だよな。

さつき、聖亜が先生に言いふらして来たって言うていたし、今は自習になって各教室が騒がしいのかな。

「お？ 高瀬つ、無事だったか！！」

前方の私のクラスのドアから見える人影が言った。

「風見先生。はい、まあ、一応は」

風見先生が心配そうな顔で駆け寄ってくる。そして、そつと頭に触れる。力を加えない様にそつと。

「殴られたんだろ？ 大丈夫か？ 保健室行くか？」

ああ、そうだった。なんだか殴られたことを忘れていた。人魚の事でいっぱいいっぱい。

そつと、自分でも触れてみる。確かに、こぶは出来てる。触れば痛いし。でも、歩いててもフラフラしないし、何せ忘れていたくらいだし。

「大丈夫です」

「そうか？ 無理すんなよ？ そしたら……、ちよつと悪いが生徒指導室来てくれるか？ あ、天原と立花も」

風見先生は真剣に、だけれどどこか申し訳なさそうに言った。

呼び出し、か。面倒なことになってしまった。私、ただの被害者なのに。まあ、被害者だからこそだけ。

生徒指導室。

張り詰めた空気が流れている。先生は3人。私の担任の風見先生と、学年主任と教頭先生。そう言えば、風見先生って生徒指導の先生だったはず。

風見先生は生徒指導室の真ん中に座り、犯人達は窓側に立たされている。ちなみに、同じクラスの娘が3人、顔だけなら知っている他クラスの娘が3人の計6人。こんなに、いたんだなあ。

学年主任と教頭はホその娘達の隣に立っている。私達は、風見先生の後ろ、ドア近くの椅子に座らされた。

暗闇の地下物置から生還して来た私に、犯人達の痛いほどの視線が注がれている。

先生達の前だと言うのに、更に言えば呼び出されてお説教を受けている最中だと言うのに、その視線はあからさまに嫌そうで刺がある。

「……で？ お前らのアイドルと化してる天原と立花を独り占めしてる高瀬が気に食わなかった……、と？」

風見先生が軽くため息ついて言う。ホシ達はただ無言で頷く。風見先生の、溜め息は軽かったけれど、表示は心底呆れ返っている。

本当に、呆れる。私も溜め息をついた。あまりに幼稚でくだらない理由。小さな子どもが使いたいおもちゃを使われていたから癩癩を起こした、と何が違うの？ なんて短絡的なのだろうか。たかがそんなことで殴られて、気絶させられた私って……。

深く溜め息をついて、もう一度犯人達の顔を眺める。

あれ……？ そういえば、賀川ルイがいない。意外な気がするけれど、今回は関係ないのかな？

「高瀬」

「え、あ、はい？」

不意に風見先生が私を呼ぶ。

「ちょっと聞くが、お前と天原の関係は？」

「ただのクラスメートです」

「だったら天原君に近付くのやめ……っ」

「ああ、もう、うるさいっ！ お前ら黙ってる！」

風見先生の質問に即答した私の言葉に、犯人達はヒステリックに叫びだす。そこに風見先生の喝が入る。

なんだか、全然反省の色が見られないな。この娘達。反省していたら、こんなにいちいち叫ばないはず。

「明日菜ちゃん。酷い……」

「天原、お前も黙れ」

ポツリと言った渚君に風見先生は呆れる。

渚君も……、ことの深刻さをわかっていない気がする。軽はずみな行動で事態をより面倒にしていることが多いし。

「よく言っわよ」

その時、不意に響いた女の子の声。生徒指導室の中の誰かが発した訳ではない。声は私の後ろから。ドアの向こうから。

この声。確か……。

ガチャリと音をたて、ゆっくりとドアが開く。

「失礼します」

そう言っに入って来たのは、あの賀川ルイ。突然のことに面食らっている先生達。賀川はそんなことはおかまいなしに堂々と入って来る。そして、スツと立ち止まったのは、私の目の前。

やっぱり、賀川ルイも何か絡んでる？

「高瀬さん？ あなたねえ、あれでただのクラスメート！？ 何言ってるのよ！？」

「え。ちよっ……」

「見てりゃわかんのよっ。あんたが天原君と立花君にふたまたかけてるってことぐらい」

「はあ！？　なんか誤解して……」

「何が誤解よ！　そんな風にしか見えないのよ！　いい加減に……」

「うるさいっ」

凄いい勢いで私に詰め寄る賀川に、風見先生と聖亜と渚君が同時に怒鳴った。流石の賀川もビクンと体が反応。風見先生、聖亜、渚君の順に見回し、黙り込んだ。

見ると、風見先生もさることながら、聖亜と渚君の表情が凄い。息を飲む程、鋭い目。全身で怒っていることを感じる。賀川ルイの顔は、顔面蒼白。正にそんな感じ。

「明日菜が俺と天原にフタマタかけてるだあ？　冗つ談じゃねえ！」

「明日菜ちゃんはフタマタかける様な娘じゃないよっ！」

「お前らも黙れ！」

苛立たしげに次々と言う聖亜と渚君に、風見先生がまた怒鳴る。やっと生徒指導室内は静かになる。なんだか、当の本人である私が口を挟む隙がない。

「じゃあ、改めて聞くが」

風見先生が軽く溜め息つきながら口を開いた。「立花と高瀬の関係は？」

少し、言葉に詰まる。別に付き合いを隠す気もないけれど、こつ、先生という人に面と向かって聞かれると答え難い。

「俺達は……」

私が一人思い悩んでいると、聖亜がボソツと言う。それから、一瞬の間。そして何か決心したかの様に拳に力を込めた。

「はとこ兼幼馴染み兼……、付き合ってます」

聖亜がはっきりと言う。少しも恥ずかしりもせず、堂々とでも、あの間は何？

風見先生は『付き合っている』『ことよりも』『はとこ』『であることに驚いている。』

「あゝあ……。はっきり言うなあ」

渚君が不意に口を開く。天井を見上げ、大きく溜め息をついている。

「天原、お前と高瀬はなんでもないんだろう？」

先生が改めて渚君に問う。すると渚君は、視線を天井から元へ戻し、再び溜め息。

とてつもなく深い溜め息。

「まあ、確かに。ただのクラスメイトだって言ったらそうですけど、でも僕は明日菜ちゃんが好きですよ？」

何を……。

誰もがしばらく反応できなかった。渚君の口から普通に出てきた、凄い発言に。何だってそんなことを平然と言えるの？ 渚君は。先生方の前で、こんなに何人もいる前で。

「だ、騙されてるよっ！ 天原君も、立花君もっ！」

「そうだよっ。相手にしない方がいいよっ、高瀬さんなんかっ！」

犯人達は堰を切った様に口々と叫び出す。

『騙されてる』とかなんとか、この娘達の反応を見てると私の評判って最悪なんだな。

反応達に再び風見先生の喝が入り、しゅしゅ静かになる。と、ほぼ同時に私の隣、渚君の方から椅子の動く音がした。ふと見ると渚君がすっと立ち上がっている。凄く真剣に、怒った顔で。

「君達が僕を思ってくれるのは嬉しいけど、僕は明日菜ちゃん以外は好きにならないよ？ これ以上、明日菜ちゃんいじめたら、本気で恨むからね？」

凄いことを、言われている。

言葉を理解するのに時間がかかった。理解したら、今度は受け止めきれない。体中の血液が逆流を始める。

どうして、私なんかをこんなに？ 身体が、熱くなる。

「嬉しい？ 人が良すぎんじゃないね？」

渚君の言葉の後、聖亜が呟く。豪快に溜め息をついて、吐き捨てるかの様に。そして、椅子を倒す様な勢いで乱暴に立ち上がる。その瞳は渚君同様、凄く真剣に怒った顔で犯人達を睨みつけている。

「テメエらが俺をどう思ってたこっちゃんえよ。それよか、こんなくだらねえことしてるテメエらに明日菜をとやかく言う権利あんのか？ 俺からすれば、こんなくだらねえテメエらよか明

日菜のが数万倍いい女だぞ？」

照れもせずに、紡ぎ出される言葉。私の身体に染み込む。広がって行く。私が、言葉に詰まる。

なんで？

この2人は私なんかをこんなにも真剣に。鈍い私でも、こんなにまで真剣な想いを感じれるほど……。

生徒指導室の中は静まり返ってる。風見先生ですら啞然として私達を眺めてる。犯人達は、何も言える言葉が見付からない様だ。息を飲み、呆然と立ち尽くしてるだけだ。それでも、視線だけは悔しそうに私に向けられている。

私も、反応できない。ただ、呆然としている。

私には勿体な過ぎる言葉の数々に、理解するだけでやっと。

「それじゃあ、失礼しますっ」

「失礼します。明日菜、行くぞっ」

聖亜に背中を押され、私は聖亜と渚君と共に生徒指導室を出た。

呆然、啞然。とにかく驚いて頭が働いてない。頭の中は真っ白。でも身体中の血液は逆流していて、頬は赤い。体は熱い。何も考えられなくて、犯人達や先生達の痛いほどの視線も対して気にならな

い。
どうして。どうしてこの2人はこんなにも私を？ 何が良かったの？ どうしてここまで想ってくれるの？

なんだか体が震えた。感動、って言うのかな。

不覚にも、涙が出た。

それから。犯人である女の子達は1週間の停学となった。ここまでのことをされているから当たり前だけど、互いの親も出てきて大変な騒ぎとなった。

そして、そんな彼女達が停学中でいない平穏なある日。の放課後。

「姫様ー！」

私と聖亜、そしてムリヤリに近い状態でついて来た渚君とで帰ろうとした矢先。聞き覚えのある男の声が校門前に響いた。

「姫様っ！ お久しぶりです！お元気でいらっしやいましたか！？」

そう。私をこの特徴的な呼び方をする、水奈本先生。そういえば久々に会う。

「み、水奈本先生……。なんでここにいるんですか」

「そうだよっ！ しかも突然っ」

「貴様っ！ どっから沸いて出たー！」

「風見先生に用があつて……。つて、姫様っ！ お元気そうで何よりですがっ、未だにアクアの餌になり続けたままなのですかー！」

と、水奈本先生は私の手を握りつつ言う。

なんだか、懐かしい台詞。そして、あまに聞きたくはない台詞。ため息が出てしまった。

せつかく、賀川ルイたちがいない平穏な日が来たと思ったのに。なんだかなあ。

「……………海吏？」

何処からか女の人の声が響く。『海吏』？ ああ。確か水奈本先生の下の名前だった様な……。何の気もなしに振り返る。と、そこにいたのは……………。

「さ、砂賀野さん!？」

であった。私・聖亜・渚君の3人は思わず叫ぶ。

『海吏』って。砂賀野さん、水奈本先生を呼び捨てにしている？ し、知り合いなのかな。

2人が知り合いでもおかしい訳ではないのだが、なんだか意外な2人に思える。更に、下の名前を呼び捨てにできる程の間柄。一体どんな関係？ 聖亜と渚君もポカンとして目を丸くしてる。私に至っては軽く混乱。そして、水奈本先生も呆然として目を丸くしてる。私の手を握る力も弱り、私の手は水奈本先生の手から滑り落ちる。

それから水奈本先生はボソツと呟いた。衝撃的な言葉を。

「なんで、ここにいるんだ？」

姉さん……………」

姉弟だったなんて……。

学校近くの喫茶店。たった今、水奈本先生と砂賀野さんの口から思いも寄らぬ事実を聞かされた。

「みよ、苗字が違……っ」

「両親が離婚したのよ。私は母方へ、海吏は父方へ。別々に暮らしてるの」

砂賀野さんがサラリと話す。

きよ、姉弟……。

何やらしつくり来ないしピンとも来ない。だけれど、良く見比べたら似てないこともない、のかな……。なんだか世間は狭い。こんなところで妙なつながりが……。しかも前世が人魚の水奈本先生と、その人魚を追いかける新聞記者の砂賀野さんが兄弟って、なんの因果？

「あなたの教育実習、河守高校だったの」

「そう。それより姉さんはなんで学校にいたんだ？」

首を傾げる水奈本先生に、砂賀野さんはニヤツと笑う。そして、おもむろに私と聖亜を指差した。

「この子達を取材してるの」

「……は？」

ニコやかに言う砂賀野さんの言葉。一瞬、目を見開きキョトンとした水奈本先生。直後、顔を引きつらせた。嫌な予感がしたのだろ

う。

そういえば水奈本先生は砂賀野さんに、実の姉に『ライリ』のことかは話していないのかな。

「あ、そう言えば君も関係してるんだっけ？」

砂賀野さんは渚君を指差し、ニヤツと笑う。

「ええと、明日菜ちゃんに聖亜君に渚君でいいのよね？」

綺麗な顔で美しくほほ笑む砂賀野さん。

いつの間にか名前まで覚えられている。パツと見は綺麗な笑顔も私達には怖い。

「んっで俺らの名前知ってただよ」

「あら。あなた達が呼び合ってるじゃない。私の観察眼を舐めないで？」

まあ、だから苗字は知らないけど」

なんだか深いため息が出る。絶望というのか呆れというのか。この砂賀野さんにだけは敵わない、そんな気がしてきてしまった。とてつもなく、大変な人を敵に回してしまったのでは？

「ちょ、ちよつと………？」

不意に水奈本先生が口を挟んだ。

「姉さんっ。どういうことだよ。一体何について取材してた？こんなまだ高校生の子達を掴まえて………」

いつになく真剣な水奈本先生。それでいてどこか神妙で、どこかうろたえて。きつと、疑問系で聞きながらも勘付いている。そんな弟を相手に、砂賀野さんの表情は崩れない。

「御人魚川みとなのの人魚伝説について」

水奈本先生の息を飲む音が聞こえた。直後に、思わず言った感じに立ち上がる。

「何よ？」

「……え？」

「いや。だからってなんで……、この子達を？」

砂賀野さんは水奈本先生の反応に驚いている。こんなに、大きく反応するとは思っていなかった様。やっぱり、『ライリ』のことは知らないんだ。

水奈本先生はなんとか平静を装う。

「偶然見ちゃったのよね。明日菜ちゃんと聖亜君が人魚と話してるのを」

ニコニコ嬉しそうに語る砂賀野さん。そして、水奈本先生の顔から血の気が引いた。もう、平静も装っていられないよね。まあ、砂賀野さんからすると自身の弟と人魚はつながらないとは思っけど。

重たい空気が流れている。私達の間だけ。何を言っているのか、わからず黙り込む私達。砂賀野さんはニコニコ、というよりニヤニヤ。勝ち誇った笑顔。と同時に、弟の過剰反応が気になる様子。

「ねえ、海吏？」

「え、何？」

不意に口を開いた砂賀野さんに、水奈本先生は我に返った様に答える。

「なんであんたまでそんなに深刻になってるの？」

「えっ。あ……、いや」

もはや何も繕えていない水奈本先生。を、砂賀野さんは更に追い討ちをかける。

「ああ。後……、さっき学校の前であんたが言ってた『姫様』って何？」

なんて痛い所を。

水奈本先生はもちろん私も、聖亜も渚君も氷りついた。どうしてこの人は、勘が良いのか運が良いのか。それとも天性の人を見る目？ 毎回毎回、こんなにまでの確に痛いところばかりを突かれていては……。私達に勝ち目なんてあるのだろうか。

「なんで……。っ。そんなこと今関係ないだろ！？」

水奈本先生が少し声を荒げる。が、砂賀野さんは平然としたまま。首を傾げている。

「ホントに関係ないの？ 私も関係してるとは思えないのは確かだけど……。あんたの態度が怪しすぎるんだもん」

嫌だ。砂賀野さんと話していると全てを見透かされている様な。そんな気がしてしまう。砂賀野さんは確かに首を傾げているが、何やら余裕もある様に見える。うつすらと確信しているような目が怖い。

私達は、皆で絶句。ひたすら返す言葉がない。

何を言っても、砂賀野さんが相手では墓穴を掘るだけ？

「『姫様』って、明日菜ちゃんのことを呼んでなかった？

なんていうか、ひっかかるのよねえ。普通の女子高生相手に、しかも海吏の場合、仮にも生徒相手にその呼び方な訳だし。そして、海吏の過剰反応。何より、今みんな絶句してるし」

砂賀野さんが満面の笑みを浮かべる。私達は同時に目を見開き、息を飲んだ。が、声は出ない。

どうしてこんなに勘が良いの？

更に、普通常識的に考えてこんな人魚の話と弟の結び付きなんて思いつかないと思うけれど。砂賀野さんには、そんな常識、通用しないのかな。

「うーん……。明日菜ちゃん、もしかして人魚？」

「な。

んな訳あるかつ！ 良くこの姿を見やがれ！」

とつさに聖亜が反論。逆に言えば聖亜だけ。

「そおよねえ。明日菜ちゃんはどう見ても人間だし……」

聖亜の言葉に、砂賀野さんは首を傾げながら何やらブツブツ言っている。

「あ……っ！」

程なく、砂賀野さんは何かに気付いた様な声を上げた。そのまままた私達をじいつと見回す。

「なんだよ」

聖亜が険しい顔でボソツと言う。眉間には凄いしわが寄ってる。更に声がつもより低く、見るからに不機嫌なオーラを放っている。これは、相当怒ってる聖亜。

「いや、あのね？　なんて言ったら良いのかしら……」

聖亜の怒りなど砂賀野さんにはまるで意味がない。何も気に止めるそぶりも見せず言葉を返す。

「私、実は変な記憶みたいなヤツがあるのよ……」

少しの間を置いて、私達は同時に目を丸くした。『変な記憶の様なもの』？　嫌な、予感……。きっと私達はみんな、同じ想像をしたに違いない。

「産まれる前の記憶……、っていうか。なんか良い言葉ないかしら。……そうだ。

……『前世』？」

嘘……。

砂賀野さんは刺す様な瞳で私達を見てる。が、私達は皆呆然。目を見開き固まったまま。

何を、言い出すの？ この人……。

「私はその記憶はひどく曖昧なんだけど……。聖亜君と渚君、あなた達を見てたら気付いたわ。」

その記憶の中に2人にそっくりな人がいるの」

聖亜と渚君を指差す砂賀野さん。

『前世』に2人とそっくりな人がいた？ 何それ。とんでもなく嫌な予感を掻き立てるこの事態。

もしかして、この人も……？

「だからね、もしかしてあなた達もそれかな？ って……。」

疑問系でありながら、決定されている様な口調。多分、最初は砂賀野さんも半信半疑だったのではないかな。だけど、私達のこの態度が砂賀野さんに自信を与えてしまったんじゃない……。

そのことを裏付ける様に、砂賀野さんは私達を一人ずつ凝視していく。私達の表情を見て、勝ち誇った笑みを浮かべた。全てを確信したかの様に。

改めて私達に問うた。

「ねえ、あなた達も『前世』の記憶あるの？」

【8】
終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4313a/>

The legend of Mermaid

2010年12月19日14時00分発行